多賀城市文化財調査報告書第91集

多賀城市内の遺跡2

―平成19年度発掘調査報告書―

平 成 20 年 3 月

多 賀 城 市 教 育 委 員 会

多賀城市文化財調査報告書第91集

多賀城市内の遺跡2

―平成19年度発掘調査報告書―

平 成 20 年 3 月

多 賀 城 市 教 育 委 員 会

序　　文

特別史跡多賀城跡をはじめとする多くの埋蔵文化財は、本市が長い年月をかけて連綿と引き継がれてきた歴史のまちであることを物語っております。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは、我々の重要な責務であると考えております。そのため、当教育委員会としても、開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適正に保護し、その活用に努めているところであります。

さて、今回報告いたします10件の調査は、平成19年度に国庫補助事業として実施した発掘調査であります。小範囲の調査ではありましたが、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世と各時代にわたる遺構・遺物が発見されました。ひとつひとつの成果は断片的なものでありますが、このような成果の積み重ねにより「史都 多賀城」の歴史が少しずつ紐解かれていくものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、御理解と御協力をいただきました地権者をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成20年３月

多賀城市教育委員会
教育長　菊　地　昭　吾

例　　言

1　本書は、平成19年度の国庫補助事業で実施した10件の調査成果をまとめたものである。

2　遺構の名称は、各遺跡とも第１次調査からの連続番号である。

3　測量法の改正により、平成14年４月１日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るため、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。なお、市川橋遺跡の調査区基準線については、X＝-189,200.000、Y＝13,850.000（南北・東西大路交差点の中央付近）を東西・南北の原点とした。

4　挿図中の高さは標高値を示している。

5　土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参考にした。

6　金属製品のX線透過撮影は及川規氏（東北歴史博物館）に依頼した。

7　本書の執筆は担当職員の協議のもと、Ⅰを武田健市、Ⅱ・Ⅲを村松稔、Ⅳ～Ⅹを武田、Ⅺを島田敬が担当し、編集は武田が行った。また、遺構・遺物の図版作成及び遺物の写真撮影は各担当者が行った。

8　調査に関する諸記録及び出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

凡　　例

1　本書で使用した遺構の種類を示すアルファベット記号は以下のとおりである。

SB：建物　SA：柱列　SE：井戸　SD：溝　SK：土壙　Pit(P)：柱穴及び小穴

SX：道路・河川及びその他の遺構

2　奈良･平安時代の土器の分類記号は『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ－』に従った

3　瓦の分類は『多賀城跡　政庁跡　図録編』宮城県多賀城跡調査研究所　1980、『多賀城跡　政庁跡本文編』宮城県多賀城跡調査研究所　1982の分類基準に従った。

4　本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期存続中に降灰し、承平４年（934）閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考えと（宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』1998)、『扶桑略記』延喜15年（915）７月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考えがある（町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』1991)。当センターでは考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

5　多賀城南面に施工された方格地割りについては、Ⅰ期：東西大路と南北大路が造られ、多賀城南面を蛇行して走る河川を改修するなど、水陸の交通網が整備される時期（８世紀後葉頃）→Ⅱ期：南北大路が拡幅され、東西大路を挟んだ南北１区画分の地割りが成立する時期（９世紀前葉頃）→Ⅲ期：Ⅱ期に成立した地割りがさらに南北に広がり、方格地割りの範囲が最大となる時期（９世紀中～後葉頃）→Ⅳ期：Ⅲ期後半頃に荒廃した地割りを再整備する段階（10世紀前葉以降）と大きく４段階の変遷で捉えることが可能とする見解が示されている（鈴木孝行 「多賀城外の方格地割」 『第32回古代城柵官衙遺跡検討会―資料集―』2006)。本書では、この４時期の区分に従っている。

調査要項

1　調 査 主 体　　多賀城市教育委員会　　教 育 長　　菊地昭吾
2　調 査 担 当　　多賀城市埋蔵文化財調査センター　所　　長　　櫻井清勝
3　調査担当者　　多賀城市埋蔵文化財調査センター　係　　長　　千葉孝弥
研 究 員　　島田敬　武田健市
技　　師　　村松稔
主　　事　　吉田智治
発掘調査員　鈴木琢郎
4　調査協力者　穐元篤仁　魚橋隆宏　小幡誠雄　小幡よしえ　加藤恵美子　熊谷修　高橋正憲　高橋良弘
千葉とき子　蜂谷光一　蜂谷幸男　本間美枝子　久本孝行　木村建材株式会社
5　調査従事者　赤間かつ子　浅野喜久男　内海照夫　大江かおり　大場勝喜　大場孝也　岡本典子
小野玉乃　狩野悌　小松まり　今野晃子　今野和子　佐藤十五　塩井一征　清水亮
下山功喨　杉知子　鈴木政義　戸枝瑞穂　南城美岐子　橋本進　橋沼茂二　原岡緑
平山節子　藤澤拓司　藤田恵子　松田正樹　松戸賢世　柳裕順　渡辺ゆき子
6　整理従事者　遠藤友美　中村千恵子　松崎祥子　村上和恵　横山佳織

№.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員
1	高崎遺跡第62次	留ヶ谷一丁目95番10	平成19年４月９日～４月18日	55㎡	村松
2	高崎遺跡第63次	高崎一丁目15-21、15-49	平成19年４月23日～５月11日	112㎡	村松
3	市川橋遺跡第62次	城南一丁目４-３外３筆	平成19年６月４日～７月20日	174㎡	武田
4	市川橋遺跡第64次	城南二丁目８-４の一部	平成19年９月３日～10月12日	82㎡	武田・鈴木
5	市川橋遺跡第65次	城南二丁目８-４の一部	平成19年９月５日～10月12日	61㎡	武田・鈴木
6	市川橋遺跡第66次	城南二丁目２-８	平成19年９月25日～10月16日	32㎡	武田・鈴木
7	市川橋遺跡第67次	城南一丁目９-１、９-２	平成19年11月27日～12月26日	57㎡	武田・吉田・鈴木
8	山王遺跡第62次	山王字東町浦31- ６	平成19年７月19日～８月27日	91㎡	武田
9	小沢原遺跡第11次	浮島二丁目97- ９	平成19年10月22日～10月25日	22㎡	武田
10	野田遺跡第４次	留ヶ谷二丁目、浮島二丁目	平成19年11月６日～12月11日	262㎡	島田

目　　次

Ⅰ　多賀城市の位置と市内の遺跡 …… 1
Ⅱ　高崎遺跡第62次調査 …… 2
Ⅲ　高崎遺跡第63次調査 …… 7
Ⅳ　市川橋遺跡第62次調査 …… 13
Ⅴ　市川橋遺跡第64次調査 …… 24
Ⅵ　市川橋遺跡第65次調査 …… 33
Ⅶ　市川橋遺跡第66次調査 …… 55
Ⅷ　市川橋遺跡第67次調査 …… 58
Ⅸ　山王遺跡第62次調査 …… 75
Ⅹ　小沢原遺跡第11次調査 ……103
Ⅺ　野田遺跡第４次調査 ……106

Ⅰ　多賀城市の地形と遺跡

多賀城市は、宮城県の中央やや北東寄りに位置し、南西側で仙台市、北西側で利府町、北東側で塩竈市、南東側で七ヶ浜町と接している。市内の地形についてみると、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は松島･塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、標高を減じながら南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相を見せている。沖積地は仙台平野の北東端部に相当する。仙台市岩切方面から多賀城跡にかけての県道泉塩釜線沿いには標高５～６ｍの微高地が延びており、その北側は利府町に跨る低湿地が広がっている。

第１図　多賀城市の位置

本市には40を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端には、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が分布している。南部には海岸線沿いの浜堤上に八幡沖遺跡、東端部には柏木遺跡や大代横穴墓群などがあるものの、その分布は希薄である。一方、市の北側中央付近には奈良・平安時代に陸奥国府が置かれた多賀城跡、中央付近には多賀城廃寺跡があり、これらと強い関連性がある館前遺跡、柏木遺跡、山王遺跡千刈田地区を加えた５カ所が特別史跡に登録されている。多賀城跡南側に展開する新田・山王・市川橋・高崎遺跡や東側に隣接する西沢遺跡などでも、発見された遺構や遺物には多賀城跡と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群として捉えることができよう。

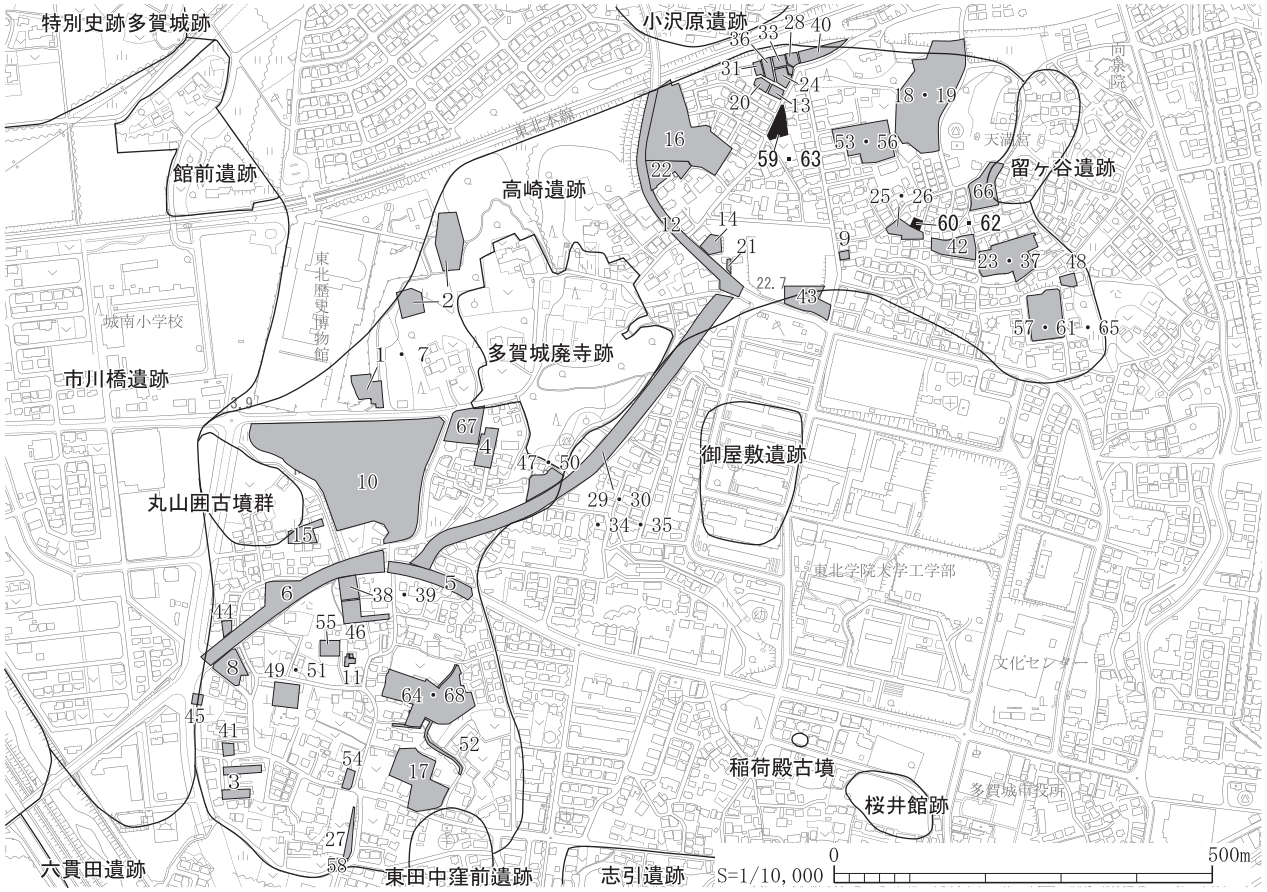
第２図　多賀城市内の遺跡

Ⅱ　高崎遺跡第62次調査

1　遺跡の環境と周辺の調査成果

本遺跡は、本市のおよそ中央部に位置している。地形的には東半部を占める低丘陵の西端部に立地し、その範囲は東西約1.3㎞、南北約１㎞の広さに及んでいる。この丘陵は、松島丘陵から派生したもので、塩竈方面から本市北東部に達したところで、南側と西側の沖積地に向かって枝状に延びている。このため大小の谷が入り組んだ、起伏に富んだ地形を呈している。遺跡の中央部には多賀城の付属寺院である多賀城廃寺跡がある。現在ではこの周辺も市街化が進み、多くが宅地となっている。

今回の調査区は遺跡の北東部に位置しており、標高は22m前後である。周辺では、古墳時代から近代までの遺構・遺物を発見している。古墳時代では、第56次調査で７世紀前半頃の須恵器窯跡を発見しており、多賀城創建以前の状況を知る上で注目される。奈良時代から平安時代では、第26次調査において柱筋をそろえた掘立柱建物跡が発見されており、官人層の邸宅であった可能性が考えられる。また、第12・16次調査では暗渠や外延溝を持つ竪穴住居跡を発見しており、多賀城廃寺に係わる工房の可能性が指摘されている。中世では、第19・37次調査において掘立柱建物等の遺構を発見しており、同時期の遺構・遺物は隣接する留ヶ谷遺跡・野田遺跡・矢作ヶ館跡においても確認されている。近代では、第16次調査で一辺約９ｍもある大規模な井戸跡を発見している。南に隣接する留ヶ谷字影屋敷（現在の中央一丁目）には、太平洋戦争時に海軍工廠に係わる工員養成所及び男子学生寮が配置されており、この井戸はこれらを建設する際に使用された可能性がある。

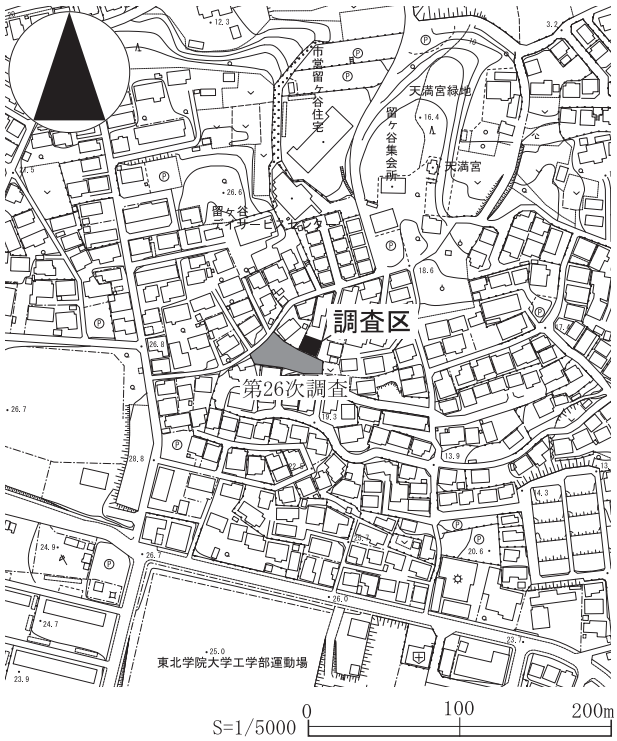


※数字は調査次数　トーンは調査対象地

第１図　高崎遺跡と調査区の位置

2　調査に至る経緯と経過

本調査は個人住宅建設に伴うものである。平成19年１月24日に地権者より当該地における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。その計画では、南に向かって低くなっている当該地を平坦にするため最大約40cmの切土を行った後に、さらに基礎工事に際して21～42cm掘削を行うというものであった。現地表から遺構検出面までの深さは約20cmであることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このことから工法変更により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、それ以外の方法では建物を支える十分な強度が得られないことから、申請された計画で実施することに決定した。なお、当該地の南側では過去に第26次調査を行っており、掘立柱建物跡をはじめとする遺構を発見していたが、一部削平され遺存状態が悪い部分があったことから、遺構の有無や遺存状況を確認するため、平成19年２月20日に確認調査を実施した（第60次調査）。その結果、掘立柱建物跡の存在が明らかになったから、平成19年４月以降に本発掘調査を行うこととし、埋め戻した。その後、平成19年４月３日に、地権者より発掘調査依頼書の提出を受け、４月９日から調査を開始した。



第２図　調査区位置図

調査は、重機によって表土（Ⅰ層）の除去から取りかかった。表土を除去すると直ちに遺構検出面となる地山（Ⅱ層）が現れ、遺構検出作業を行ったところ、第60次調査で確認したSB1653掘立柱建物跡の他小規模な柱穴によって構成されるSB1654掘立柱建物跡とSK1652土壙を確認した。10日に実測図作成のための基準杭を設置し、11日から実測図を作成した。12日と13日に遺構検出状況の写真を撮影し、13日に遺構の埋土を掘り下げ、断面図を作成した。16日に全ての遺構の埋土除去と写真撮影、実測図作成を完了し、器材の撤収を行った。18日に重機による埋め戻しを行い、現地調査の全てを完了した。

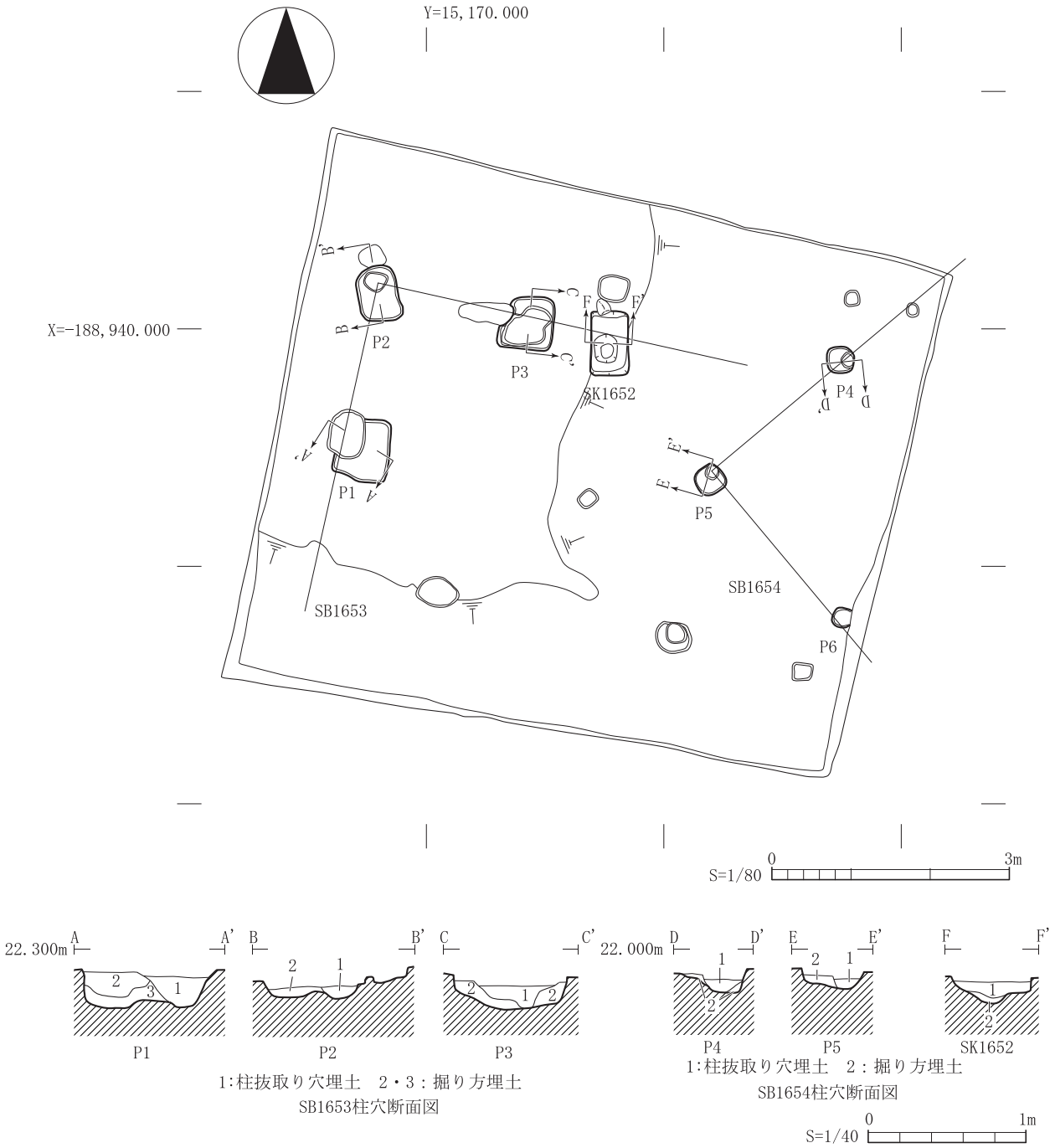
3　調査成果

（1）層序

本調査区は全体的に削平を受けており、表土（Ⅰ層）を除去すると直ちに地山が現れた。

Ⅰ層：表土。厚さは30～50cmで、西側では薄く、東側では厚くなっている。

Ⅱ層：黄色の岩盤である。一部に粘質土の堆積も認められるがそれも含めた基盤層をⅡ層とした。この上面で遺構検出面となっている。



第３図　遺構平面図・断面図

（２）発見した遺構・遺物

今回の調査では、Ⅱ層上面で掘立柱建物跡、土壙を発見した。

SB1653掘立柱建物跡（第３図）

調査区西側で発見した東西２間以上、南北２間以上の掘立柱建物跡である。SK1652と重複しているが、柱穴に直接切合いがないため、新旧関係は不明である。全ての柱穴で抜取り穴を確認した。方向は西側の柱列でみると北で約11度東に偏している。柱間は北側の柱列と西側の柱列いずれも約2.０mである。掘り方はいずれも方形で、一辺63～75cm、深さ10～24cmである。掘り方埋土は岩盤をブロック状に多く含む褐灰色土である。柱抜取り穴は岩盤をブロック状に少量含む褐灰色土である。

遺物は柱抜取り穴から須恵器杯（Ⅰ類）と土師器甕（B類）が出土している。

SB1654掘立柱建物跡（第３図）

調査区東側で発見した東西２間以上、南北２間以上の掘立柱建物跡である。全ての柱穴で抜取り穴を確認した。方向は西側の柱列でみると北で約40度西に偏している。柱間は北側の柱列で約2.２m、西側の柱列で約2.４mである。掘り方は方形で、一辺24～32cm、深さ15～17cmである。掘り方埋土は岩盤をブロック状に多く含む褐色土で、柱抜取り穴は炭化物を少量含む褐色土である。

遺物は柱抜取り穴から土師器甕が出土している。摩滅が激しく、調整は不明である。

SK1641土壙（第３図）

調査区北側で発見した土壙である。平面形は長方形で、規模は長辺82cm、短辺47cm、深さ19cmである。底面はおおよそ平坦であるが、中央よりやや南側が丸く窪んで深くなっており、この部分と南西隅の２箇所で焼け面を確認した。埋土は２層に区分でき、１層は岩盤をブロック状に少量含む明褐色土、２層は岩盤をブロック状に多く含む黒色土である。

遺物は土師器甕（B類）と須恵器甕が出土している。

４　まとめ

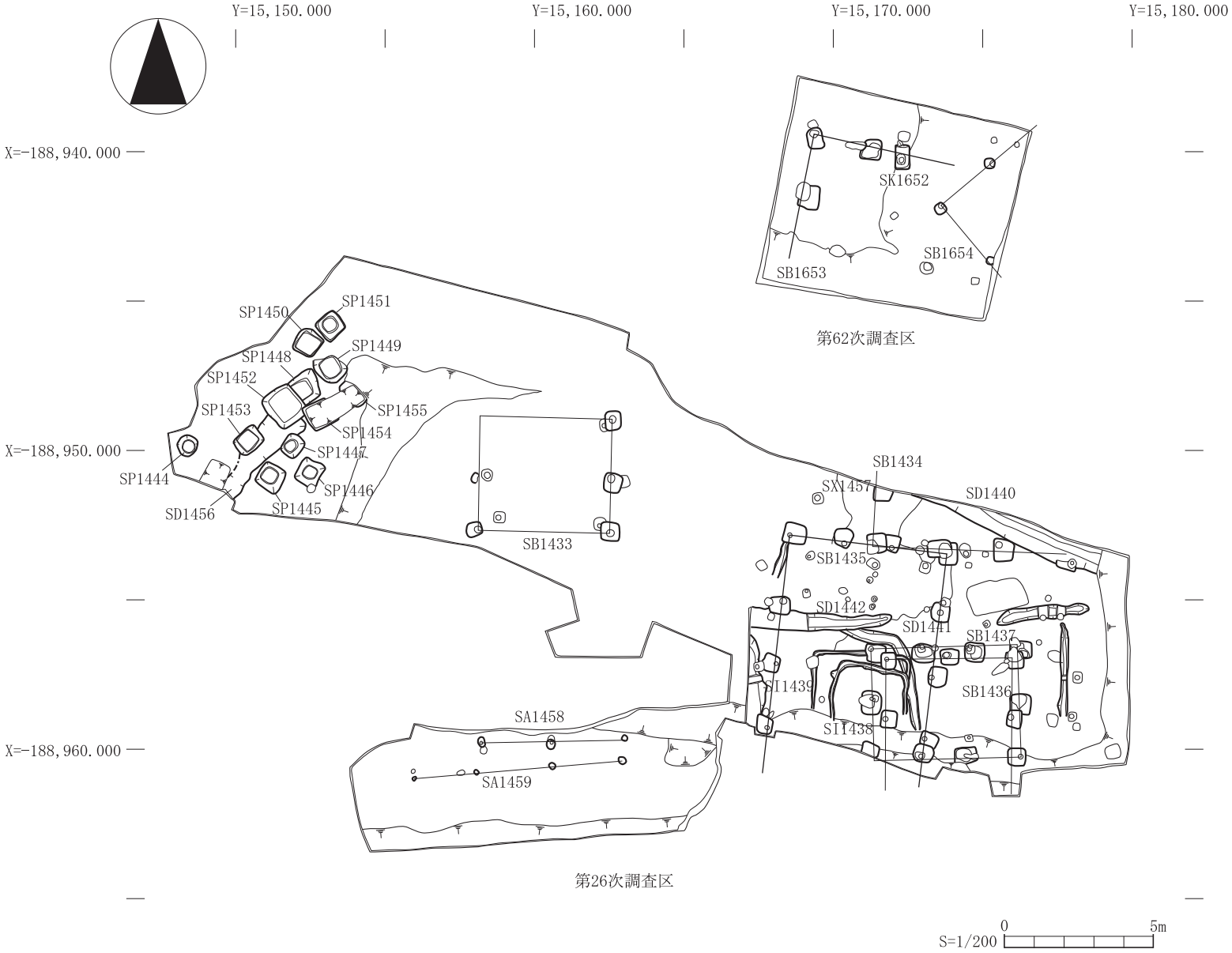
今回の調査では、掘立柱建物跡２棟、土壙１基を発見した。

SB1653の年代については、柱抜取り穴から土師器甕（B類）が出土していることから、上限は８世紀後葉頃と考えられる。また、須恵系土器が全く出土していないことから、10世紀には降らないものと考えられる。ここで、さらに検討を加えるために南側隣接地で行った第26次調査（註）の成果を見てみたい。この調査で発見した５棟の掘立柱建物跡は、重複関係や位置関係、方向から少なくとも２時期の変遷が想定できる。東に偏するSB1435が古い時期のもので、柱筋を合わせ方向がほぼ座標軸に沿うSB1433・1434・1437の建物群が新しい時期のものと考えられる。今回発見したSB1653については、方向が前者の建物に近いことから、SB1653とSB1435は同じ年代の可能性を指摘しておきたい。

SB1654については、柱抜取り穴から摩滅した土師器甕が出土しているが、柱穴の規模が古代のものに比べて小さく、形もやや不揃いである。このような特徴は周辺の調査で確認されている中世以降の掘立柱建物跡と類似している。また、その方向についてもSB1653や第26次調査で発見した古代の掘立柱建物跡とも大きく違っている。これらのことから、この建物跡の年代は中世もしくはそれ以降の可能性が考えられる。

SK1652については、土師器甕（B類）と須恵器甕が出土しているが、いずれも細片であることから、年代は不明としておきたい。

註：多賀城市教育委員会　『高崎・西沢遺跡　－高崎遺跡第26次・西沢遺跡第７次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第63集　2001

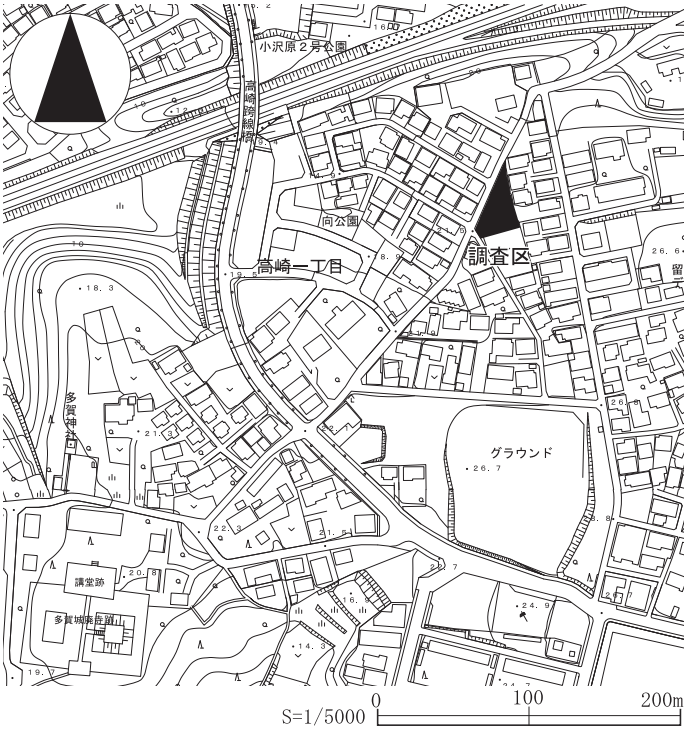


第４図　第62次調査区と第26次調査区

Ⅲ　高崎遺跡第63次調査

1　調査に至る経緯と経過

本調査は個人住宅建設に伴うものである。平成18年９月１日に地権者より当該地における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。その計画では、住宅および擁壁の建て替えと、駐車場の造成を行うというもので、そのうち住宅部分には30㎝の盛土を施すものであった。遺構面の深さは、住宅の現地表から27.５～38.５㎝であったが、道路面は住宅の現地表から約1.１～1.４ｍ低くなっており、擁壁部分は既に壊されている可能性があった。また、基礎工事の際に掘削する深さは、住宅部分では盛土後の地面から37㎝、擁壁部分では道路面から深さ43㎝、駐車場部分では盛土後の地面から1.65ｍであった。したがって、基礎が遺構面に達しない住宅部分と、既に壊されていると考えられる擁壁部分は工事立会いとして行うこととし、駐車場部分は遺跡への影響が懸念されることから確認調査を行うこととした。



第１図　調査区位置図

擁壁は道路側にせり出し、倒壊する危険性もあったことから、他の部分に先駆けて工事を着工することとなった。これにあわせて平成18年９月29日に工事立会いを行ったところ、南側で柱穴を発見した。（第59次調査）。

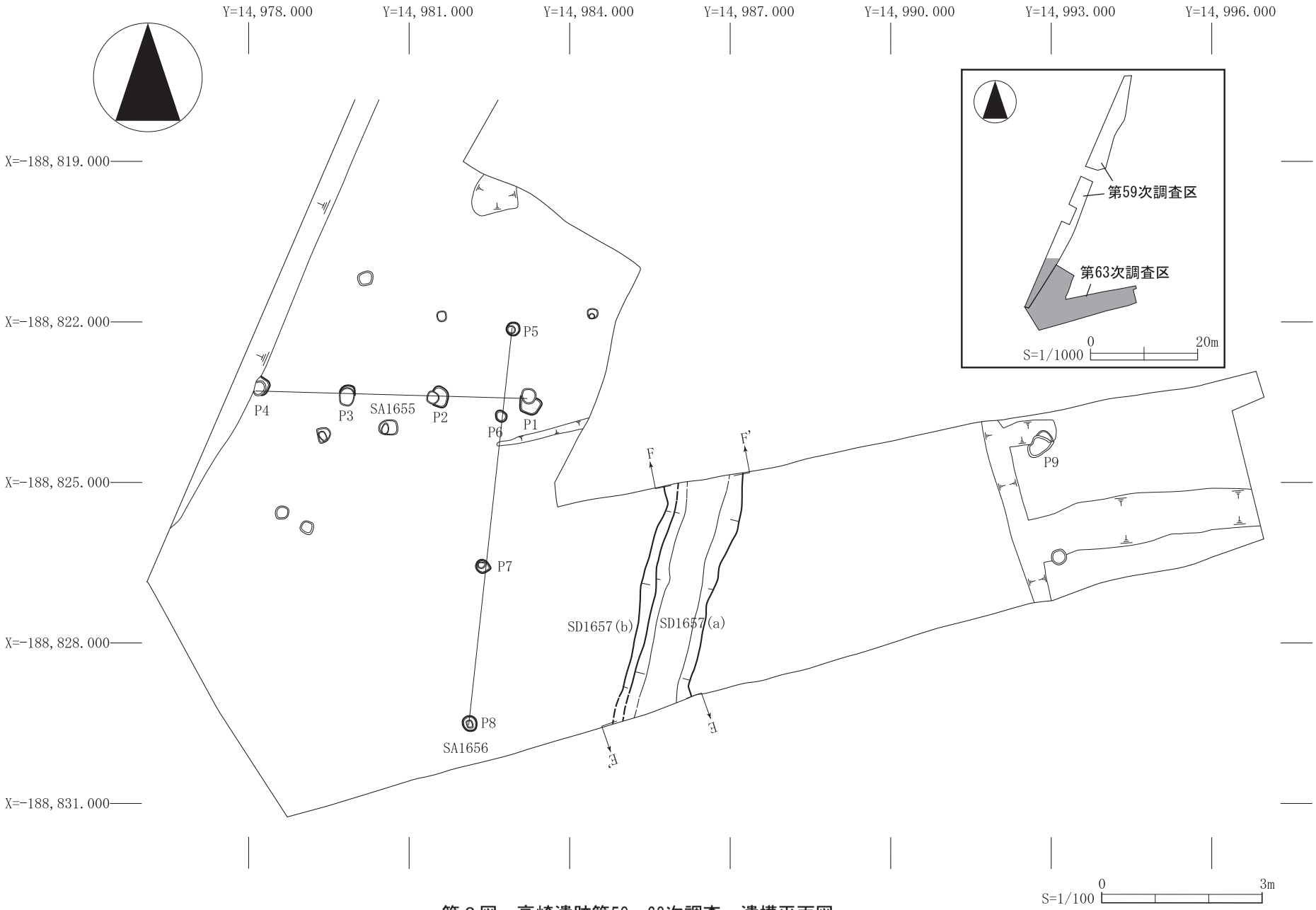
駐車場部分の確認調査は、平成19年４月13日に地権者より発掘調査の依頼を受け、４月23日から調査を開始した。23・24日に重機によって表土（Ⅰ層）の除去を行った。表土を除去すると直ちに基盤層となるⅡ層が現れ、この面で柱穴と溝跡を発見した。以後、写真撮影や図面作成などの記録の作成を随時行った。５月８日には発見した柱穴の一部が柱列であることを確認し、10日に補足的な測量や図面の修正を行った。11日に器材を撤収して、現地調査の全てを終了した。

2　調査成果

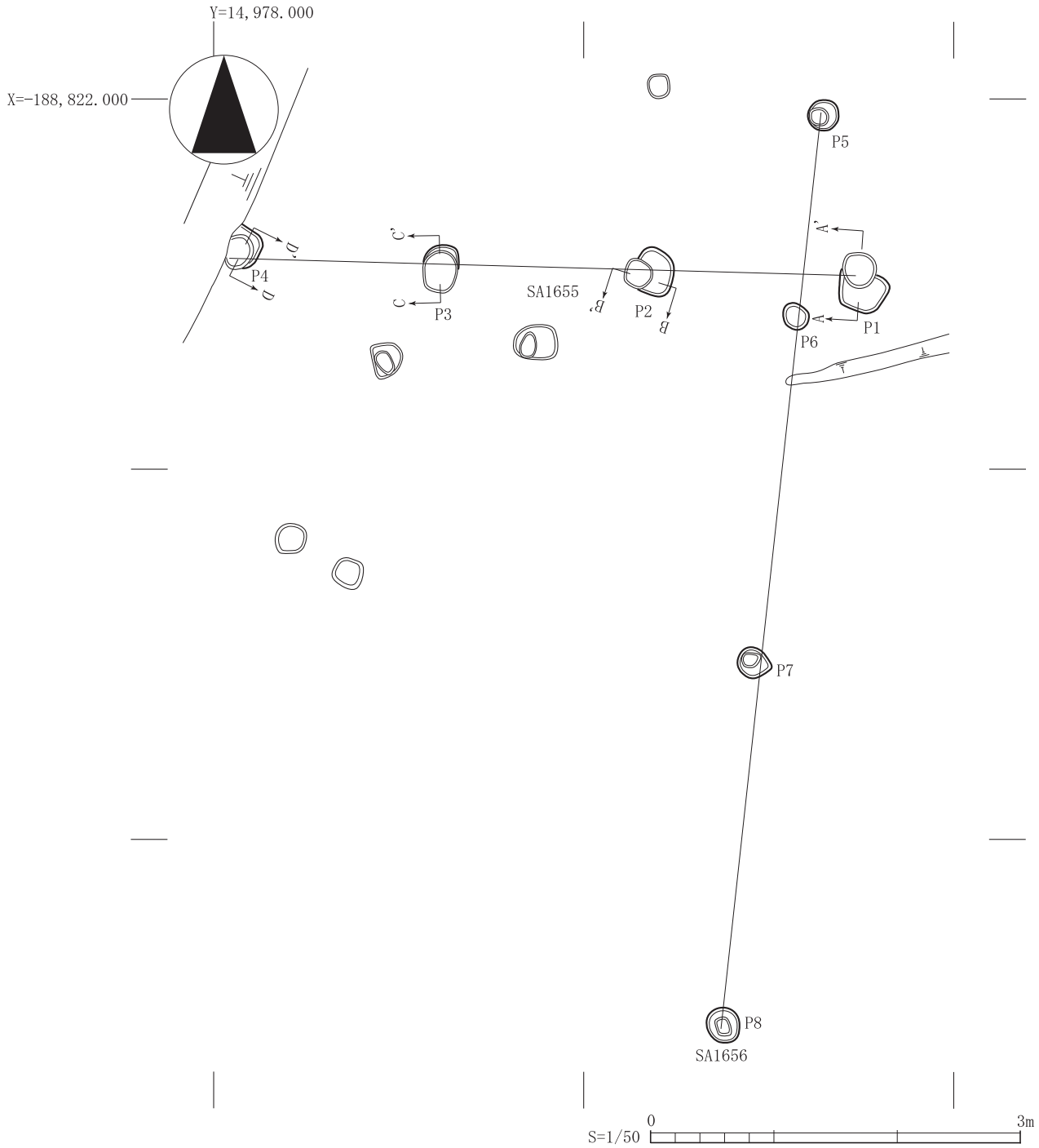
（1）層序

Ⅰ層：表土。厚さ50～60㎝である。

Ⅱ層：褐色の粘土で一部岩盤が露出しているところもある。周辺における基盤層であり、この上面が遺構検出面となる。



第２図　高崎遺跡第59・63次調査　遺構平面図



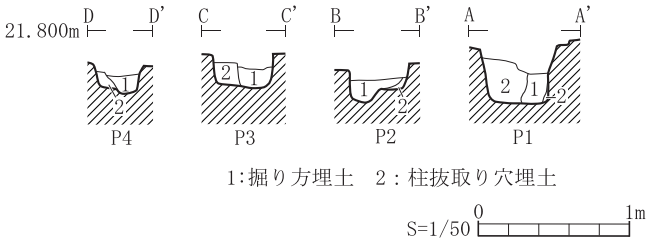
第３図　SA1655・1656平面図

（２）発見した遺構・遺物

今回の調査では、Ⅱ層上面で柱列跡、溝跡、柱穴を発見した。

SA1655柱列跡（第３・４図）

調査区西側で発見した東西３間以上の柱列跡である。SA1656と重複しているが、柱穴に直接切り合いがないため、新旧関係は不明である。全ての柱穴で抜取り穴を確認した。方向は東で約２度南に偏している。柱間は西から約1.７m、



第４図　SA1655断面図

約1.6ｍ、約1.8ｍである。掘り方の平面形は方形であり、一辺21～29㎝、深さ18～40㎝である。掘り方埋土は、にぶい黄褐色または褐色粘質土で褐色粘土をブロック状に多く含む。柱抜取り穴は褐灰色粘質土で褐色粘土をブロック状に少量含む。これらの褐色土はⅡ層に起因するとみられる。

遺物は柱抜取り穴から摩滅した土師器甕と鉄滓が出土している。

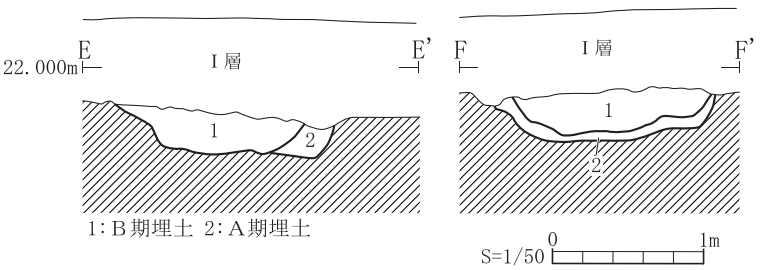
SA1656柱列跡（第３図）

調査区西側で発見した南北３間以上の柱列である。SA1655と重複しているが、柱穴に直接切り合いがないため、新旧関係は不明である。全ての柱穴で抜取り穴を確認した。方向は北で約６度東に偏している。柱間は北から約1.7ｍ、約2.8ｍ、約3.0ｍである。掘り方の平面形は円形であり、直径23～30㎝である。

遺物は柱抜取り穴から土師器甕（B類）と須恵器瓶が出土している。

SD1657溝跡（第３・５図）

調査区中央で発見した南北方向の溝跡である。ほぼ同位置で２時期の変遷（A→B期）があることを確認した。以下古い順に説明する。



第５図　SD1657断面図

A期：長さ4.6ｍ、上幅1.5ｍ、深さ20～30㎝で、方向は北で13度東に偏している。底面はほぼ水平であり、壁は斜めに立ち上がる。埋土は１層で、黄褐色砂質土である。遺物は出土していない。

B期：長さ4.6ｍ、上幅１～1.2ｍ、深さ25㎝である。方向は北で13度東に偏している。底面は南に向かってやや低くなっており、その比高は５㎝である。埋土は１層で、褐色砂質土である。

遺物は摩滅した土師器甕と須恵系土器杯の細片が出土している。

その他の柱穴

調査区東側で２基、西側で７基の柱穴を発見した。掘り方の平面形は円形か不整形であり、前者の規模は直径18～36㎝である。いずれも柱は抜き取られている。

遺物は、これらのうち東側にあるＰ９の柱抜取り穴から、須恵系土器高台付杯が出土している。

３　まとめ

SA1656･1657については、土師器甕や須恵器瓶が出土しているが、柱穴の規模が古代のものに比べて小さく、形もやや不揃いである。このような特徴は周辺の調査で確認されている中世以降の掘立柱建物跡と類似している。これらのことから、柱列跡の年代は中世もしくはそれ以降のものと考えておきたい。

SD1657の年代は、B期の埋土から須恵系土器杯の小片が出土している。しかし、出土した遺物はいずれも細片であることから、詳細については不明である。

高崎遺跡写真図版

Ⅱ層上面検出遺構（南東より）

Ⅱ層上面検出遺構（南西より）

第62次調査

SD1657（b）溝跡（北より）

SA1655柱列跡（東より）

第63次調査

Ⅳ　市川橋遺跡第62次調査

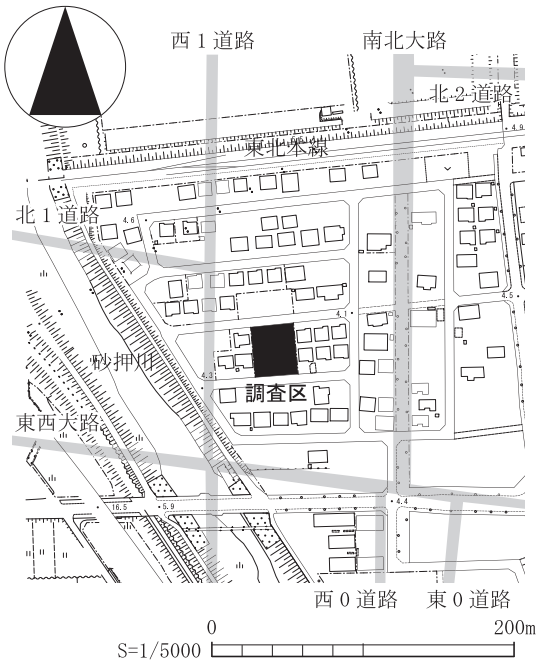
1　遺跡の環境と主な調査成果

本遺跡は市中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川東岸に形成された、標高２～３ｍの微高地上に位置している。北東側に接する低丘陵上には、奈良・平安時代を通して陸奥国府が置かれた特別史跡多賀城跡があり、これと密接に関係する古代の遺跡として知られている。遺跡内では、これまで多くの調査が実施され貴重な成果を得ているが、特に注目されるのが多賀城南面に施工された古代の方格地割りの発見である。これは、城外の二大幹線道路である南北大路と東西大路を基準とする南北・東西の道路によっておよそ１町四方に区画されたものであり、その範囲は西側に隣接する山王遺跡西半部にまで及んでいる。本遺跡南半部はこの幹線道路の交差点にあたり、周辺では規則的に配置された大規模な建物群や四面庇付建物が発見されるなど、城外でも最も重要な地区であると考えられる。

第１図　市川橋遺跡と調査区の位置

2　調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成19年３月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財の係わりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に直径60㎝、長さ７ｍの柱状地盤改良杭を打ち込むとされていたが、当該区周辺では区画整理に伴う確認調査において大規模な掘立柱建物跡が発見されるなど貴重な成果を得ていたため、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等による遺構の保存が計れないか協議を行ったが、杭基礎以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないとのことから、記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、５月21日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、６月４日より現地調査を開始した。



第２図　調査区位置図

調査は、住宅建築部分の表土除去から取りかかった。調査面積と作業時の安全確保のため表土をすべて場外搬出したことや宅地の面積が周辺地区と比べ広かったこともあり、対象面積の約９割の調査区を設定することができた。６日より作業員を導入して遺構検出作業を開始し、SB3303掘立柱建物跡や東西方向のSD3283～3293、3296～3302小溝群、南北方向のSD3282・3294・3295溝跡、SK3304～3312・3315・3316土壙等を発見した。７日よりSD3282や小溝群、土壙の埋土掘り下げを開始し、13日にこれらの写真撮影を行う。14日、平面図作成用の基準点を調査区内に移動し平面・断面図を作成すると同時に、新旧関係で最も古いSD3294・3295南北溝の検出と埋土掘り下げを開始する。20日、SD3294・3295の掘り下げが完了したことから完掘状況及び全景写真を撮影し、翌21日には調査区内の土層堆積状況の断面図を作成した。その後一週間ほど雨の影響で調査を中断したが、６月27日～７月２日にSB3303柱穴の断面図作成、各溝跡の土層観察用ベルトの除去、平面図のレベル確認などを行い、７月３日に器材等を撤収した。７月10・19・20日に調査区の埋め戻し行い、本調査の一切を終了した。

3　調査成果

（1）層序（第４図）

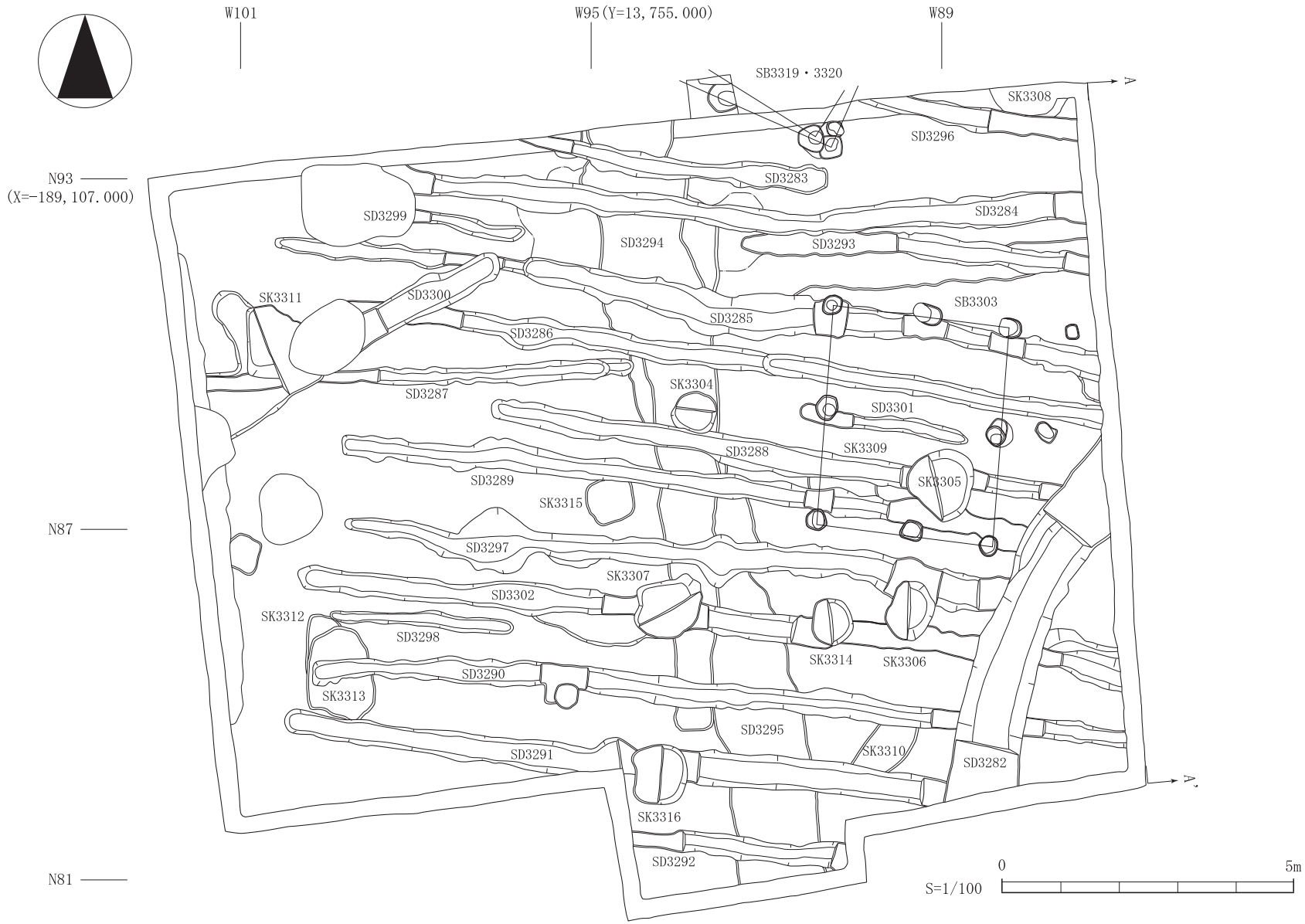
今回の調査では、現代の盛土や旧水田耕作土の下で３層の堆積を確認した。このうち遺構検出面となるのは、調査区全域で確認できるⅢ層上面である。

Ⅰ　1　層：区画整理に伴う盛土であり、厚さは1.４ｍ前後である。

Ⅰ　2　層：区画整理前の水田耕作土あり、厚さは20～36㎝である。

Ⅱ　　層：調査区東半部に認められる灰黄褐色粘質土であり、厚さは約10㎝である。今回発見した遺構は、全てこの層に覆われている。

Ⅲ　　層：調査区全域で確認されるにぶい黄橙色砂質土であり、厚さは10～30㎝である。底面の標高を見ると調査区中央部が最も高く、南北両側に向かって低くなっている。今回発見した遺構は


W101
W95(Y=13,755.000)
W89
N93
(X=-189,107.000)
N87
N81
A
A'
SB3319・3320
SK3308
SD3296
SD3283
SD3284
SD3299
SD3294
SD3293
SK3311
SD3300
SD3285
SB3303
SD3286
SK3304
SD3287
SD3301
SK3309
SD3288
SK3305
SD3289
SK3315
SD3297
SK3307
SD3302
SK3312
SD3298
SK3314
SK3306
SD3290
SK3313
SD3295
SK3310
SD3291
SD3282
SK3316
SD3292
0
5m
S=1/100

第３図　調査区全体図

全てこの上面で発見している。

Ⅳ　層：調査区全域で確認される暗緑灰色粗砂であり、厚さは20㎝以上である。

（２）発見遺構と遺物

SB3303掘立柱建物跡（第５図）

調査区東部で発見した、桁行２間、梁行２間の南北棟掘立柱建物跡である。SD3285・3289・3301と重複し、それらよりも新しい。柱穴は８基検出しており、その全てで柱抜取り穴を確認した。方向は、西側柱列で測ると北で約４度東に偏している。建物の規模は桁行が西側柱列で約3.７m、柱間は南より約1.８m、約1.９mであり、梁行は南妻で約2.９m、柱間は西より約1.６m、約1.３mである。柱穴の平面形はやや歪な方形であり、規模は南妻棟通り下柱穴で測ると、長辺40㎝、短辺34㎝、深さ45㎝である。埋土は灰黄褐色粘質土や黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土が斑状に多く混入している。柱抜取り穴は掘り方を大きく壊すものと中央付近で柱痕跡状に認められるものがあり、このうち後者は「柱のあたり痕跡」を反映しているものと考えられる。また、両側柱中央の柱抜取り穴は掘り方底面まで達しておらず、東側柱のものは掘り方底面より12㎝ほど高くなっている。遺物は出土していない。

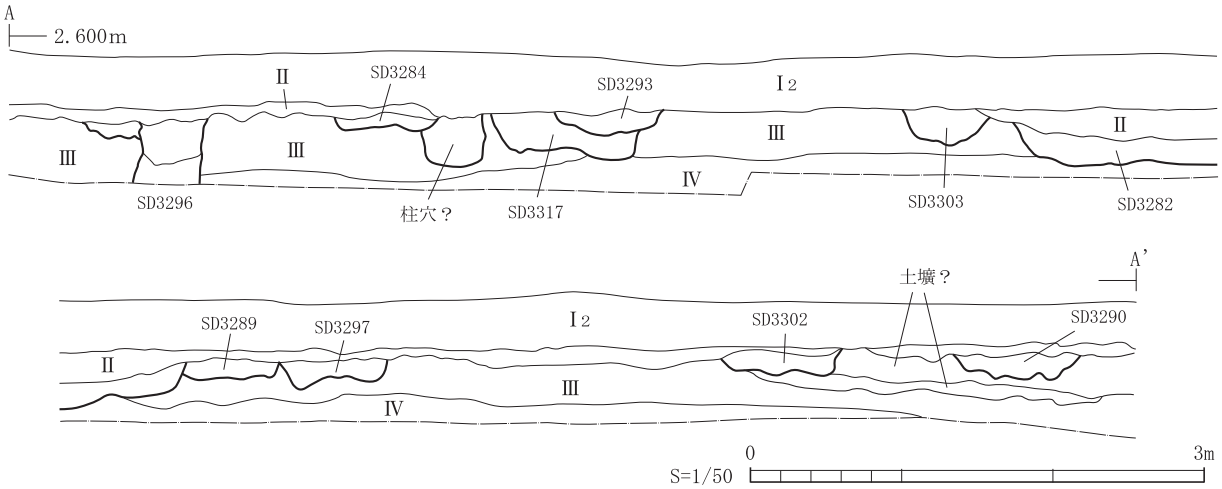
SB3319・3320掘立柱建物跡（第６図）

調査区北端部で発見した掘立柱建物跡である。いずれも東西1 間の柱列より推測したものであり、ここでは建物跡の南東隅を構成するものと判断した。このうちSB3319の柱穴では２基とも柱抜取り穴を確認しており、方向は西で約23度北に傾くものと考えられる。柱穴の埋土はSB3319が褐灰色粘質土、SB3320が黄灰色粘質土であり、ともににぶい黄橙色砂質土が多く混入している。

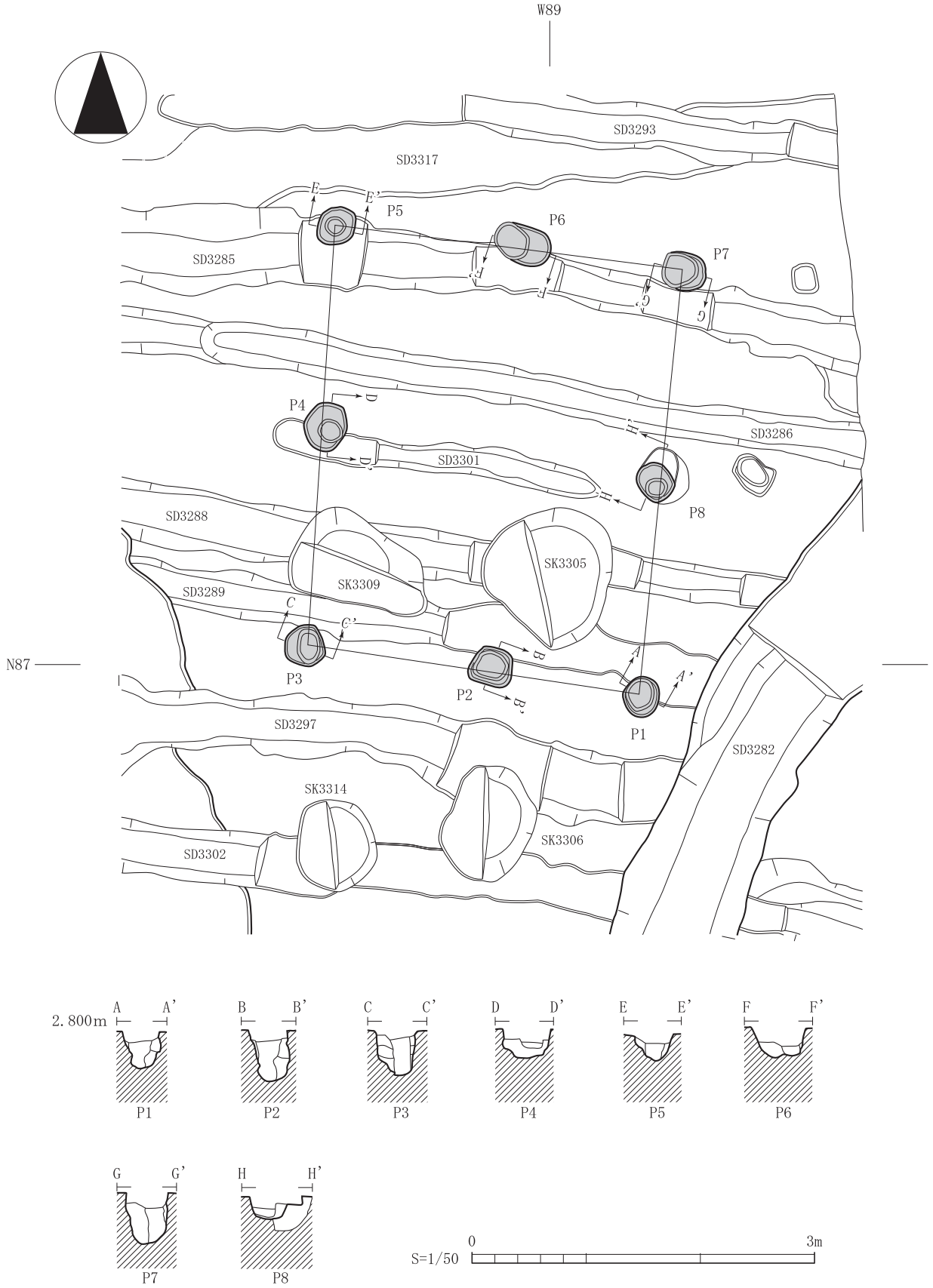
遺物は、SB3320の柱抜取り穴から土師器甕（B類）が出土している。

SD3295溝跡（第７図）

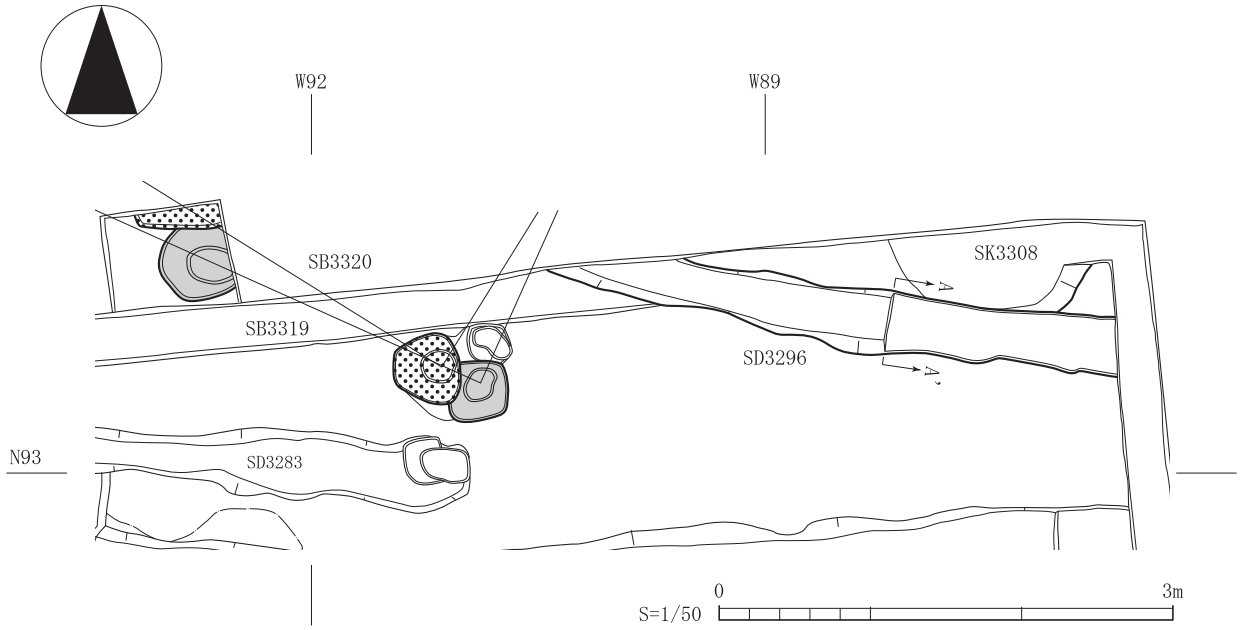
調査区中央部で発見した南北方向の溝跡である。SD3294溝跡や東西方向の小溝群と重複し、それらよりも古い。方向は北で約11度西に偏しており、規模は長さ9.４m以上、上幅1.５～1.６m、下幅0.５～0.６m、深さ25～32㎝である。底面は概ね平らであり、北側から南側に向かって緩やかに下っている。壁は調査区の南壁側で凹凸があるものの、それ以外は緩やかに立ち上がっている。埋土は３層に分けることができる。１層は黒褐色粘質土が粒状に混入する灰黄褐色砂質土であり、遺構検出面であるⅢ層と近似してい



第４図　東壁断面図



第５図　SB3303平面図・断面図



第６図　SB3319・3320、SD3296ほか平面図

る。２・３層は黒色粘土であり、３層にはにぶい黄橙色砂質土や褐灰色砂が多く混入している。遺物は出土していない。

SD3294溝跡（第７・10図）

調査区中央部で発見した南北方向の溝跡である。SD3295や東西方向の小溝群と重複し、小溝群よりも古く、SD3295よりも新しい。方向は北で約６度西に偏しており、規模は長さ10.４m以上、上幅0.７～1.８m、下幅0.５～1.２m、深さ約25cmである。底面はやや凹凸があるものの、概ね平坦である。壁は調査区中央より北側は緩やかであるが、南側は垂直気味に立ち上がっている。埋土は4 層に分けることができる。１・３層はにぶい黄橙色砂質土が混入する黒色粘土、２・４層は遺構検出面であるⅢ層に近似する灰黄褐色砂質土である。

遺物は、土師器杯（B類）・耳皿・甕、須恵器杯（ⅡB類）・甕が出土している。

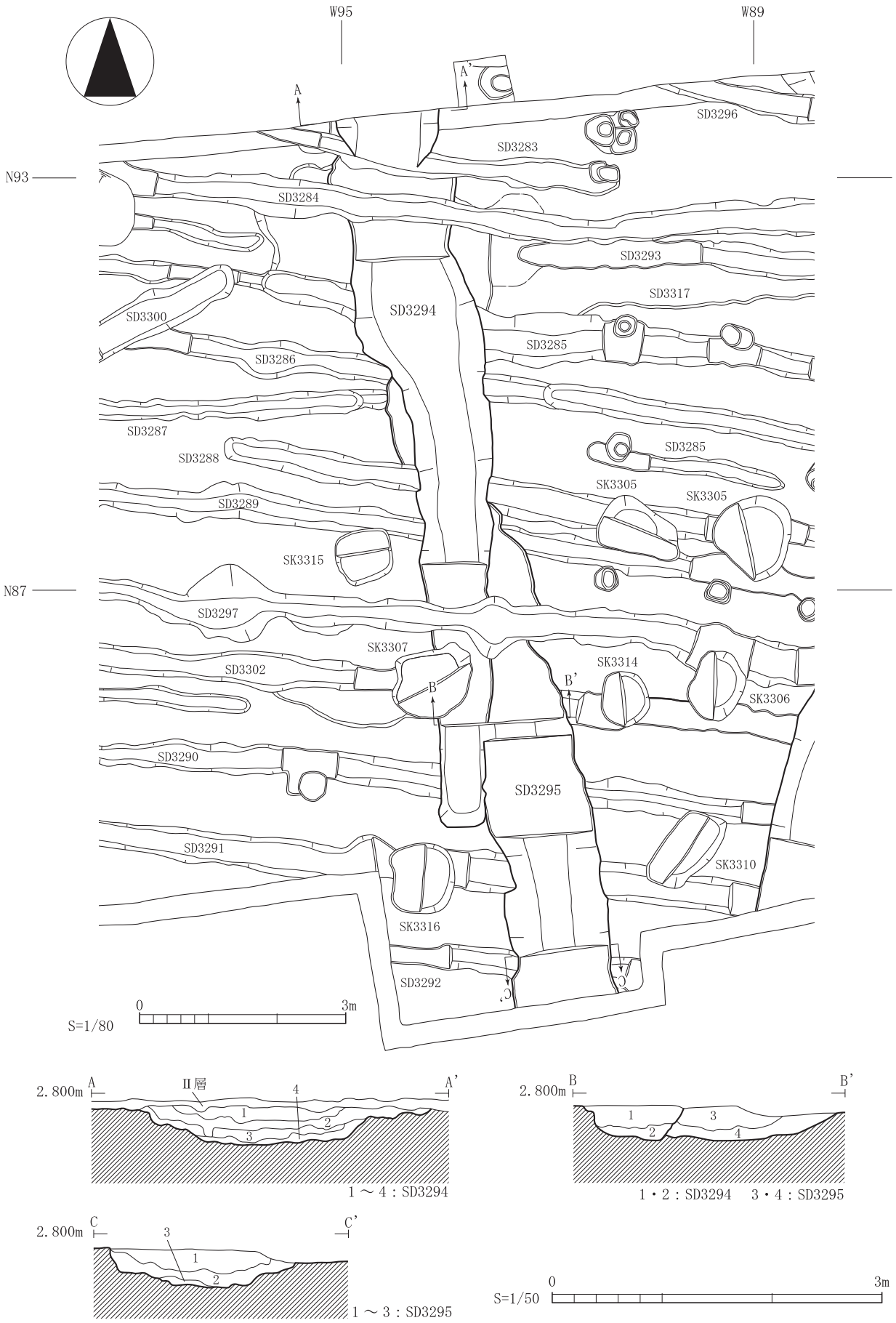
SD3282溝跡（第８・10図）

調査区南東部で発見した南北方向の溝跡であり、東に彎曲しながら調査区外に延びている。SD3288～3290・3292・3302・3303と重複し、それらよりも新しい。規模は長さ７m以上、上幅0.９～1.２m、下幅50～60cm、深さ40～55cmである。底面は凹凸が著しく、北側から南側に向かって16cm下っている。壁は垂直気味に立ち上がっているが、北側では東壁中位付近に幅20～30cmの平坦面が形成されている。埋土は２層に分けることができる。上層は灰黄褐色粘質土、下層は灰オリーブ色砂質土が多く混入する黒褐色砂質土である。

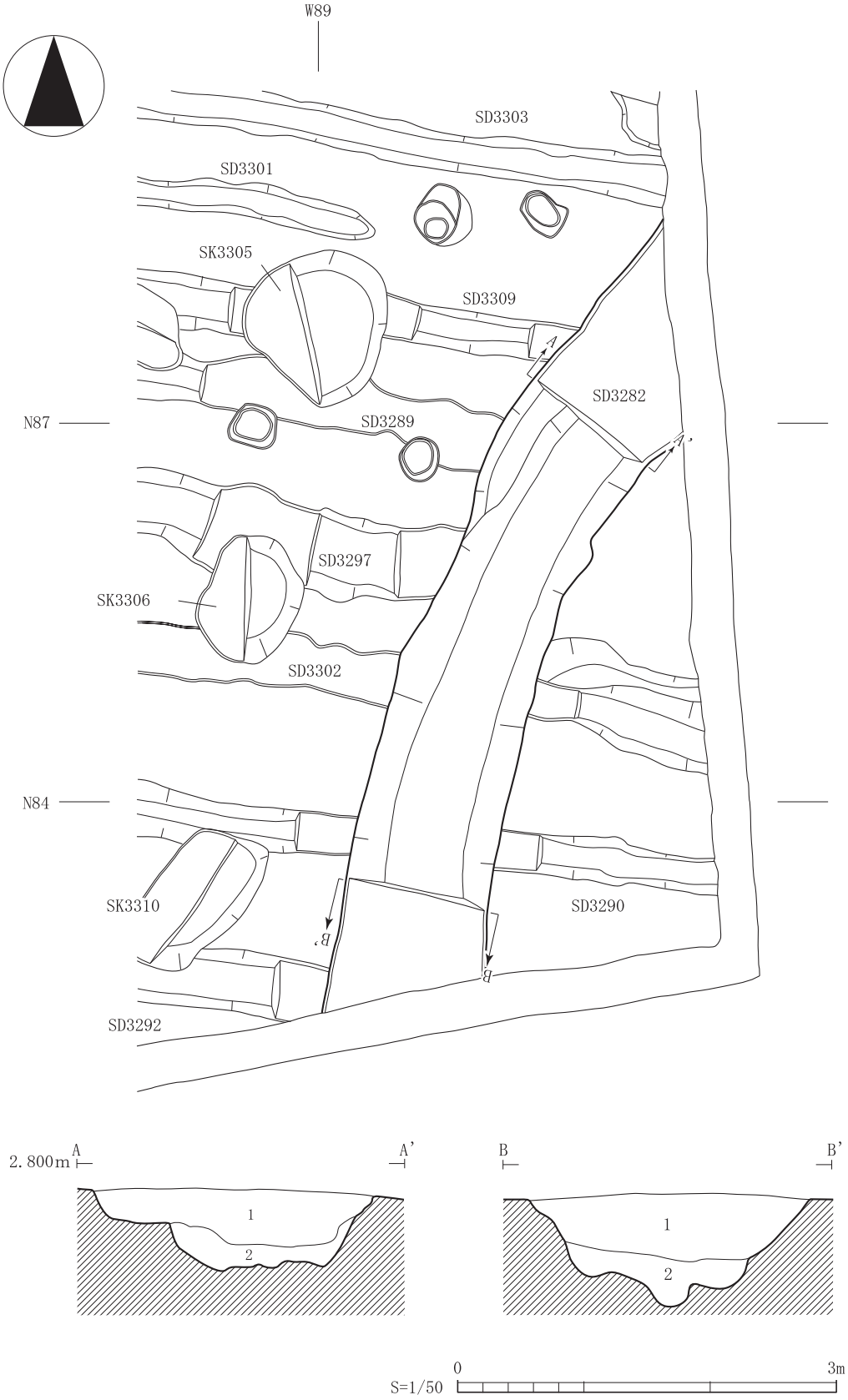
遺物は、土師器杯（BⅡc・B・ 類）・甕、須恵器杯・瓶・甕、灰釉陶器短頸壺、軒丸瓦、製塩土器が出土している。

SD3296溝跡（第６・９図）

調査区北東部で発見した東西方向の溝跡である。SK3308と重複し、それよりも古い。方向は西で約９度北に偏しており、規模は長さ４m以上、上幅35～45cm、下幅20～40cm、深さ36cmである。底面は概ね平らであり、東側から西側に向かって緩やかに下っている。壁には凹凸がほとんどなく、垂直に立ち上がっ

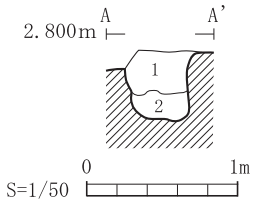


第７図　SD3294・3295平面図・断面図



第８図　SD3282平面図・断面図

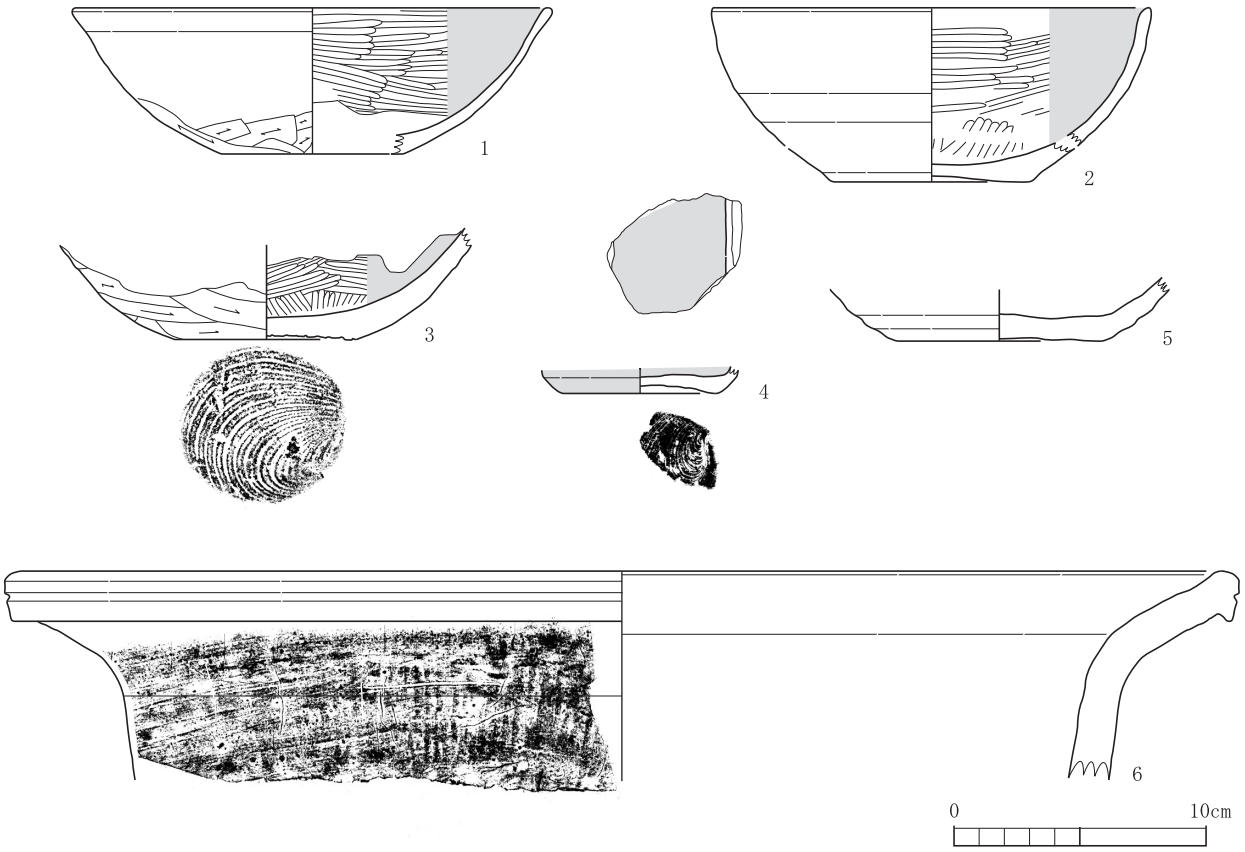
ている。埋土は２層に分けることができる。いずれも黒色砂質土が主体であり、２層ににぶい黄橙色砂質土がブロック状に多く混入している。遺物は出土していない。



第９図　SD3296断面図

SD3283～3293、3297～3302溝跡（第３・10図）

幅30～80㎝、深さ10～20㎝の小規模な溝跡である。ほとんどのものがSD3294・3295と重複しており、それらよりも新しい。一方、SB3303と重複するSD3285、3289、3301や、SD3282と重複するSD3288～3291・3297・3302はそれらよりも古い。方向はSD3287・3300を除き、いずれも西で５～８度北に偏している。底面は平坦なものや凹凸が著しいものがあるなど一様ではない。壁の立ち上がりは概ね緩やかである。埋土はにぶい黄橙色砂質土が混入する黒褐色粘質土である。



単位：cm

番号	種　類	層　位	特　徴		口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号	備　考
			外　面	内　面						
1	土師器　杯	SK3306・ℓ-1	ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	(14.2) 5 /24	(5.4) 1/24	4.4	－	R 1	BⅡ類 土壙ⅱ群
2	土師器　杯	SK3308・ℓ-1	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	(13.3) 3 /24	5.4 18/24	5.2	－	R 4	BⅤ類 土壙ⅱ群
3	土師器　杯	SD3282・ℓ-1	ロクロナデ 底部：回転糸切り→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	－	5.4 24/24	－	－	R 6	BⅡc類 溝c群
4	土師器 耳皿	SD3294・ℓ-1	ロクロナデ、黒色処理	ロクロナデ、黒色処理	－	(4.5) 6/24	－	－	R11	溝a群
5	須恵器 杯	SD3287・ℓ-1	ロクロナデ底部：回転糸切り	ロクロナデ	－	(6.0) 4/24	－	－	R 8	Ⅴ類 溝b群
6	須恵器 甕	SD3282・ℓ-1	タタキ、ロクロナデ	ロクロナデ	(47.5) 5 /24	－	－	－	R 2	溝c群

第10図　各遺構出土遺物

遺物は、土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器杯・高台付杯・蓋・甕が出土しているが、いずれも小片であり量も少ない。

SK3304～3307・3311・3316土壙（第３・10図）

調査区南東部及び北西部で発見した土壙であり、重複関係から東西方向の小溝群より新しい。平面形は歪な方形または不整形であり、規模は長軸0.８～1.３m、深さ15～25cmである。壁は緩やかに立ち上がるものが多く、底面もSK3306･3311でやや凹凸がある以外は概ね平坦である。埋土はいずれも黒褐色粘質土が主体である。

遺物は、SK3304から土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器杯・甕、SK3306から土師器杯（B･ 類）・甕（B類）、須恵器瓶、製塩土器が出土している。

SK3309・3310・3312・3313・3315土壙（第３・７図）

調査区南東部及び南西部で発見した土壙であり、重複関係から東西方向の小溝跡より古い。平面形は歪な方形または不整形であり、規模は長軸1.１～1.２m、深さ15～20cmである。壁は緩やかに立ち上がるものが多く、底面は凹凸が著しい。埋土はいずれもにぶい黄橙色砂質土が多く混入する黒色粘土である。

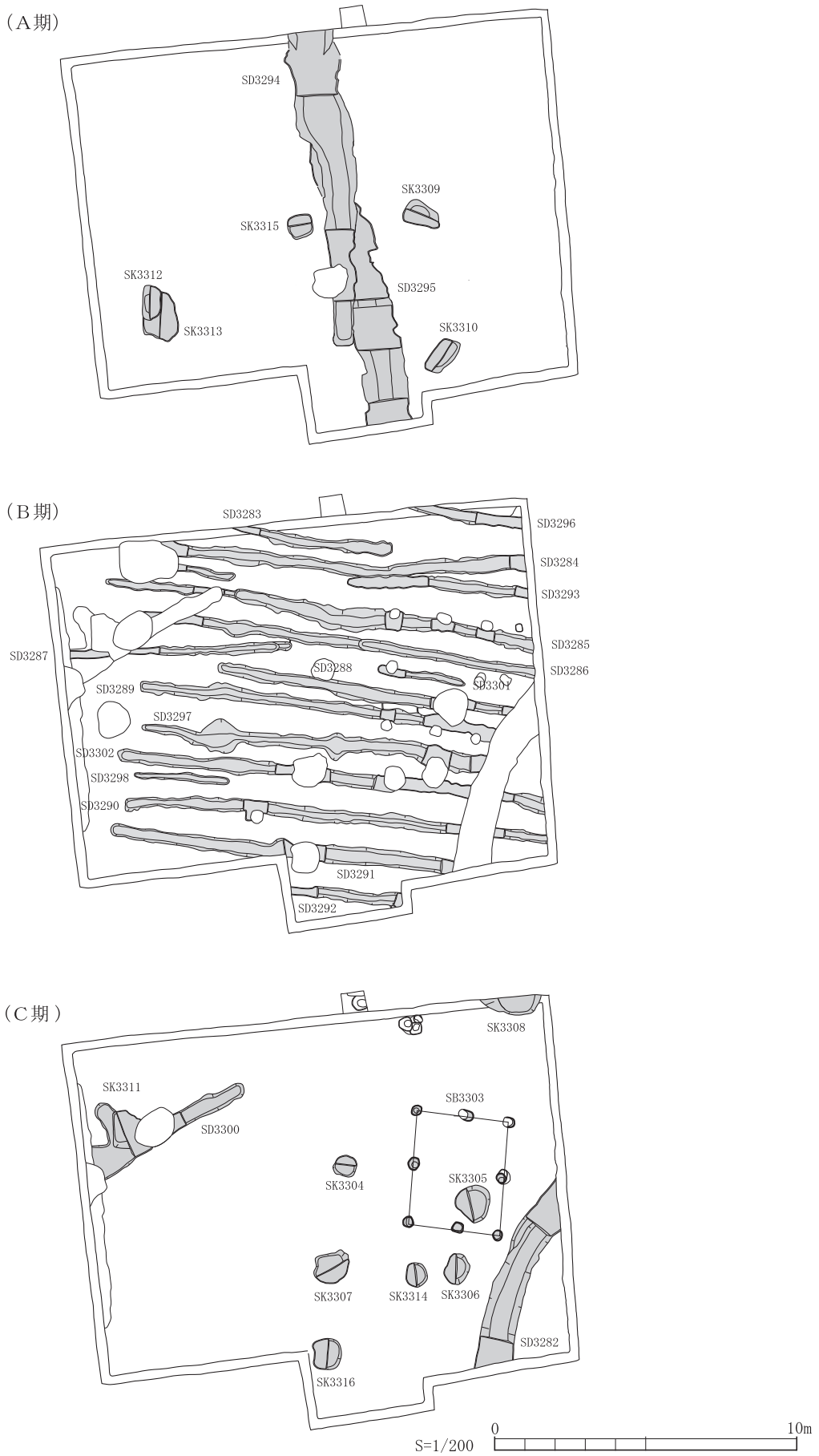
遺物は、SK3312から須恵器杯（Ⅲ類）、甕が出土している。

４　考察

今回の調査では、掘立柱建物跡３棟、溝跡20条、土壙12基を発見した。このうち最も多く検出した溝跡の重複関係をみると、南北方向のもの（a群：SD3295→SD3294）→東西方向のもの（b群：SD3283～3293・3297・3302）→これらと方向を違えるもの（c群：SD3238・3300）といった３群に分けることができ、規模や方向がb群と近似しているSD3296・3298・3301については、それと同時期のものと考えられる。掘立柱建物跡については、SB3303が溝跡b群よりも新しいことが明らかである。土壙では、溝跡b群よりも古いもの（ⅰ群：SK3309・3310・3312・3313・3315）と新しいもの（ⅱ群：SK3304～3308・3311・3314・3316）がある。埋土をみると前者はいずれもにぶい黄橙色砂質土が多量に混入しているのに対して、後者は黒褐色粘質土の自然堆積である点で異なっている。

これらの関係を整理すると第10図のようになり、A期（溝a群・土壙ⅰ群）→B期（溝b群）→C期（SB3303、溝c群、土壙ⅱ群）の変遷を捉えることができよう。

遺構の年代については出土遺物が非常に少ないものの、溝跡a群に土師器杯B類が含まれることや全ての遺構で須恵系土器が全く認められない点を考慮すれば、８世紀後葉から９世紀の範疇で収まるものと考えられよう。

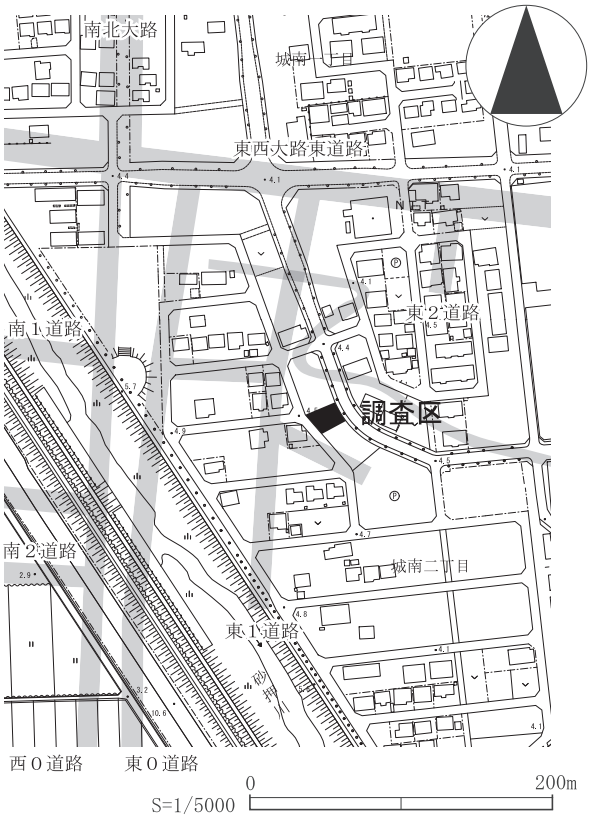


第11図　遺構変遷模式図

Ⅴ　市川橋遺跡第64次調査

1　調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成19年６月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財の係わりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に直径60㎝、長さ6.５ｍの柱状地盤改良杭を打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等による遺構の保存が計れないか協議を行ったが、杭基礎以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないとのことから、記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、８月24日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、９月３日より現地調査を開始した。



第１図　調査区位置図

調査は、住宅建築部分の表土除去から取りかかった。調査面積と作業時の安全確保のため表土をすべて場外搬出したものの、盛土の締まりが弱く調査区の傾斜を極端に緩やかにしたことから、対象面積の約6 割の調査区を設定するにとどまった。６日より作業員を導入して排水用の側溝を設けるとともに、中央部で確認した攪乱溝の掘り下げを行う。11日から遺構検出作業を開始し、SB3321～3323掘立柱建物跡やSD3324～3332溝跡、SK3333～3336土壙を発見した。この際、これらの上面に堆積したⅢb層から多くの遺物が出土したため、掘り下げに日数を要したが、14日には平面図作成用の基準点を調査区内に設置し、検出及び埋土掘り下げの終了したものから随時平面図の作成を開始した。10月３日、遺構の埋土掘り下げが概ね完了したことから調査区の全景写真を撮影し、４～９日にかけて各遺構及び北・西壁の断面図、対象区の範囲図等を作成した。10日に調査区内の器材撤収、11・12日に重機による調査区内の埋め戻しを行い、本調査の一切を終了した。

2　調査成果

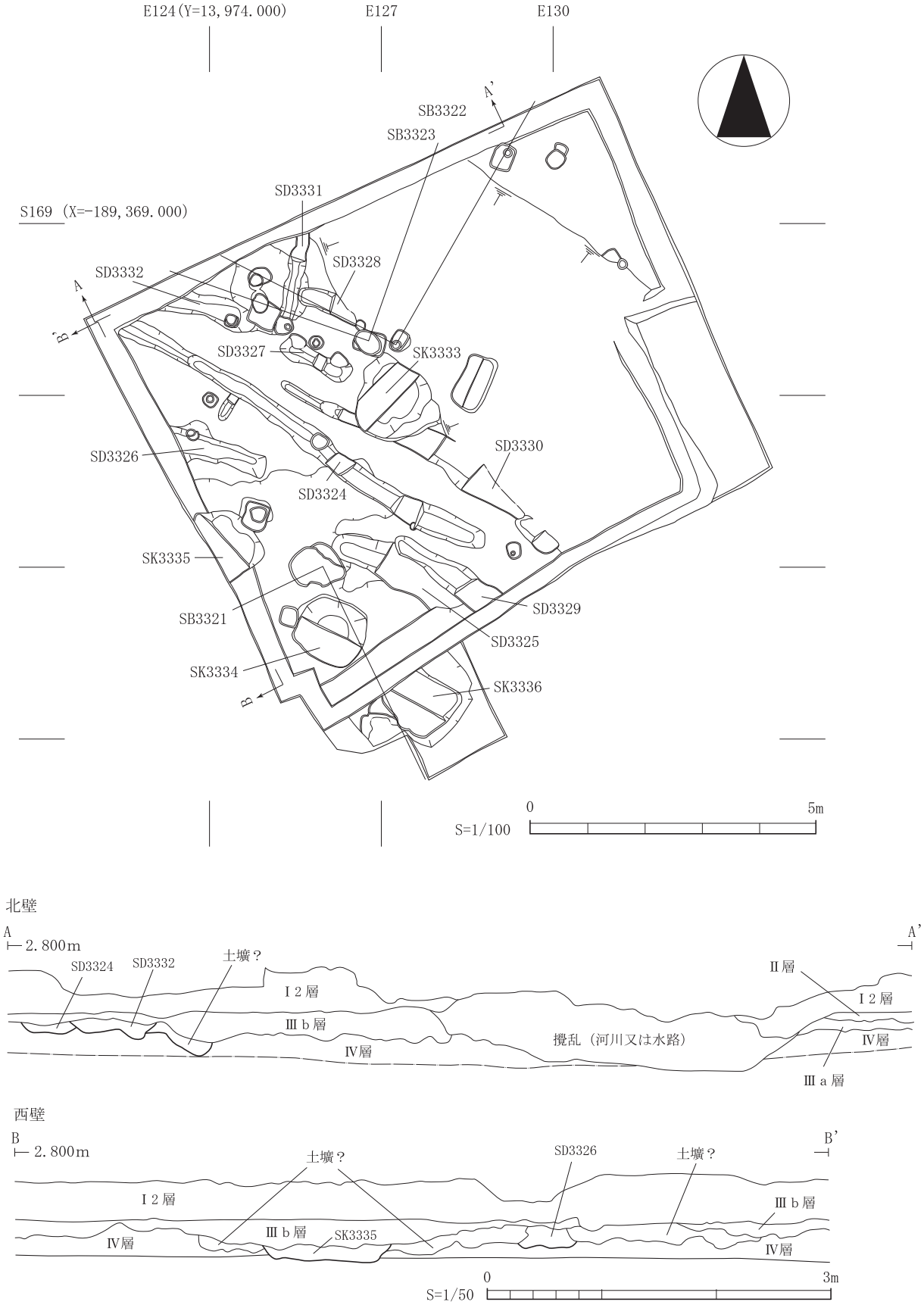
（1）層序（第２図）

今回の調査では、現代の盛土や旧水田耕作土の下で4 層の堆積を確認した。調査区中央部にある攪乱溝を境に東西で異なる層序を示すものの、灰白色火山灰との関係や周辺の調査成果などから、以下のように区分した。

Ⅰ　１　層：区画整理に伴う盛土であり、厚さは1.８～2.３ｍである。

Ⅰ　２　層：区画整理前の水田耕作土であり、厚さは30～40㎝である。

Ⅱ　　層：調査区東半部に認められる黒色粘土であり、厚さは５～10㎝である。本調査区ではほぼ水平に堆積しているが、周辺の調査成果では古代でも比較的新しい遺構の埋土上面に堆積してい


E124(Y=13,974.000)
E127
E130
S169 (X=-189,369.000)
SB3322
SB3323
SD3331
SD3328
SD3332
SD3327
SK3333
SD3326
SD3330
SD3324
SK3335
SB3321
SD3329
SD3325
SK3334
SK3336
A
A'
B
B'
S=1/100
0
5m
北壁
2.800m
SD3324
SD3332
土壙？
Ⅰ2層
Ⅲb層
Ⅳ層
撹乱（河川又は水路）
Ⅱ層
Ⅲa層
西壁
2.800m
土壙？
SD3326
Ⅲb層
SK3335
S=1/50
0
3m

第２図　調査区全体図

る状況を確認している。

Ⅲ a 層：調査区東半部に認められる褐灰色砂質土であり、厚さは５～15cmである。周辺の成果より、10世紀前葉以降の古代の堆積層と考えられる。

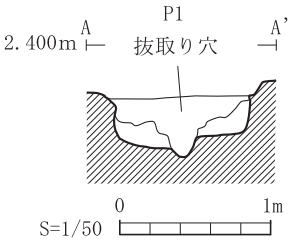
Ⅲ b 層：調査区西半部に認められる黒褐色粘質土であり、厚さは３～25cmである。灰白色火山灰が小ブロック状に混入していることから、それ以降に形成されたものであることが明らかである。底面の起伏が著しく、厚く堆積している箇所からは多くの土器類が出土している。

Ⅳ 層：調査区全域で確認されるにぶい黄橙色砂質土であり、厚さは30cm以上である。今回発見した遺構は全てこの上面で発見している。

(2) 発見遺構と遺物

SB3321掘立柱建物跡（第３・６図）

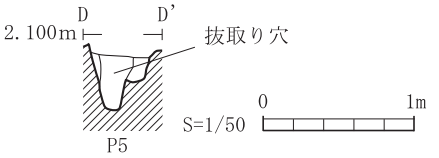
調査区南端部で発見した掘立柱建物跡である。南北１間の柱列より推測したものであり、建物の東側の柱列であると考えられる。SD3325、SK3336と重複し、それらよりも古い。いずれの柱穴でも柱抜取り穴が認められ、北東隅柱穴では底部付近で「柱のあたり痕跡」が確認できる。方向は、北で約24度西に偏しており、柱間は約2.９ｍである。柱穴の平面形は方形を基調としていると考えられるが、大部分が柱抜取り穴に破壊されており詳細は不明である。埋土はにぶい黄橙色砂質土であり、オリーブ褐色粘土が小ブロック状に多量に混入している。柱抜取り穴はにぶい黄橙色砂質土が若干混入するオリーブ褐色粘土である。遺物は出土していない。



第３図　SB3321断面図

SB3322掘立柱建物跡（第４・６図）

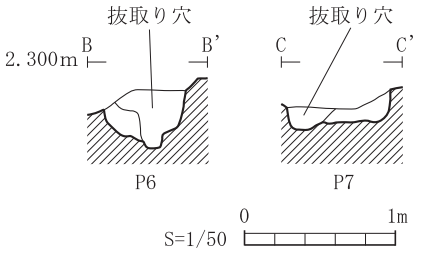
調査区北部で発見した掘立柱建物跡である。３基の柱穴より推測したものであり、建物の東端部であると判断した。北東隅柱穴で柱痕跡、それ以外の柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は、東側の柱列で測ると北で約30度東に偏している。柱間は東側の柱列で約3.９ｍ（２間分推定）、南側の柱列で約2.７ｍである。柱穴の平面形は概ね方形を基調とし、規模は最も大きい北東隅柱穴で測ると、長辺約50cm、短辺約40cm、深さ約30cmである。埋土はにぶい黄橙色砂質土が多量に混入する黒褐色粘質土である。柱痕跡は直径15cmの円形であり、埋土は黒褐色粘土である。遺物は出土していない。



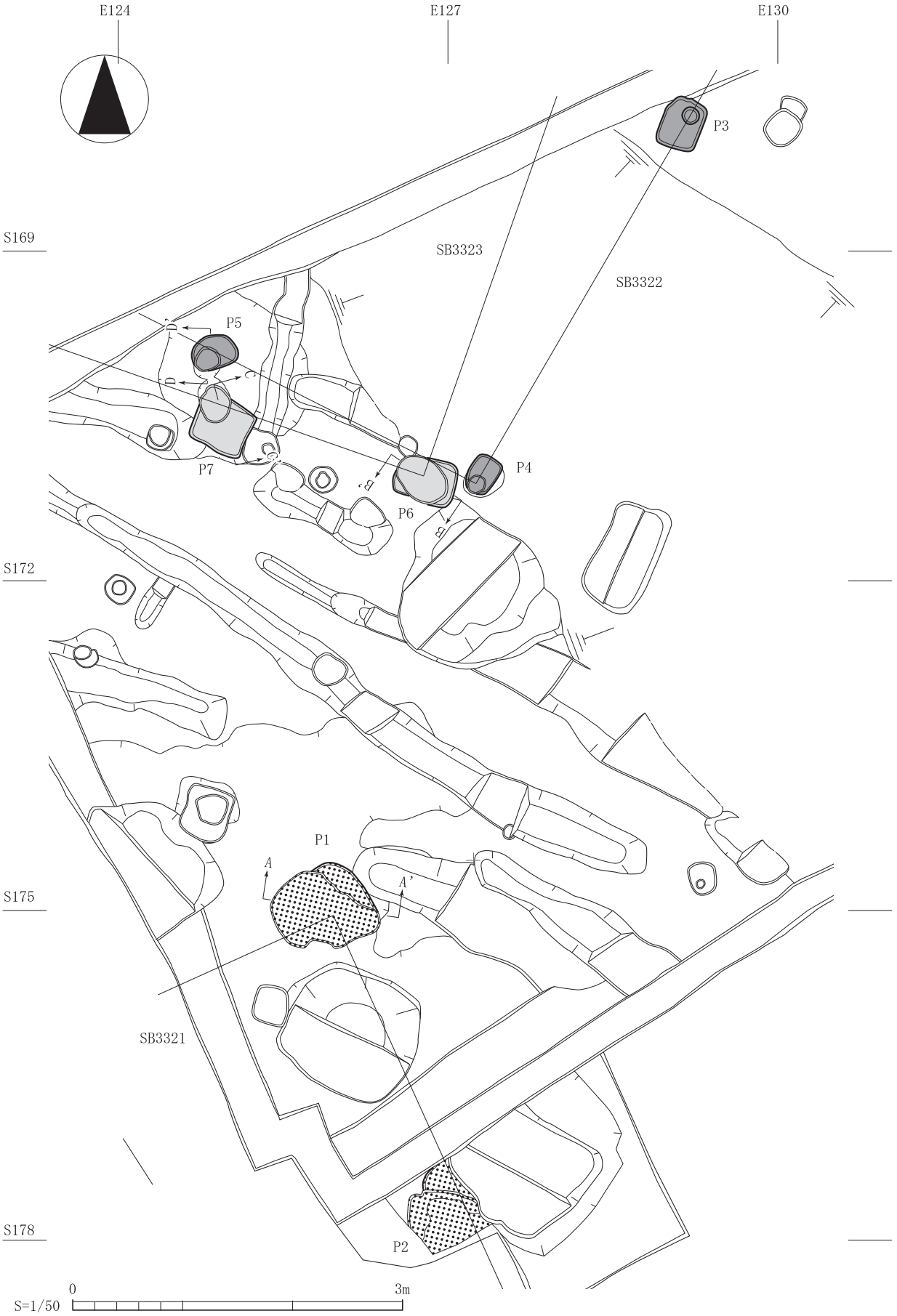
第４図　SB3322断面図

SB3323掘立柱建物跡（第５・６図）

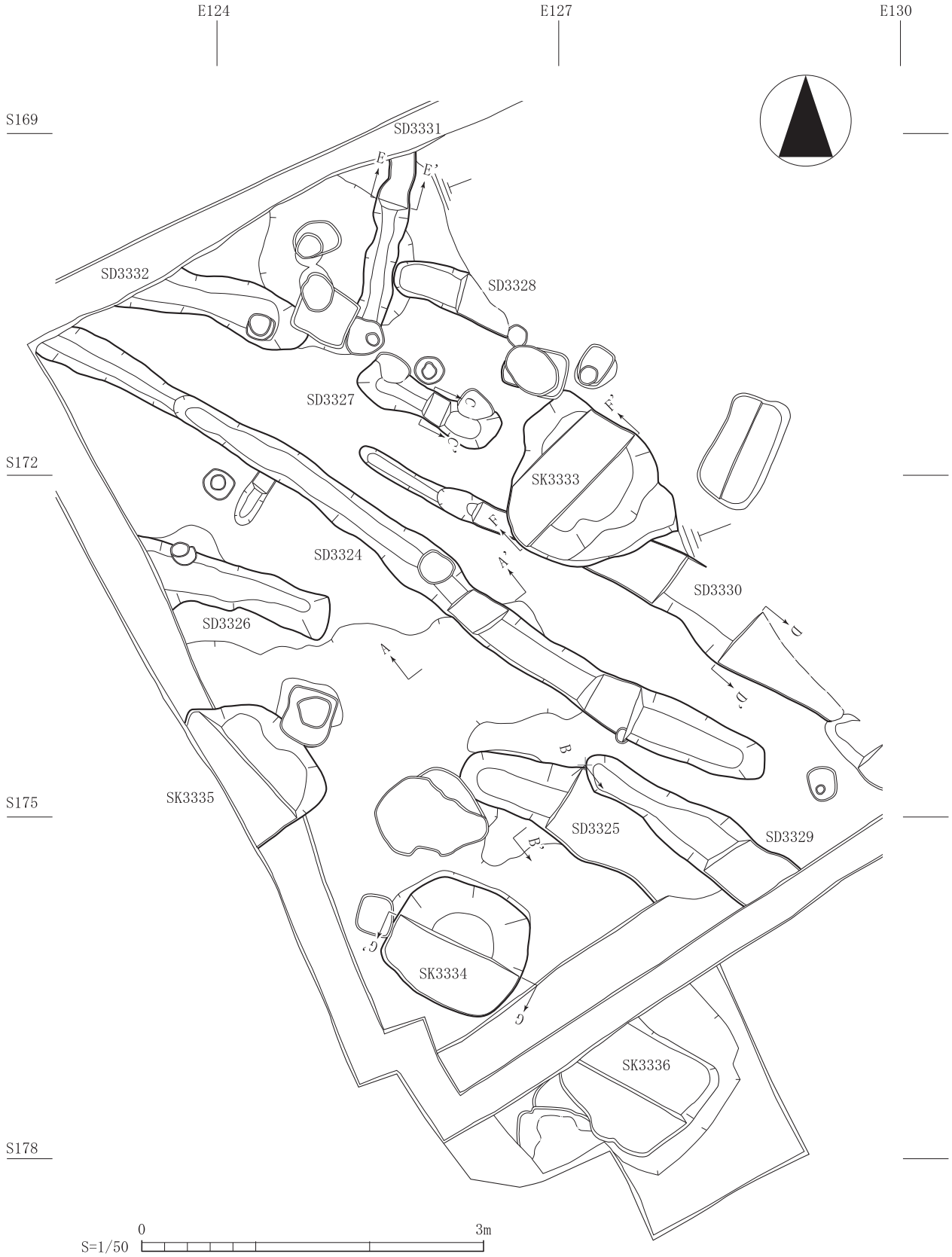
調査区北部で発見した掘立柱建物跡である。東西１間の柱列より推測したものであり、建物の南側の柱列であると考えられる。SD3331･3332と重複し、それらよりも古い。いずれの柱穴でも柱抜取り穴が認められ、南東隅柱穴では「柱のあたり痕跡」が確認できる。方向は西で約19度北に偏しており、柱間は約2.０ｍである。柱穴の平面形は方形を基調とし、南東隅柱穴で測ると、長辺約60cm、短辺約40cm、深さ約50cmである。埋土はオリーブ黒色粘土が多量に混入するにぶい黄橙色砂質土である。



第５図　SB3323断面図



第６図　SB3321～3323平面図



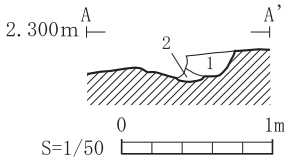
第７図　SD3324～3332、SK3333～3336平面図

遺物は出土していない。

SD3324溝跡（第７・８図）

調査区西部で発見した溝跡である。方向は西で約31度北に偏しており、規模は長さ８ｍ以上、上幅25～50㎝、下幅10～25㎝、深さ８～22㎝である。底面は概ね平らであるが、西側の段を境に約10㎝の比高が認められる。壁には凹凸がほとんどなく、緩やかに立ち上がっている。埋土は２層に分けることができる。いずれも黒褐色粘質土が主体であり、２層にはにぶい黄橙色砂質土が多く混入している。

遺物は、土師器杯（BⅡ類）・甕（A・B類）、須恵器杯（Ⅲ類）、平瓦が出土しており、須恵器杯にはヘラ書きが施されたものがある。

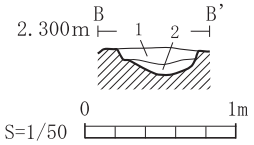


第８図　SD3324断面図

SD3325溝跡（第７・９図）

調査区西部で発見した溝跡である。SB3321、SD3329と重複し、後者より古く、前者よりも新しい。規模は長さ3.２ｍ以上、上幅50～70㎝、下幅25㎝、深さ20㎝である。底面は概ね平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は２層に分けることができる。いずれも黒褐色粘質土が主体であり、２層にはにぶい黄橙色砂質土が多く混入している。

遺物は、土師器杯（BⅤ類）・甕（B類）、須恵器杯・甕が出土している。

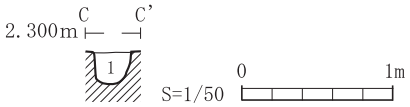


第９図　SD3325断面図

SD3327溝跡（第７・10図）

調査区西部で発見した溝跡である。規模は長さ1.３ｍ、上幅25～40㎝、下幅10～20㎝、深さ20㎝である。底面は概ね平坦であり、壁は垂直に立ち上がっている。埋土はにぶい黄橙色砂質土が多く混入する褐灰色砂質土である。

遺物は、土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器甕が出土している。

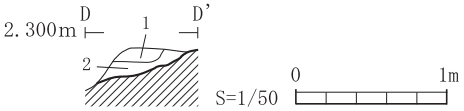


第10図　SD3327断面図

SD3330溝跡（第７・11図）

調査区西部で発見した溝跡であり、大部分が後世の攪乱によって破壊されている。SK3333と重複し、それよりも古い。残存する規模は長さ2.６ｍ、上幅23～30㎝、下幅８～16㎝、深さ15～18㎝である。底面は平らであり、南側から北側に向かって緩やかに下っている。壁は凹凸がほとんどなく、緩やかに立ち上がっている。埋土は２層に分けることができる。いずれも黒褐色粘質土が主体であり、２層にはにぶい黄橙色砂質土がブロック状に多量に混入している。

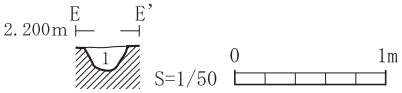
遺物は、土師器甕（B類）、須恵器甕が出土している。



第11図　SD3330断面図

SD3331溝跡（第７・12図）

調査区西部で発見した南北方向の溝跡である。SB3323と重複し、それよりも新しい。規模は長さ２ｍ以上、上幅55㎝、下幅48㎝、深さ10～22㎝である。底面は平らであり、北側から南側に向かって緩やかに下っている。壁は凹凸がほとんどなく、やや急に立ち上がっている。埋土は、にぶい黄橙色砂質土が多量に混入する褐灰色粘質土である。遺物は出土していない。

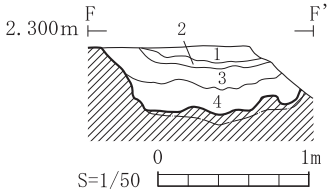


第12図　SD3331断面図

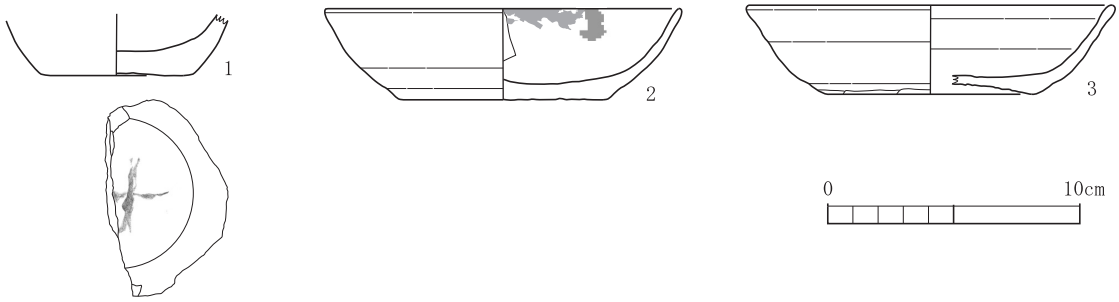
SK3333土壙（第７・13・14図）

調査区中央部で発見した不整形の土壙である。後世の攪乱により東側が大きく削平されている。SB3323、SD3330と重複し、それらよりも新しい。規模は長軸約1.6ｍ、深さ40～45㎝である。壁には凹凸が多く、西側が垂直気味に、南側から東側は中位に段を形成しながら緩やかに立ち上がっている。底面も凹凸が著しく、北側ほど高くなっている。埋土は４層に分けることができる。１・２層は灰黄褐色砂質土であり、２層にはにぶい黄橙色砂質土が多量に混入している。３・４層は黒褐色粘質土が主体であり、４層ににぶい黄橙色砂質土がブロック状に多量に混入している。

遺物は、土師器杯（BⅡ類）・甕（A・B類）、須恵器杯（Ⅲ・Ⅴ類）・蓋・甕、丸瓦（ⅡB類）、竈形土製品が出土している。このうち土師器杯や須恵器杯には墨書やヘラ書きが施されたもの、油煙が付着したものが認められる。



第13図　SK3333断面図



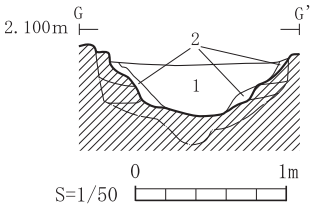
単位：㎝

番号	種　類	層　位	特　徴		口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号	備　考
			外　面	内　面						
1	須恵器　杯	ℓ-1	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	－	(6.0) 10/24	－	－	R12	Ⅲ類、墨書
2	須恵器　杯	ℓ-1	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.9) 6/24	(7.9) 8/24	3.6	－	R 6	Ⅲ類 油煙付着
3	須恵器　杯	ℓ-1	ロクロナデ、手持ちヘラケズリ 底部：回転糸切り→手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(14.4) 5/24	(8.0) 9/24	3.5	－	R 7	Ⅱc類

第14図　SD3333出土遺物

SK3334土壙（第７・15・16図）

調査区南西部で発見したおよそ方形の土壙である。規模は長軸約1.2ｍ、短軸約1.1ｍ、深さ46㎝である。壁は緩やかに立ち上がっており、底面は丸みを帯びて窄んでいる。埋土は２層に分けることができる。１層は黒褐色粘土であり、にぶい黄橙色砂質土がブロック状に多量に混入している。２層は褐灰色砂質土である。



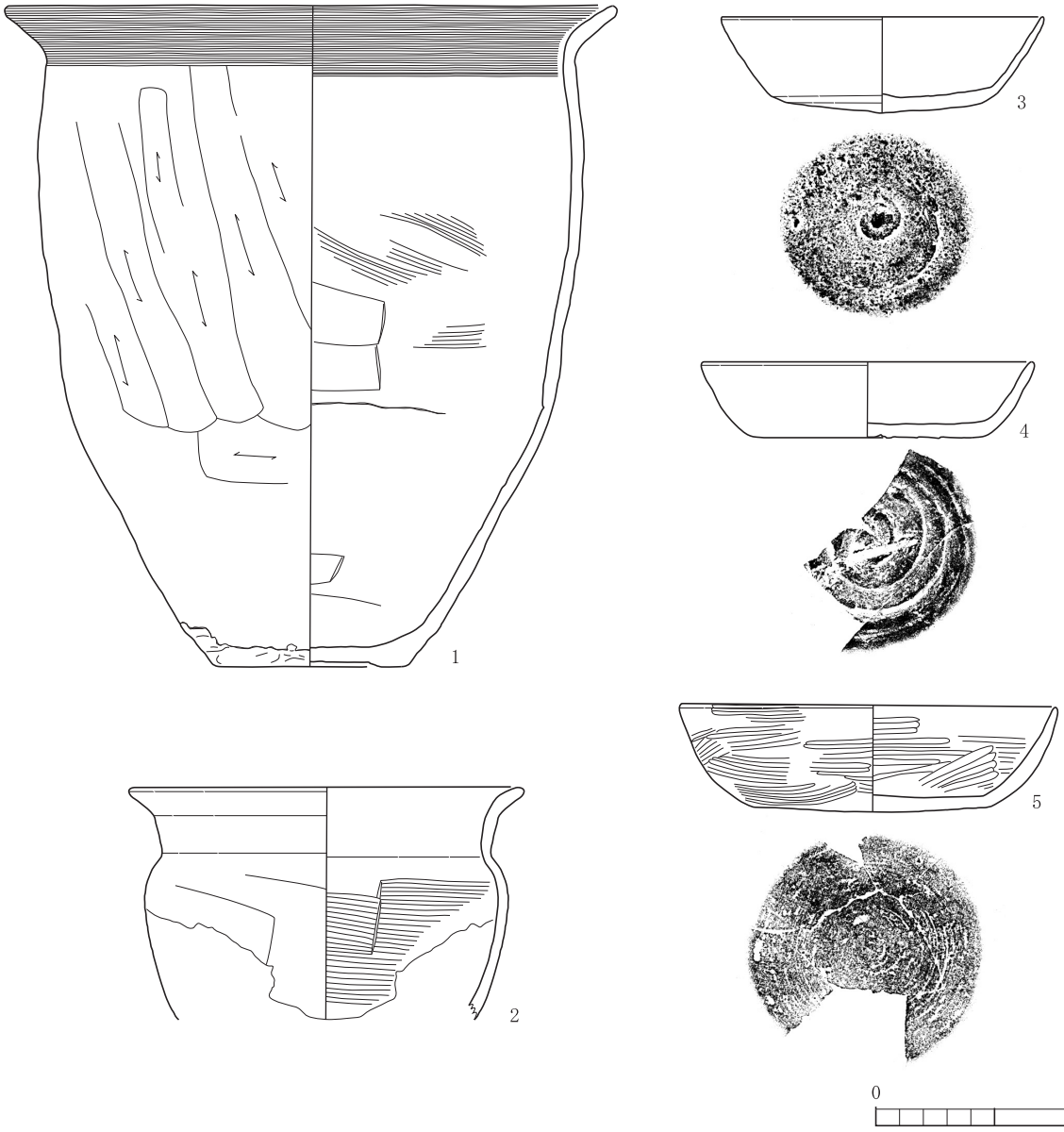
第15図　SK3334断面図

遺物は、土師器杯（A・B類）・甕（A・B類）、須恵器杯（Ⅲ類）・甕が出土している。このうち、須恵器杯には内外面にヘラミガキを施したものが確認できる。

3　考察

今回の調査では、Ⅴ層上面で掘立柱建物跡３棟、溝跡９条、土壙４基を発見した。出土遺物は全体的に少なく、SK3333・3334からややまとまって土器類が出土しているのみである。ここでは、はじめにSK3333・3334の年代を求めた後で、それら以外の遺構についても若干の検討を行う。

SK3333からは土師器杯A・B・BⅡ類、土師器甕A・B類、須恵器杯Ⅰ・Ⅱ・Ⅱc・Ⅲ類が出土しており、①土師器杯・甕ともにB類が主体である、②土師器杯B類では、確認できたものはすべて切離し後再調整を施すものである、③須恵器杯では再調整を施すものは少なく、85%がⅢ類で占められているといった特徴がある。杯類のうち図上で完形に復元できたものは須恵器のみであり、底径／口径が0.56～0.57、器高／口



単位：cm

番号	種　類	層　位	特　徴		口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号	備　考
			外　面	内　面						
1	土師器　甕	ℓ-1	ヨコナデ、ヘラケズリ 底部：木葉痕	ヘラナデ	(25.2) 6 /24	8.2 12/24	27.8	－	R1	A類
2	土師器　甕	ℓ-1	ロクロナデ、(手持ちヘラケズリ)	ロクロナデ	(16.4) 5 /24	－	－	－	R3	B類
3	須恵器　杯	ℓ-2	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.5) 10/24	8.2 24/24	4.05	－	R2	Ⅲ類
4	須恵器　杯	ℓ-2	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.8) 3/24	(8.8) 9 /24	3.20	－	R20	Ⅲ類
5	須恵器　杯	ℓ-4	ロクロナデ、ヘラミガキ 底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ、ヘラミガキ	15.7 20/24	9.9 19/24	4.50	P72	R16	Ⅰ類

第16図　SK3334出土遺物

径が0.24～0.26、外傾度が31～32である。土師器杯・甕でA類が僅かに認められるもののB類が主体となる点では、東側に近接する第26次調査20区SX1351C・D出土土器（註１）など８世紀後葉～９世紀中葉頃の土器群に類似している。杯類についてみると、資料数は少ないももの確認したものは全て底部切離し後再調整が施されており、Ｖ類が圧倒的に多く９世紀後半頃とされる多賀城跡第61次調査第10層出土土器（註２）よりも古い要素と捉えることができよう。須恵器杯では、９世紀後半頃と考えられる山王遺跡多賀前地区出土の第３群土器（註３）と比較するとⅢ類の占める割合が非常に高いことから、この頃までは下らないものと考えられる。したがって、SK3333については、概ね８世紀後葉～９世紀中葉頃の範疇に収まるものと考えておきたい。

SK3334からは土師器杯A・B類、土師器甕A・B類、須恵器杯Ⅰ・Ⅲ類が出土しており、①土師器甕はほとんどがA類である、②須恵器杯ではⅠ類とⅢ類がほぼ同数出土しているといった特徴がある。杯類のうち図上で完形に復元できたものは須恵器のみであり、底径／口径が0.61～0.64、器高／口径が0.23～0.30、外傾度が21～29である。土師器甕でA類が多くを占める点をみれば、SX1351A・B出土土器など延暦９年以前と考えられる土器群と共通するものと考えられる。須恵器杯についてもSX1351B出土のものは底径／口径が0.50～0.74（0.52～0.63中心）、器高／口径が0.25～0.31（0.27～0.29中心）であり、概ね近い数値を示している。一方、８世紀中葉頃と考えられる山王遺跡SD180出土土器（註４）をみると、須恵器杯の底径／口径や器高／口径は近似するものの、土師器杯・甕B類が全く含まれていない点でより古い要素が窺える。したがって、SK3334については、概ね８世紀後葉頃の年代を与えておきたい。

表1　土師器杯・甕におけるA・B類の出土状況

	土師器杯		土師器甕	
	A類	B類	A類	B類
SK3333	3.2 % （1点）	96.8 % (30点)	10.7 % （9点）	89.3 % (75点)
SK3334	7.1 % （1点）	92.9 % (13点)	96.4 % (27点)	3.6 % （1点）

（口縁部及び体部の破片資料も含む）

一方、これら以外の遺構については、出土遺物の中に土師器杯B類が含まれているものが多いことから、８世紀後葉以降に上限年代を求めることができる。このうち、SB3323、SD3330は重複関係でSK3333よりも古いことから、９世紀中葉以前のものと推測される。それら以外のものについては、10世紀前葉頃に出現すると考えられる須恵系土器が全く含まれていないことから、概ね９世紀代に廃絶したものと考えられる。

なお、今回発見した遺構については、城外に施工された方格地割りの変遷でⅠ～Ⅲ期に相当し、このうちSK3334がⅠ期、SB3323やSK3333は下ってもⅢ期の古い段階と考えられる。Ⅳ期の遺構・遺物が確認されないことから、この頃には居住域としての性格が失われた地区であると推測されよう。

４　まとめ

（１）今回の調査では、掘立柱建物跡、溝跡、土壙を発見した。

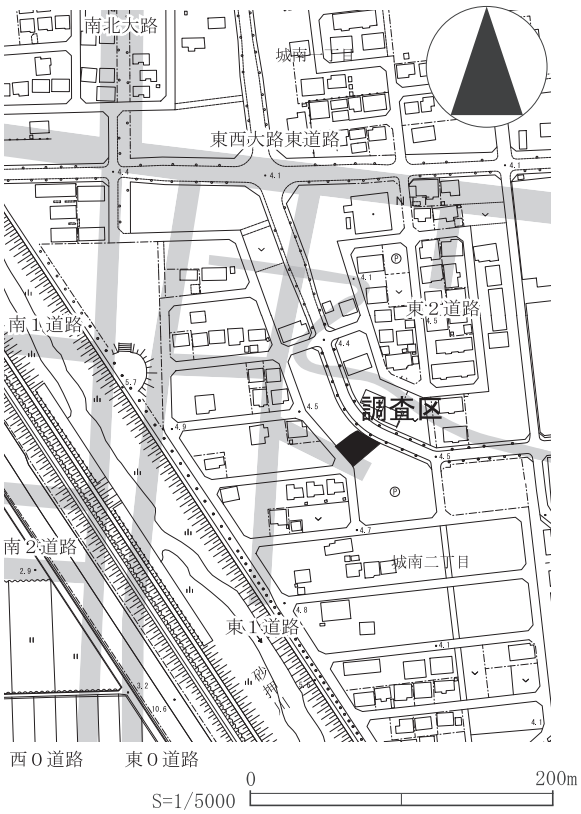
（２）これらの遺構は、城外に施工された方格地割りのなかでもⅠ～Ⅲ期のものである。

註１：多賀城市教育委員会『市川橋遺跡―城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ―』多賀城市文化財調査報告書第70集 2003
註２：宮城県多賀城跡調査研究所「第61次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』 1992
註３：宮城県教育委員会『山王遺跡Ⅳ―多賀前地区考察編―』宮城県文化財調査報告書第171集 1996
註４：多賀城市埋蔵文化財調査センター『山王遺跡―第10次発掘調査概報―』多賀城市文化財調査報告書第27集 1991

Ⅵ　市川橋遺跡第65次調査

1　調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成19年８月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財の係わりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に直径約14㎝、長さ10ｍの鋼管杭を打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等による遺構の保存が計れないか協議を行ったが、杭基礎以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないとのことから、記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、９月３日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、９月５日より現地調査を開始した。



第１図　調査区位置図

調査は、住宅建築部分の表土除去から取りかかった。調査面積と作業時の安全確保のため表土をすべて場外搬出したため、ほぼ対象面積分の調査区を設定することができた。６日より作業員を導入して排水用の側溝を設けるとともに壁断面で土層堆積状況の確認を行ったところ、Ⅲ・Ⅳ層上面がそれぞれ遺構検出面となることが判明した。翌日より、Ⅲ層上面のSB3349・3350掘立柱建物跡、SD3352～3354溝跡、SK3356～3360土壙の埋土掘り下げを開始した。このうちSK3359は、規模が大きく遺物も多量に出土したことからこの作業に多くの時間を要した。また、台風の影響で壁面が崩落したことより、調査区の復旧等にも多くの労力を費やした。12日、それらの作業と並行しながら実測図作成用の基準点を設置し、掘り下げが終了したものから随時平面・断面図を作成する。14日、Ⅲ層上面検出遺構の調査が終了したことから調査区の全景写真撮影を行い、その後直ちにⅢ層を除去しⅣ層上面遺構の検出に取りかかった。その結果、SB3337掘立柱建物跡、SE3338井戸跡、SD3339～3341溝跡、SK3342～3348土壙を発見した。このうちSE3338はほとんどが土砂搬出用に残したスロープ直下にあることから、これを除く全ての調査が終了した後で改めて検出作業を行うこととした。26日、遺構埋土の掘り下げが概ね終了したことからⅣ層上面の全景写真を撮影し、各遺構及び調査区各壁の断面図を作成する。28日、再度重機を用いてSE3338のおよそ全体を検出し、井戸側内の埋土掘り下げ、側板の平面・立面図作成、掘り方埋土の断面図作成など一連の作業を進める。この間、市道に近接した調査区であったため、車両の振動により掘り方埋土が崩落するという事態も発生したが、10月９日までに掘り方の半截状況の写真撮影と側板の取り上げが完了した。10日に調査区内の器材撤収、12日に重機による調査区内の埋め戻しを行い、本調査の一切を終了した。

2　調査成果

（1）層序（第２図）

今回の調査では、現代の盛土や旧水田耕作土の下で３層の堆積を確認した。このうち遺構検出面となるのはⅢ・Ⅳ層上面であり、いずれも南西側に向かって緩やかに下っている。

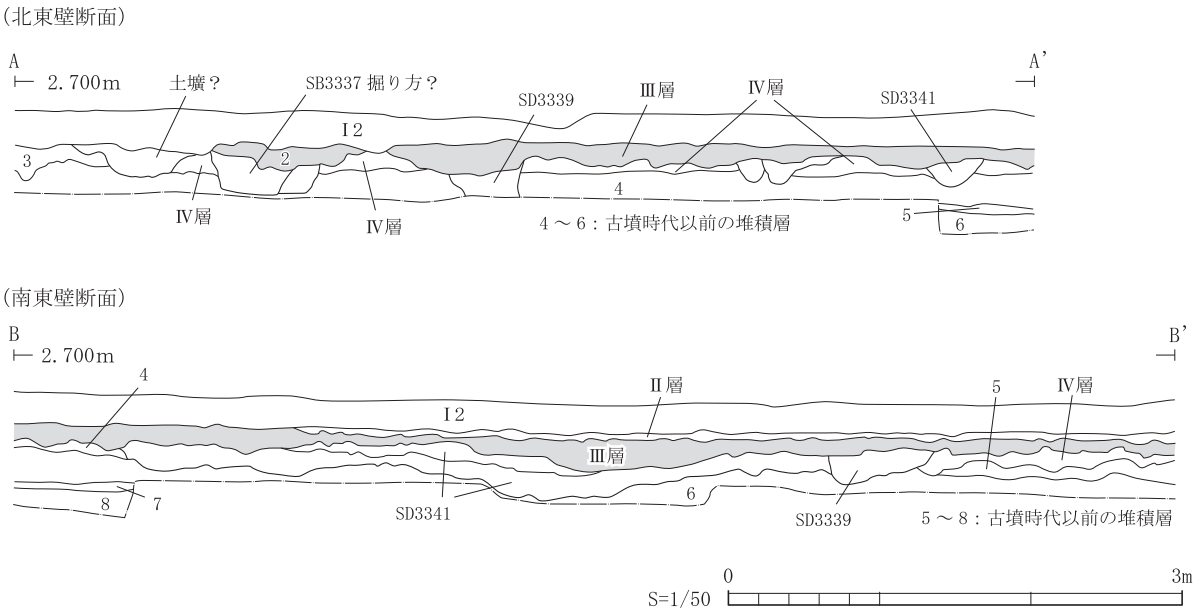
Ⅰ　1　層：区画整理に伴う盛土であり、厚さは1.8～2.1ｍである。

Ⅰ　2　層：区画整理前の水田耕作土であり、厚さは18～26㎝である。

Ⅱ　　層：調査区中央以南に認められる褐灰色粘土であり、厚さは５～15㎝である。灰白色火山灰が斑状に混入しており、周辺の成果と比較すると10世紀前葉以降の古代の堆積層と考えられる。

Ⅲ　　層：調査区のほぼ全域に認められる黒褐色粘質土であり、厚さは５～25㎝である。Ⅳ層検出遺構の最上面若しくはその窪みにやや厚く堆積しているが、北東端部ではほとんど確認できなくなる。古代の遺構検出面である。

Ⅳ　　層：調査区全域で確認されるにぶい黄橙色またはにぶい黄色砂質土であり、厚さは15～25㎝である。今回発見した遺構の最終遺構検出面である。なお、この下層でも沖積作用によって形成された砂層や砂質土層を確認している。出土遺物がないため年代については定かでないが、周辺の調査成果から古墳時代以前のものと推測される。



第２図　調査区土層断面図

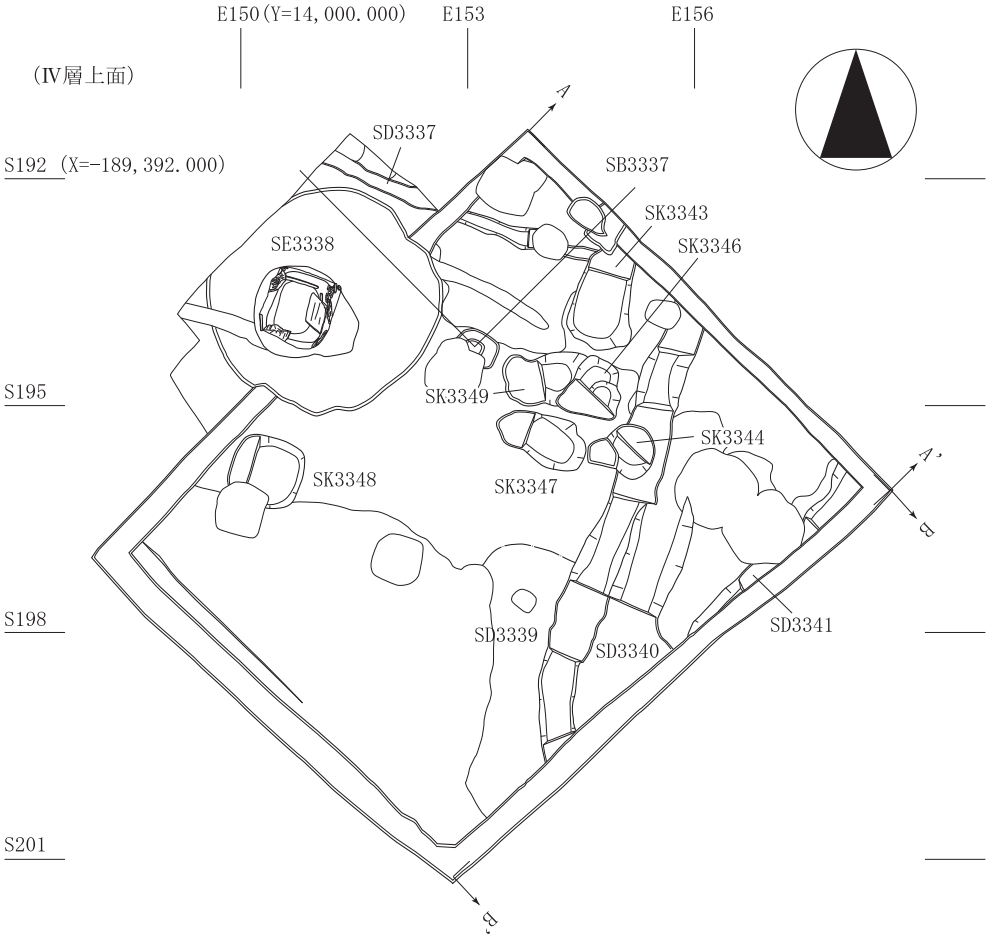
（2）発見遺構と遺物

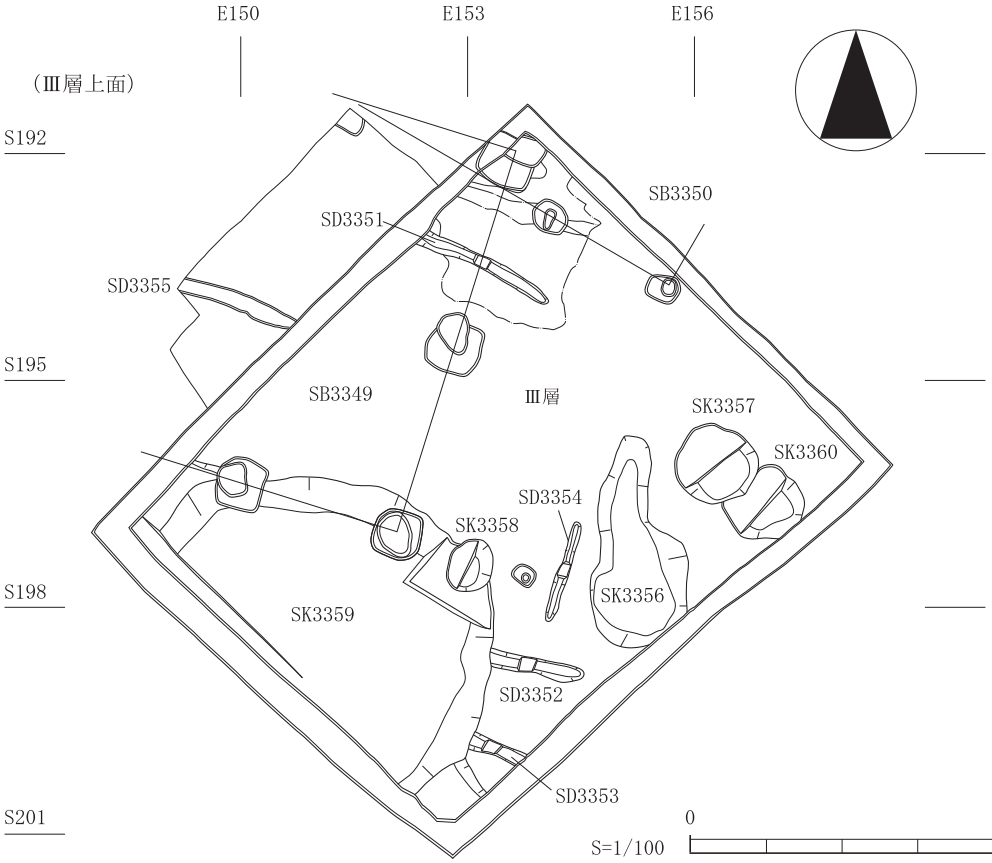
今回の調査では、Ⅳ層上面で掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土壙、Ⅲ層上面で掘立柱建物跡、溝跡、土壙を発見し、土師器、須恵器、木製品が出土した。以下、層ごとに遺構の概要について記載する。

〔Ⅳ層上面〕

SB3337掘立柱建物跡（第４・５図）

調査区北部で発見した掘立柱建物跡である。南北１間の柱列より推測したものであり、建物の南東隅を構成するものと考えられる。SE3338、SK3336と重複し、前者より古く後者よりも新しい。いずれの柱穴

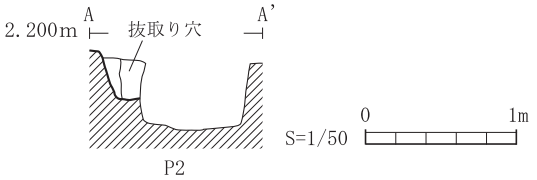

E150(Y=14,000.000)
E153
E156
(Ⅳ層上面)
S192 (X=-189,392.000)
S195
S198
S201
A
A'
B
B'
SD3337
SB3337
SK3343
SK3346
SE3338
SK3349
SK3344
SK3348
SK3347
SD3339
SD3340
SD3341


E150
E153
E156
(Ⅲ層上面)
S192
S195
S198
S201
SD3351
SB3350
SD3355
SB3349
Ⅲ層
SK3357
SK3360
SD3354
SK3358
SK3356
SK3359
SD3352
SD3353
0
5m
S=1/100

第３図　調査区全体図

でも柱抜取り穴が認められ、南東隅は「柱のあたり痕跡」を残すものと考えられる（註）。方向は、北で約45度東に偏しており、柱間は約2.3ｍである。柱穴の平面形は方形を基調としており、南東隅柱穴で測ると長辺約55㎝、短辺40㎝、深さ34㎝である。埋土は黒褐色粘土であり、にぶい黄色砂質土が小ブロック状に混入している。柱抜取り穴は黒褐色粘土であり、にぶい黄色砂質土が斑状に混入している。

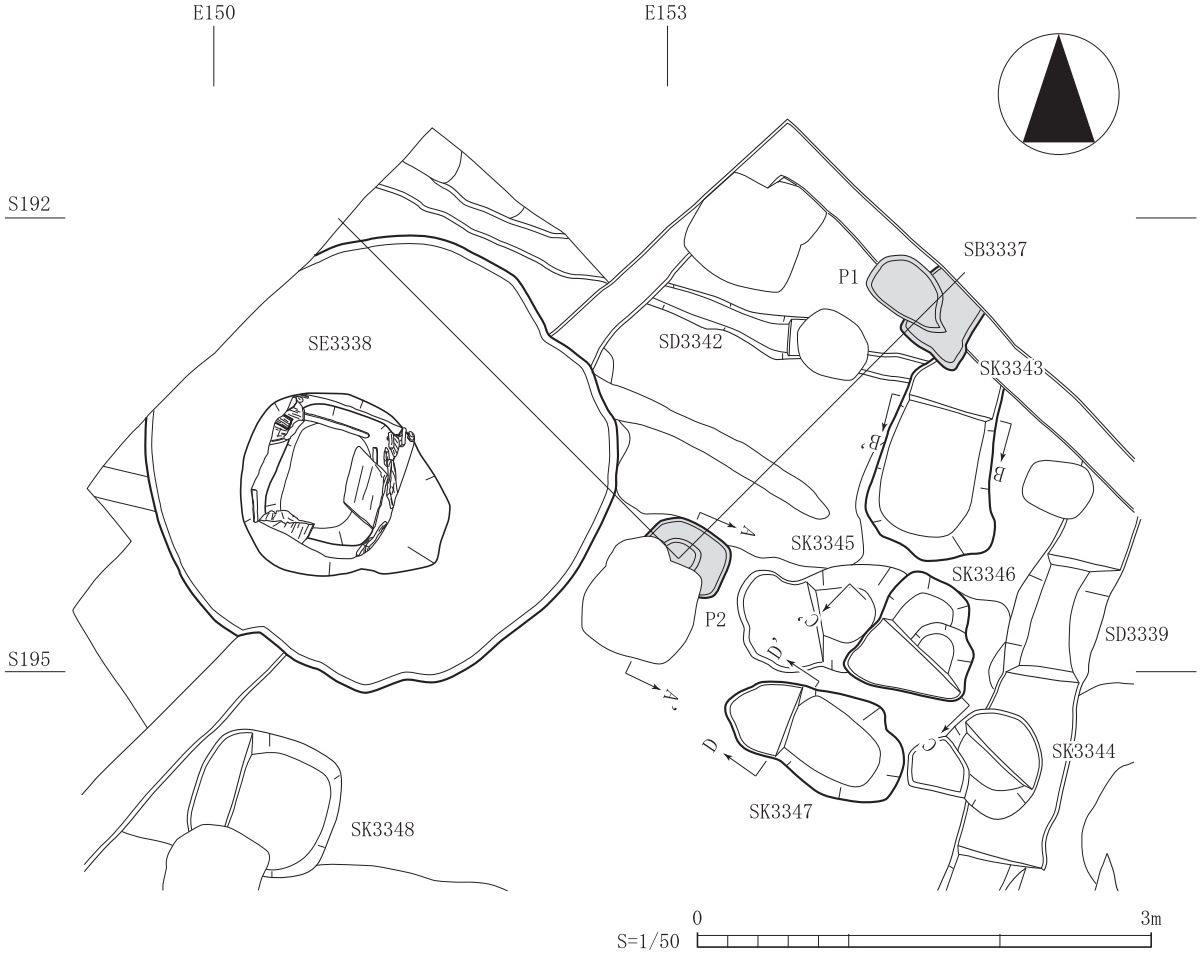
遺物は、掘り方から須恵器杯（Ｖ類）、抜取り穴から土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器杯が出土している。



第４図　SB3337柱穴断面図

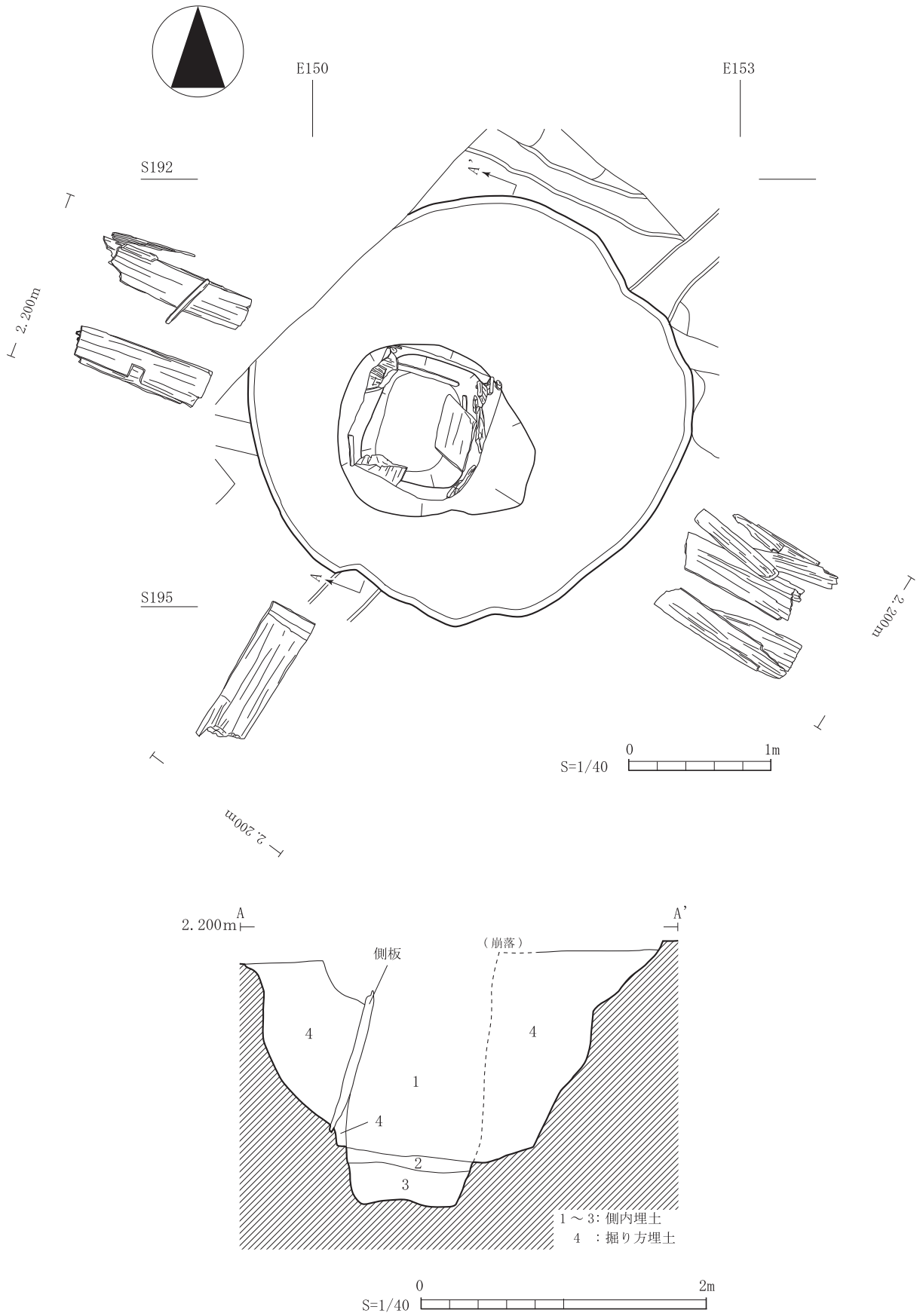
SE3338井戸跡（第６～８図）

調査区北部で発見した縦板組の井戸跡である。井戸側は掘り方中央やや西よりで確認したが、上面には長径約1.4ｍ、短径約1.2ｍの抜取り穴があり、これにより側板の多くが破壊されている。また、内側に倒壊したものも多く、残存状況は非常に悪い。側板は長さ80～110㎝、幅20～50㎝、厚さ５～10㎝のものが主体であり、それらの隙間や背面にはより小形の板材が多く入れられていた。南東を除く各隅には直径約５㎝の丸太材が残存しており、西側では横桟の一部を確認している。井戸側の規模は、内法で一辺約90㎝、深さ約1.8ｍであり、このうち下部40㎝程が掘り方底面より深く掘り下げられている。埋土は３層に分けることができる。１層が黒色粘土、２層が暗緑灰色粗砂、３層がオリーブ黒色粘土であり、このうち２・

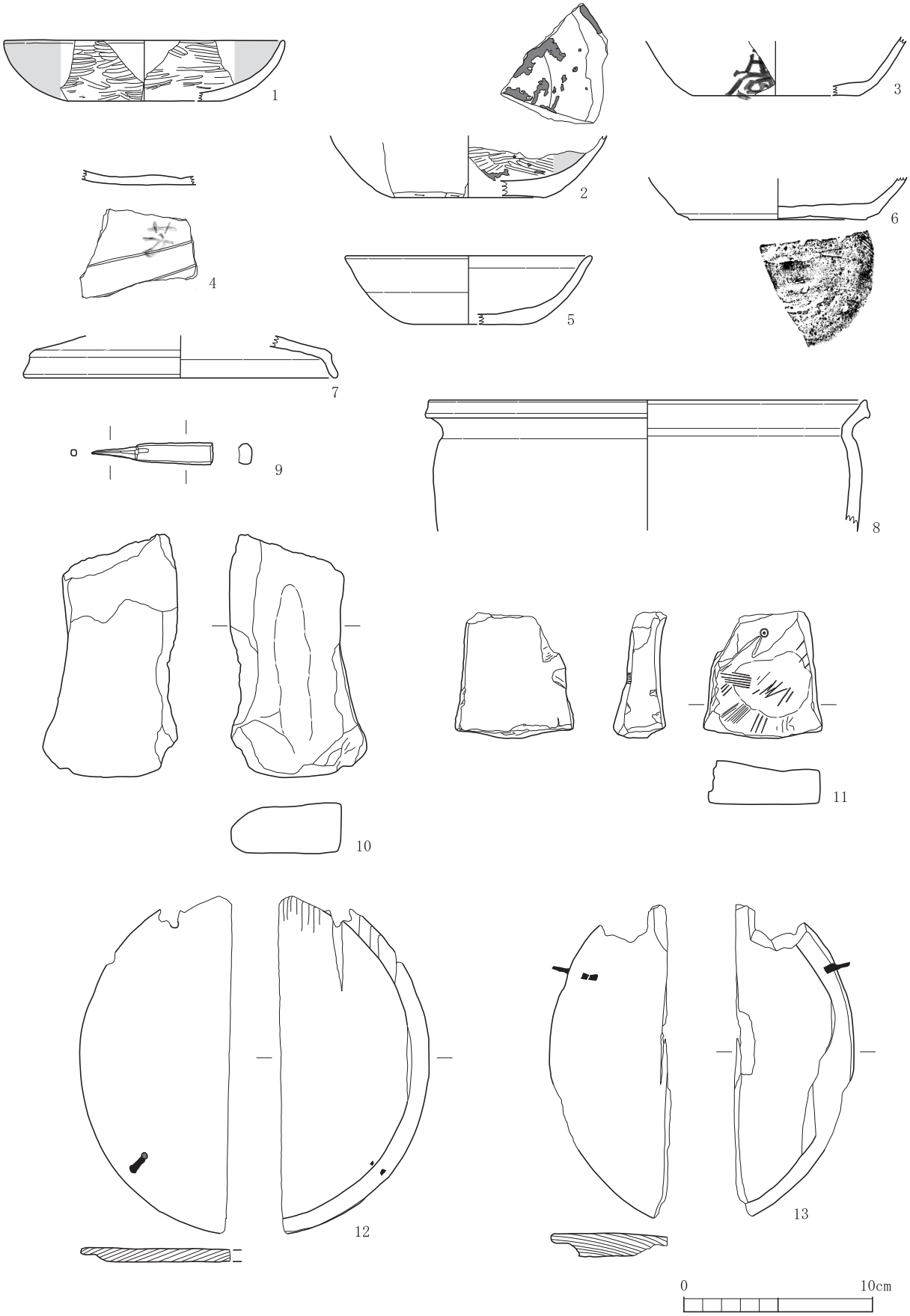


第５図　SB3343、SE3338ほか平面図

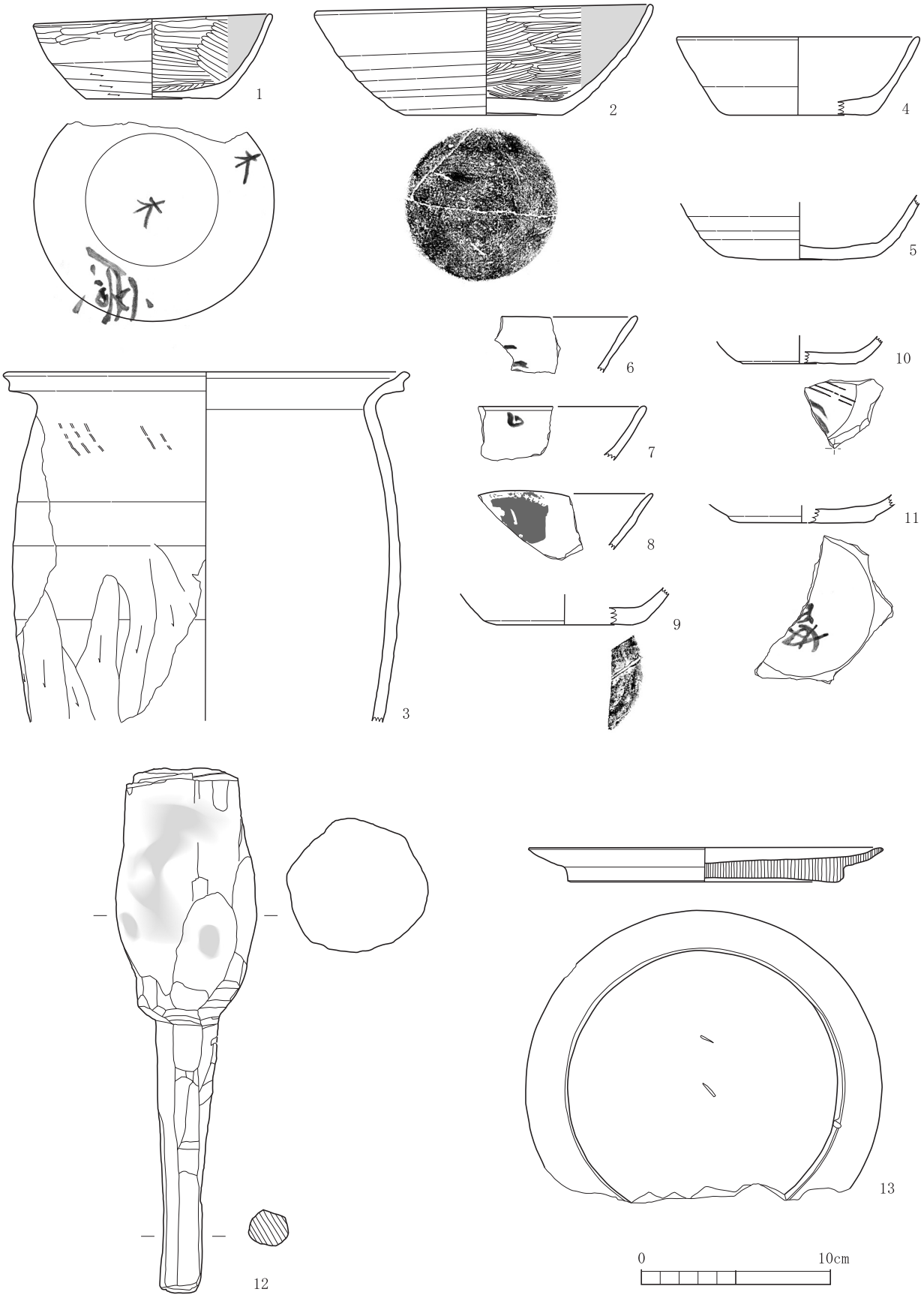
註：南東隅柱穴のものは、平面及び断面形が柱痕跡と近似している。しかし、埋土にⅣ層起因と考えられるにぶい黄色砂質土が比較的多く混入していることから、ここでは「柱のあたり痕跡」と判断した。



第６図　SE3338平面図・立面図・断面図



第７図　SE3338掘り方出土遺物



第８図　SE3338側内・抜取り穴出土遺物

SE3338掘り方出土遺物観察表

番号	種類	特徴		口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
		外面	内面						
1	土師器　杯	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ、黒色処理	(14.8) 1/24	(8.2) 2/24	3.2	－	R80	A類
2	土師器　杯	ロクロナデ、手持ちヘラケズリ 底部：回転糸切り→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	－	(8.2) 3/24	－	－	R20	BⅡc類漆付着
3	須恵器・杯	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	－	(8.8) 3/24	－	－	R24	Ⅲ類墨書「廣」
4	須恵器・杯	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	－	－	－	P73	R13	Ⅲ類、ヘラ書き 墨書「芳」
5	須恵器・杯	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.1) 4/24	(6.0) 7/24	3.65	－	R10	Ⅲ類
6	須恵器・杯	ロクロナデ 底部：ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	－	(9.4) 7/24	－	－	R９	Ⅱa類
7	須恵器・蓋	ロクロナデ	ロクロナデ	(16.4) 3/24	－	－	－	R８	
8	須恵器・甕	ロクロナデ	ロクロナデ	(23.2) 4/24	－	－	－	R６	
9	不明骨製品	長さ：6.5、最大幅：1.2					－	R81	
10	砥石	長さ：12.9、幅：5.8～7.2、最大厚：2.7					－	R11	
11	砥石	幅：5.1～6.3、最大厚：2.8					－	R７	
12	木製品 円形曲物	外径：(19.0)、厚さ：0.8、柾目					－	R３	蓋板
13	木製品 円形曲物	外径：(19.8)、厚さ：1.3、柾目					－	R４	蓋板

SE3338側内・抜取り穴出土遺物観察表

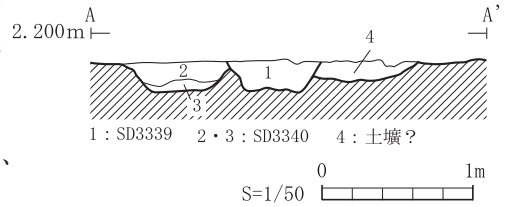
番号	種　類	層　位	特　徴		口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号	備　考
			外　面	内　面						
1	土師器　杯	井戸側内埋土	口縁部：ヘラミガキ 底部：回転糸切り→回転ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	12.5 16/24	6.5 24/24	4.2	P72	R23	BⅠc類 墨書「廣」・「木」
2	土師器　杯	井戸側内埋土	ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	17.8 23/24	8.25 24/24	5.7	P72	R１	BⅡ類
3	土師器　甕	井戸側内埋土	叩き→ロクロナデ→手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(20.8) 8 /24	－	－	－	R14	B類
4	須恵器　杯	井戸側内埋土	ロクロナデ底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(12.6) 2 /24	(7.5) 9 /24	4.15	－	R５	Ⅲ類
5	須恵器　杯	抜取り穴	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	－	8.6 14/24	－	－	R15	Ⅲ類
6	須恵器　杯	井戸側内埋土	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	－	R３	墨書
7	須恵器　杯	抜取り穴	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	－	R17	墨書
8	須恵器　杯	井戸側内埋土	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	－	R18	油煙付着
9	須恵器　杯	井戸側内埋土	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	－	(7.2) 8 /24	－	－	R４	ヘラ書き
10	須恵器　杯	井戸側内埋土	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	－	(6.0) 3 /24	－	－	R22	墨書ヘラ書き
11	須恵器　杯	井戸側内埋土	ロクロナデ 底部：ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	－	6.4 12/24	－	P73	R２	墨書
12	木製品 横槌	井戸側内埋土	長さ：27.8、最大径：7.5					－	R２	
13	木製品 挽物台付皿	井戸側内埋土	口径：18.8、底径：14.5、器高：1.8、底部にロクロ爪痕２ヵ所、柾目					－	R１	

３層が掘り方底面より深く掘り込まれた箇所にあたる。掘り方の平面形はおおよそ円形であり、規模は直径約３m、深さ約1.５mである。壁は上端部が緩やかであるものの、それ以外は垂直気味に立ち上がっている。埋土は黒褐色粘土であり、にぶい黄色砂質土がブロック状に多量に混入している。

遺物は、掘り方から土師器杯（A・BⅡ・BⅡc・BⅤ類）・甕（A・B類）、須恵器杯（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類）・蓋・瓶・甕、平瓦（ⅡA類）、丸瓦（Ⅱ類）、砥石、木製品曲げ物、不明骨製品、井戸側内から土師器杯（A・BⅠc・BⅡ・BⅡc・BⅤ類）・甕（A・B類）、須恵器杯（Ⅲ類）・高台付杯・双耳杯・瓶・甕、軒丸瓦、挽物台付皿、横槌、抜取り穴から土師器杯（BⅠ・BⅠc類）・甕（A・B類）、須恵器杯（Ⅲ）・瓶・甕、丸瓦が出土している。このうち、土師器杯や須恵器杯には墨書やヘラ書きが施されたもの、漆や油煙が付着したものが確認できる。

SD3339溝跡（第９・16図）

調査区東部で発見した南北方向の溝跡である。北側はほぼ直線的であるが、南側はやや東に彎曲しながら調査区外に延びている。SD3340、SK3344と重複し、SK3344よりも古く、SD3340よりも新しい。方向は北で約21度東に偏しており、規模は長さ７m以上、上幅45～65cm、下幅20～40cm、深さ20～30cmである。底面は概ね平らであり、南北の比高はほとんどない。壁も凹凸はほとんどなく、垂直気味に立ち上がっている。埋土は黒褐色粘土が主体であり、にぶい黄色砂質土が多量に混入している。



第９図　SD3339ほか断面図

遺物は、土師器甕（B類）、須恵器杯が出土している。

SD3340溝跡（第９・16図）

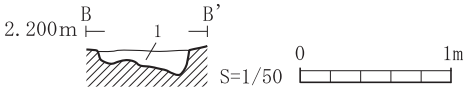
調査区東部で発見した南北方向の溝跡である。SD3339と重複し、これよりも古い。規模は長さ3.５m以上、上幅70～75cm、下幅40～50cm、深さ約40cmである。底面は概ね平らであり、北側から南側に向かって僅かに下っている。壁も凹凸は少なく、垂直気味に立ち上がっている。埋土は２層に分けることができる。いずれも黒褐色粘土が主体であるが、下層にはにぶい黄色砂質土が多量に混入している。遺物は出土していない。

SD3341溝跡（第２・16図）

調査区東部で発見した溝跡である。方向は西で約20度北に偏しており、規模は長さ3.７m以上、上幅16～28cm、下幅12～17cm、深さ約20～30cmである。底面は概ね平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は黒褐色粘質土であり、にぶい黄色砂質土が斑状に混入している。遺物は出土していない。

SK3343土壙（第５・10図）

調査区北部で発見した南北に長い不整形の土壙である。SB3337、SD3342と重複し、前者よりも古く後者よりも新しい。規模は南北約1.５m、東西0.６～0.９m、深さ10～20cmである。底面は凹凸が著しく、西側ほど深くなっている。壁は垂直気味に立ち上がっている。埋土は黒褐色粘質土であり、炭化物やにぶい黄橙色砂質土が斑状に多く混入している。



第10図　SK3343断面図

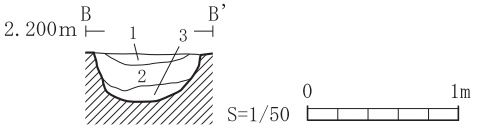
遺物は、土師器杯（BⅡ類）・甕（B類）、須恵器杯・蓋、平瓦が出土している。

SK3344土壙（第11・12・16図）

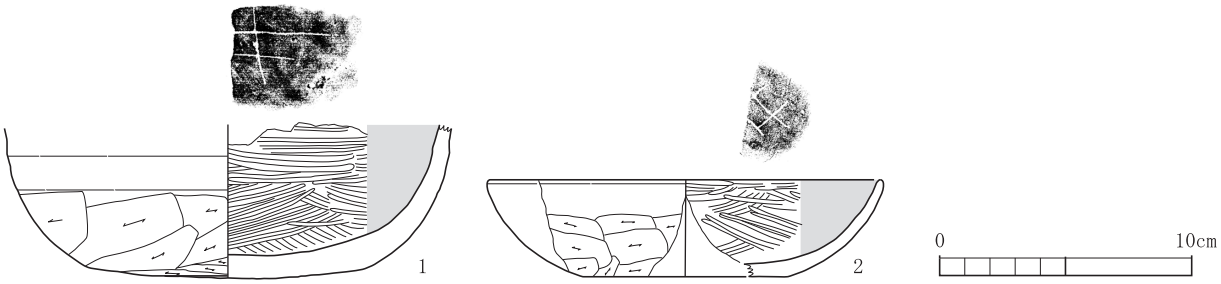
調査区北部で発見した、およそ円形の土壙である。SD3339と重複し、それよりも新しい。規模は長径約

70cm、深さ約30cmである。底面はやや丸みを帯びて窪んでおり、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は３層に分けることができる。いずれも黒褐色粘質土が主体であるが、１層に炭化物、３層ににぶい黄橙色砂質土が多く混入している。

遺物は、土師器杯（BⅡ類）・甕（B類）がある。このうち杯には、内面に刻書が施されるものがある。



第11図　SK3344断面図



単位：cm

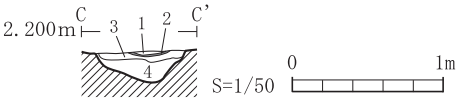
番号	種　類	特　徴		口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号	備　考
		外　面	内　面						
1	土師器　杯	ロクロナデ 底部～体部中位：手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	－	10.8 18/24	－	－	R67	BⅡ類・刻書
2	土師器　杯	口縁部：ロクロナデ 底部～体部：手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	(15.4) 3/24	(8.0) 3/24	3.85	－	R66	BⅡ類・刻書

第12図　SK3344出土遺物

SK3345土壙（第13・16図）

調査区北部で発見した東西に長い不整形の土壙である。SK3346と重複し、それよりも新しい。規模は東西約1.1ｍ、南北0.6～0.7ｍ、深さ22cmである。底面は丸みを帯びて窄まっており、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は4層に分けることができる。１・３層が黒褐色粘土、２層が炭化物の薄層、４層が褐灰色粘土であり、このうち4層にはにぶい黄橙色砂質土が多量に混入している。

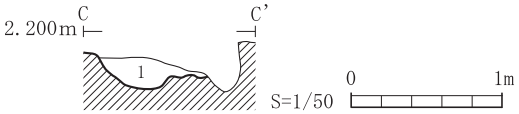
遺物は、土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器杯（Ⅲ・Ⅴ類）が出土している。このうち土師器杯には、体部に墨痕が認められるものがある。



第13図　SK3345断面図

SK3346土壙（第５・14図）

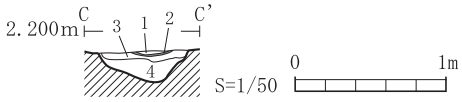
調査区北部で発見した不整形の土壙である。SK3345と重複し、それよりも古い。規模は東西0.5～0.8ｍ、南北0.7～0.8ｍ、深さ15～26cmである。底面は凹凸が多く、南半部が約10cm深く掘り込まれている。壁は概ね緩やかに立ち上がっている。埋土は、にぶい黄橙色砂質土が多量に混入するオリーブ黒色粘土である。遺物は出土していない。



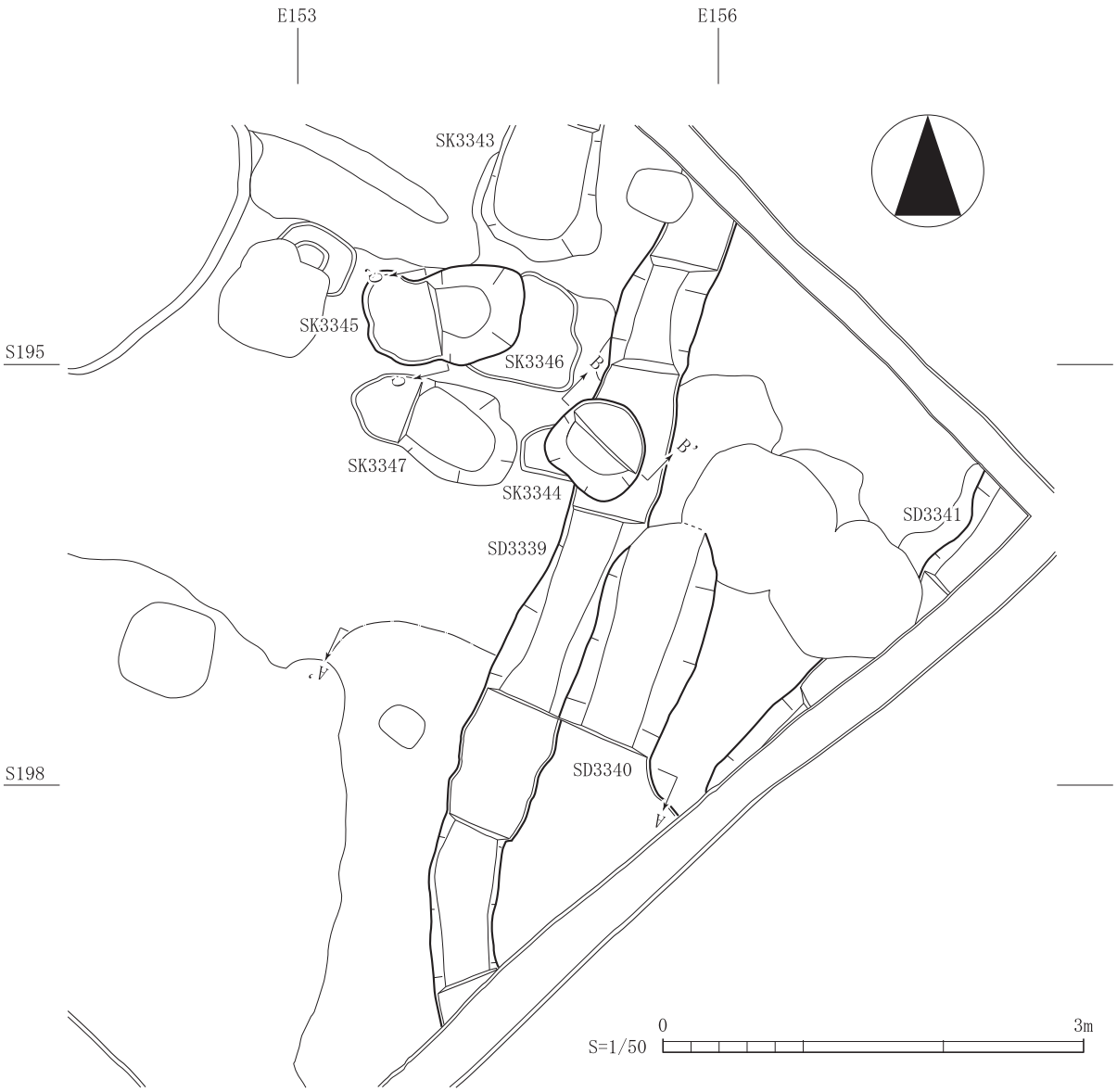
第14図　SK3346断面図

SK3347土壙（第５・15図）

調査区北部で発見した東西に長い不整形の土壙である。規模は東西約1.2ｍ、南北0.5～0.6ｍ、深さ20cmである。底面は部分的に凹凸が認められるものの、概ね平らである。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。埋土は、にぶい黄色砂質土が



第15図　SK3347断面図



第16図　SD3339、SK3344ほか平面図

僅かに混入する褐灰色粘土である。

遺物は、土師器杯（B類）・甕（B類）、土器片製円板が出土している。

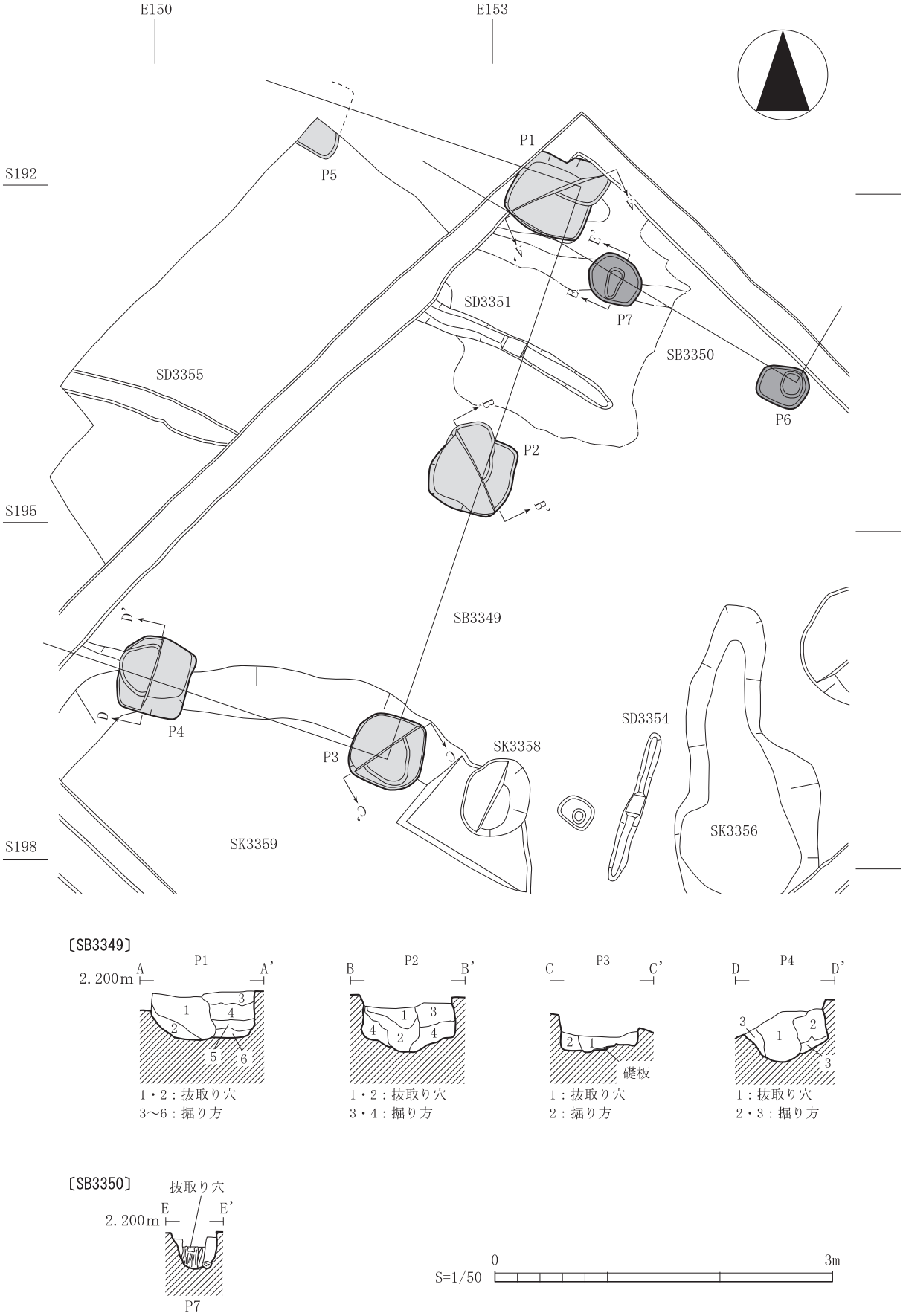
SK3348土壙（第５図）

調査区西部で発見した方形の土壙である。規模は一辺約0.９m、深さ約10cmである。底面概ね平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は、にぶい黄色砂質土が多量に混入する褐灰色粘土である。遺物は出土していない。

〔Ⅲ層上面〕

SB3349掘立柱建物跡（第17・18図）

調査区西部で発見した南北２間、東西２間以上の掘立柱建物跡である。SK3359と重複し、それよりも古い。柱穴は５基検出しており、北側の柱列東より１間目柱穴を除く全ての柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は、東側の柱列で測ると北で約19度東に偏している。建物の規模は東側の柱列で約5.４m、柱間は南より約2.７m、約2.７mであり、南側の柱間は約2.２mである。柱穴の平面形は方形を基調とし、規模は北



第17図　SB3349・3350平面図・断面図

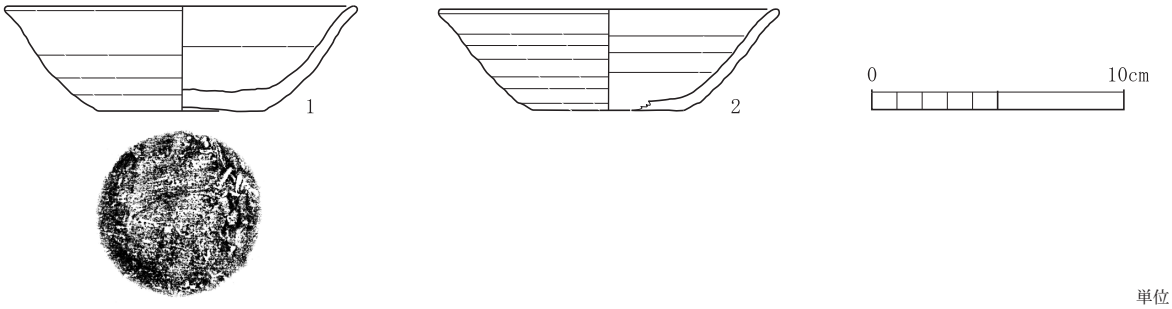
東隅柱穴で測ると長辺75㎝、短辺70㎝、深さ50㎝である。埋土はにぶい黄色砂質土が混入する黒褐色粘土が主体であるが、北東隅柱穴ではにぶい黄色砂質土主体の埋土と互層になっている。抜取り穴は柱穴の中央付近に認められるものと、中央から隅付近に認められるものがある。埋土は黒褐色粘土が主体であり、上層に炭化物が混入するものが多い。

遺物は、掘り方から土師器甕（B類）、須恵器杯（Ⅲ類）、抜取り穴から土師器杯（BⅡ・BⅡc類）・甕（B類）、須恵器杯（Ⅱc・Ⅲ・Ⅴ類）・瓶・甕が出土している。

SB3350掘立柱建物跡（第17・18図）

調査区北部で発見した掘立柱建物跡である。東西１間の柱列より推測したものであり、建物の南東隅であると考えられる。いずれの柱穴でも柱抜取り穴が認められ、西側の柱穴では破損した柱材の一部が残存している。方向は、西で約31度北に偏しており、柱間は約1.９ｍである。柱穴の平面形は概ね方形を基調とし、西側の柱穴で測ると長辺約50㎝、短辺約40㎝、深さ約30㎝である。埋土は褐灰色粘土が主体であり、炭化物やにぶい黄色砂質土が多く混入している。抜取り穴は柱穴の中央付近に認められる。褐灰色粘土が主体であり、にぶい黄色粘土が僅かに混入している。

遺物は、須恵器杯（Ⅱa類）が出土している。



単位：cm

番号	種　類	層　位	特　徴		口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号	備　考
			外　面	内　面						
1	須恵器　杯	SB3350 抜取り穴	ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(13.8) 9/24	6.6 24/24	4.2	－	R64	Ⅱ類
2	須恵器　杯	SB3349 抜取り穴	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(13.4) 6/24	(6.0) 6 /24	4.0	－	R65	Ⅴ類

第18図　SB3349・3350出土遺物

SK3356土壙（第24図）

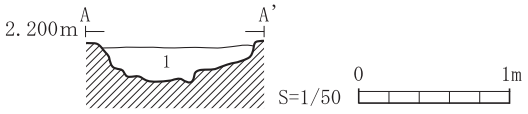
調査区東部で発見した南北に長い不整形の土壙である。規模は南北約2.８ｍ、東西0.５～1.３ｍ、深さ約５～10㎝である。底面は凹凸が著しく平坦でない。壁にも凹凸が多く認められるが、緩やかに立ち上がっている。埋土は、炭化物が多量に混入する黒色粘土である。

遺物は、土師器杯（BⅤ類）・甕（B類）、須恵器杯（Ⅲ類）・高台付杯・甕が出土している。

SK3357土壙（第19・24図）

調査区東部で発見した円形の土壙である。SK3360と重複し、それよりも新しい。規模は直径約1.１ｍ、深さ25㎝である。底面は凹凸が著しく平坦でない。壁は南側が垂直に立ち上がっているが、それ以外は緩やかである。埋土は、炭化物が多量に混入する黒褐色粘土である。

遺物は、土師器杯（BⅡ・BⅤ類）・甕（B類）、須恵器杯（Ⅲ・Ⅴ類）、甕が出土している。

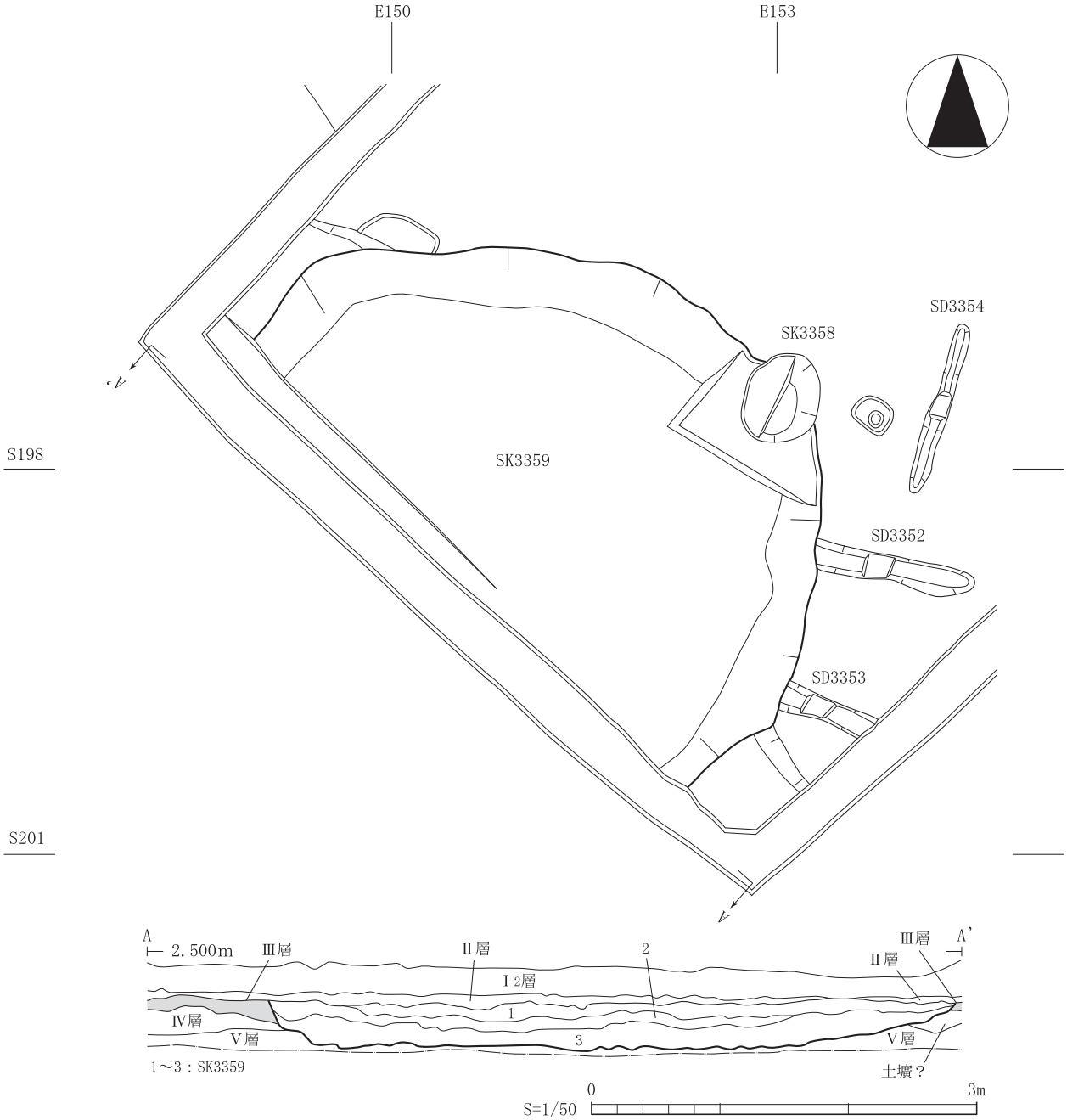


第19図　SK3357断面図

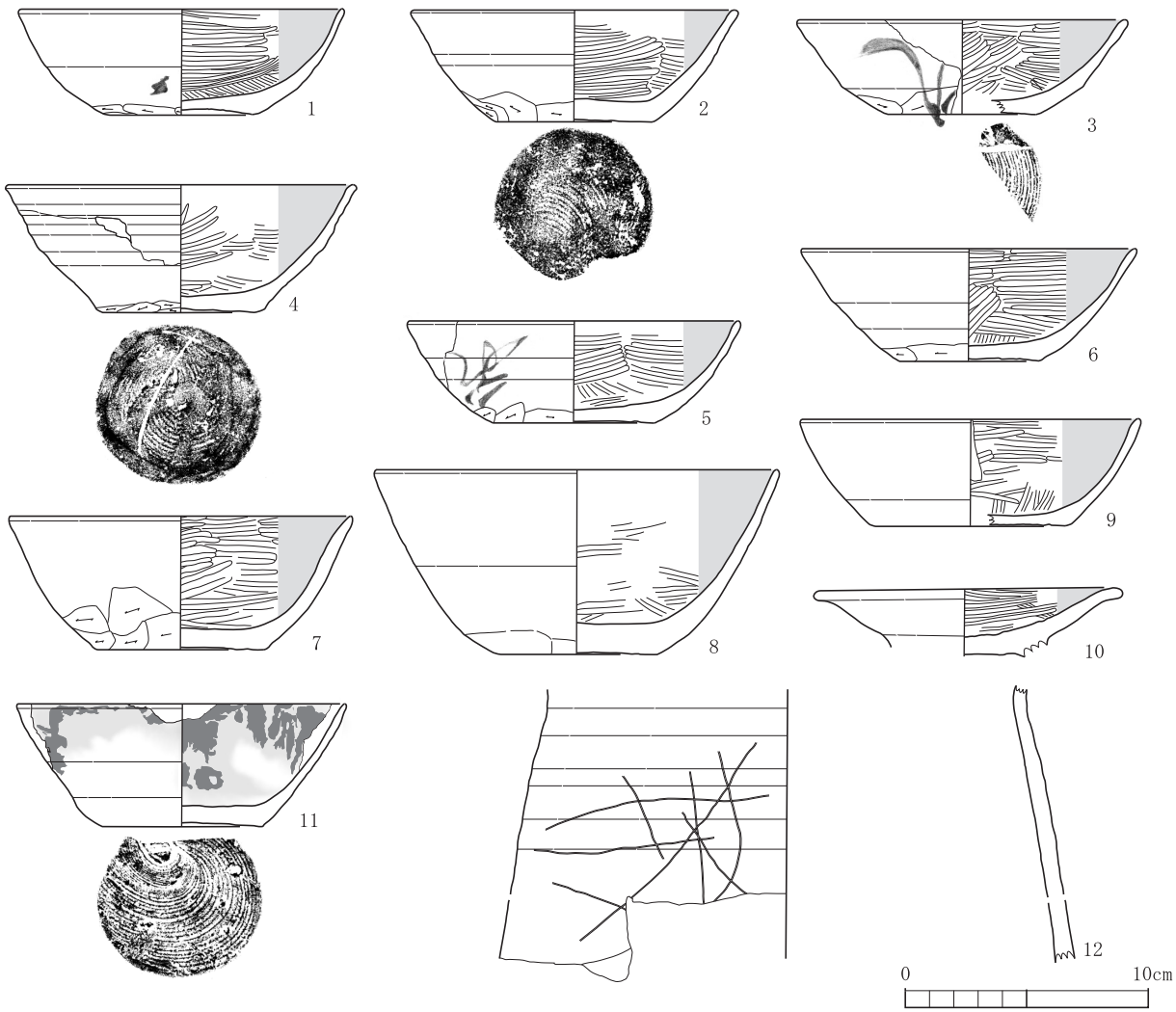
SK3359土壙（第20～22図）

調査区南半部で発見した不整形の土壙である。SB3349、SD3352･3353、SK3358と重複し、SD3352･3353よりも古く、SK3358よりも新しい。規模は東西4.9ｍ、南北3.2ｍ以上、深さ約40㎝である。底面は凹凸が著しく、北側から南側に向かって緩やかに下っている。壁もやや凹凸が多いものの、緩やかに立ち上がっている。埋土は３層に分けることができる。いずれも黒褐色粘土が主体であり、２層には炭化物が多量に混入している。

遺物は、土師器杯（Ａ・ＢⅠ・ＢⅡ・ＢⅡc・ＢⅤ類）・甕（Ａ・Ｂ類）、須恵器杯（Ⅰ・Ⅱ・Ⅱc・Ⅲ・Ⅴ類）・長頸瓶・瓶・甕、丸瓦（Ⅱ・ⅡＡ類）、砥石・土錘・製塩土器が出土している。このうち、土師器杯や須恵器杯には墨書やヘラ書きが施されたもの、漆や油煙が付着したものが確認できる。また、土師器甕の体部にもヘラ書きが認められるものもある。



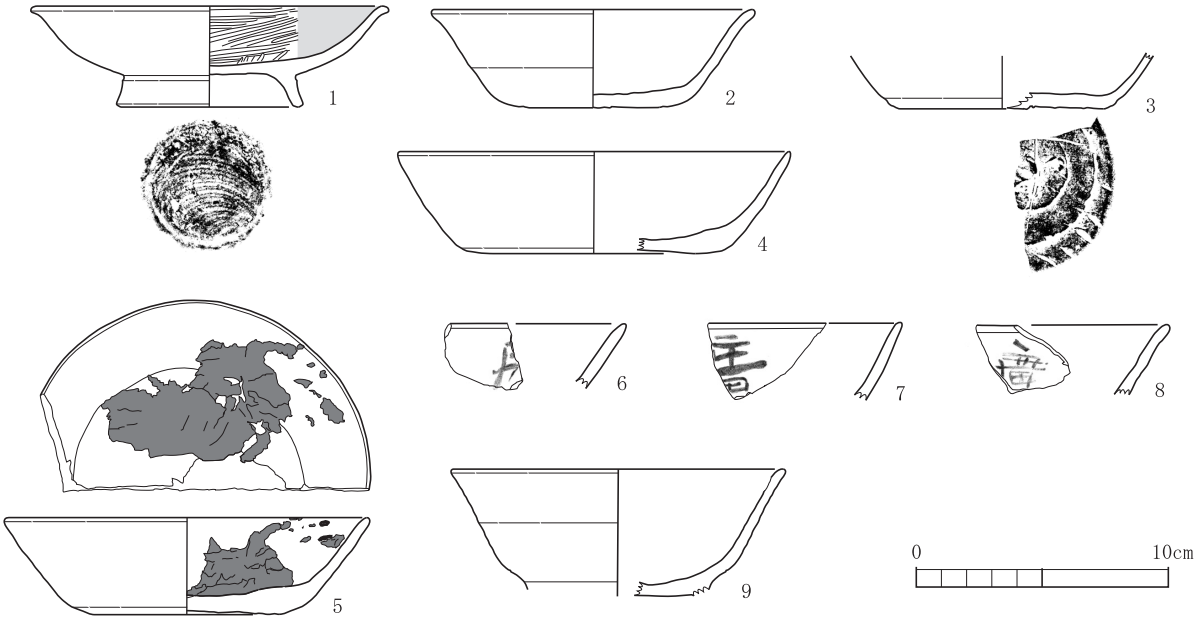
第20図　SK3359平面図・断面図



単位：cm

番号	種　類	層　位	特　徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備　考
			外　面	内　面						
1	土師器　杯	ℓ-1	ロクロナデ、体部下:手持ちヘラケズリ 底部:回転糸切り→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	(13.2) 6 /24	6.0 24/24	4.35	P72	R26	BⅡc類 「墨痕」
2	土師器　杯	ℓ-1	ロクロナデ、体部下:手持ちヘラケズリ 底部:回転糸切り→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	(13.2) 5 /24	6.4 14/24	4.6	－	R47	BⅡc類
3	土師器　杯	ℓ-1	ロクロナデ、体部下:手持ちヘラケズリ 底部:回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	(13.3) 3 /24	(6.2) 5 /24	3.9	P73	R46	BⅡc類 「墨書」
4	土師器　杯	ℓ-1	ロクロナデ、体部下:手持ちヘラケズリ 底部:回転糸切り→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	(14.4) 3 /24	6.3 24/24	5.25	P72	R48	BⅡc類
5	土師器　杯	ℓ-1	ロクロナデ、体部下:手持ちヘラケズリ 底部:回転糸切り→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	(13.4) 6 /24	6.6 20/24	4.2	P73	R72	BⅡc類 「墨書」
6	土師器　杯	ℓ-1	ロクロナデ、体部下:手持ちヘラケズリ 底部:回転糸切り→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	(13.6) 3 /24	5.75 24/24	4.65	－	R28	BⅡc類
7	土師器　杯	ℓ-1	ロクロナデ、体部下:手持ちヘラケズリ 底部:回転糸切り→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	(13.3) 7 /24	6.8 12/24	5.5	－	R29	BⅡc類
8	土師器　杯	ℓ-1	ロクロナデ、体部下:手持ちヘラケズリ 底部:手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	(16.4) 2 /24	6.7 24/24	7.6	－	R25	BⅡ類
9	土師器　杯	ℓ-1	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	(13.8) 2 /24	(7.8) 8 /24	4.4	－	R45	BⅤ類
10	土師器 高台付杯	ℓ-1	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	(12.7) 12/24	－	－	－	R49	
11	須恵器　杯	ℓ-1	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(13.3) 3 /24	6.55 18/24	5.1	－	R53	Ⅴ類 油煙付着
12	土師器　甕	ℓ-1	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	－	R32	体部にヘラ書き

第21図　SK3359出土遺物（1）



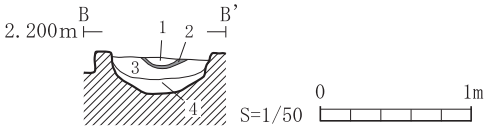
単位：cm

番号	種　類	層　位	特　徴		口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号	備　考
			外　面	内　面						
1	土師器 高台付杯	ℓ-2	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(13.6) 8/24	7.0 18/24	4.0	P72	R33	
2	須恵器　杯	ℓ-2	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(12.6) 11/24	(6.8) 10/24	3.9	－	R39	Ⅲ類
3	須恵器　杯	ℓ-2	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	－	(8.0) 7/24	－	－	R42	Ⅲ類
4	須恵器　杯	ℓ-2	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(15.4) 3 /24	(10.4) 6/24	4.05	－	R40	Ⅲ類
5	須恵器　杯	ℓ-2	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(14.2) 9 /24	7.4 12/24	3.85	P72	R37	Ⅲ類漆付着
6	須恵器　杯	ℓ-2	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	－	R36	墨書
7	須恵器　杯	ℓ-2	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	－	R35	墨書「廣」
8	須恵器　杯	ℓ-2	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	P73	R34	墨書「廣」
9	須恵器 高台付杯	ℓ-2	ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(13.1) 3 /24	－	－	－	R50	

第22図　SK3395出土遺物（２）

SK3358土壙（第23・24図）

調査区中央部で発見した南北に長い円形の土壙である。SK3359と重複し、それよりも新しい。規模は長径75㎝、短径60㎝、深さ25㎝である。底面は概ね平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は４層に分けることができる。１・２・４層は黒色粘土、２層は炭化物の薄層であり、このうち４層には灰黄褐色砂質土が多量に混入している。

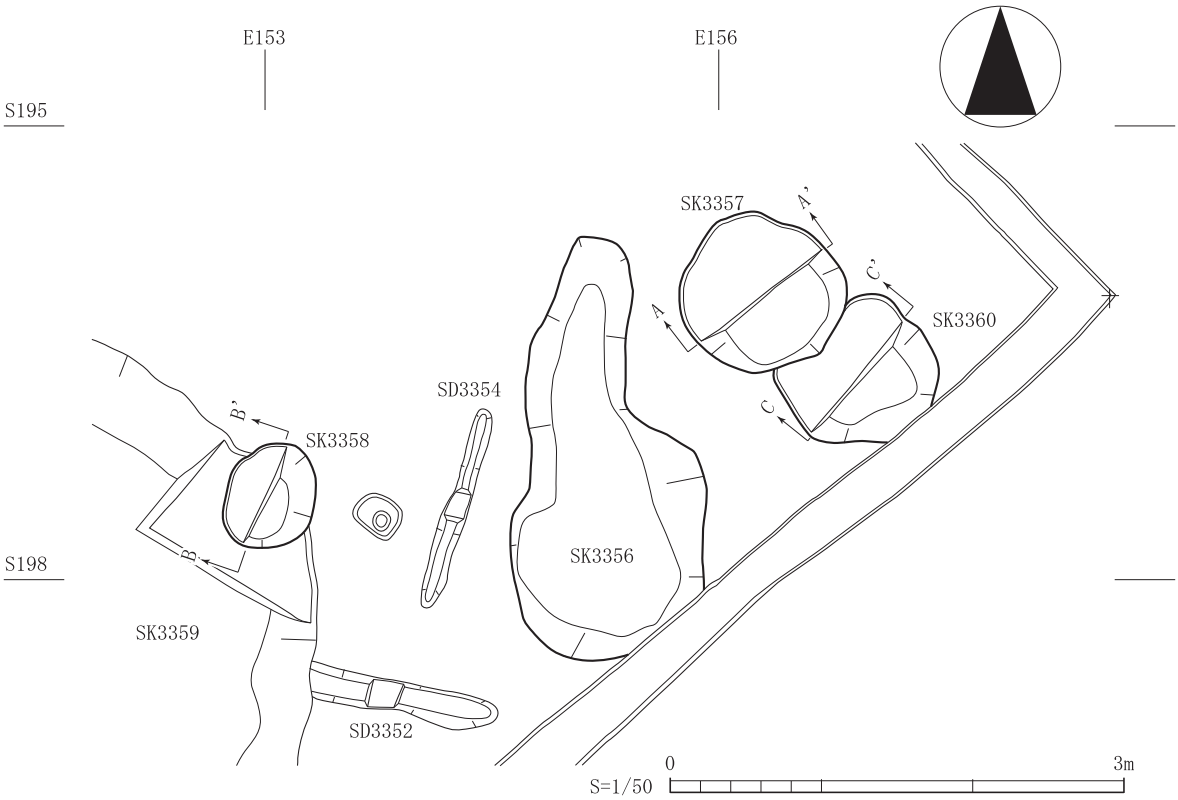


第23図　SK3358断面図

遺物は、土師器杯（B類）・甕（B類）・甑、須恵器杯（Ⅱc・Ⅲ類）・瓶・甕が出土している。

SK3360土壙（第24・25図）

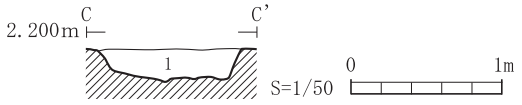
調査区東部で発見した不整形の土壙である。SK3357と重複し、それよりも古い。規模は長軸約１m、深さ約20㎝である。底面は概ね平坦であり、壁は垂直気味に立ち上がっている。埋土は、にぶい黄橙色砂



第24図　SK3356～3358・3360ほか平面図

質土が多量に混入する黒褐色粘土である。

遺物は、須恵器杯（Ⅱ類）が出土している。



第25図　SK3360断面図

Ⅲ層出土遺物（第26図）

土師器杯（A・BⅡ類）・甕（A・B類）、須恵器杯（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ類）・瓶・甕、製塩土器が出土している。このうち須恵器杯には墨書が施されたものや油煙が付着したものがある。

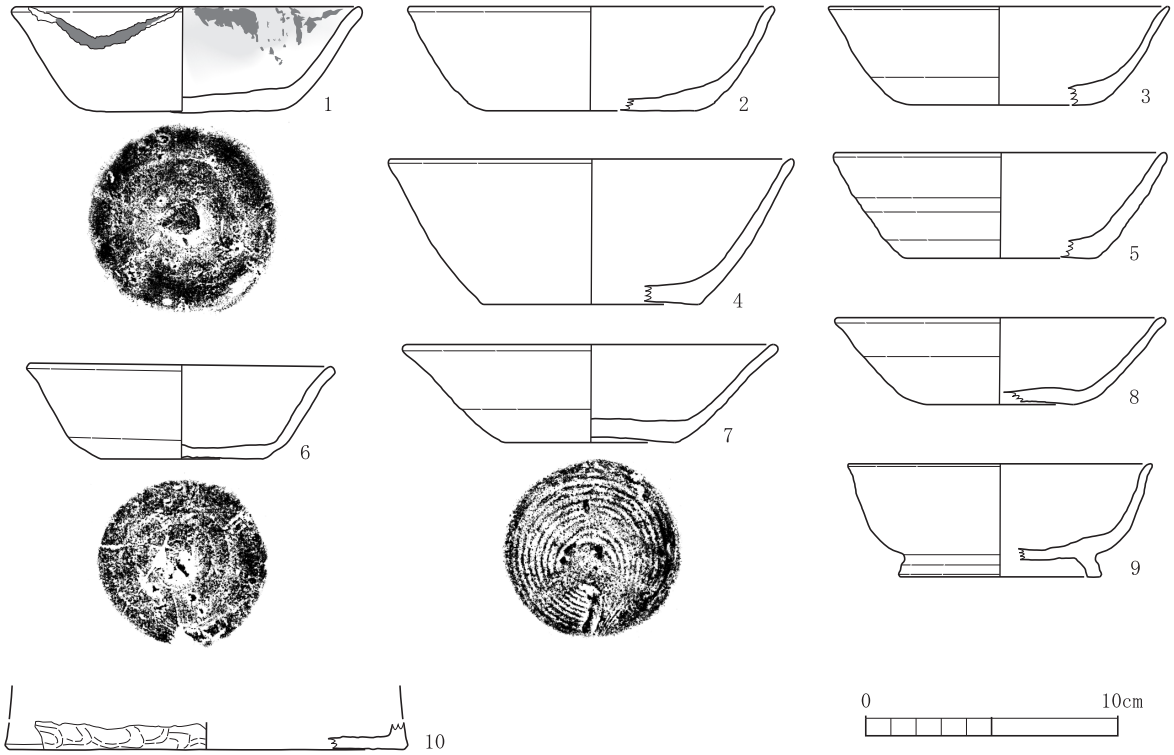
3　考察

本調査では、掘立柱建物跡３棟、井戸跡１基、溝跡９条、土壙11基を発見した。これらはⅢ層を挟んで下層の遺構群（A期）と上層の遺構群（B期）に大別することができる。このうち、SE3338井戸跡（A期）、SK3359土壙（B期）、Ⅲ層から比較的多くの土師器杯・甕、須恵器杯が出土していることから、以下これら出土遺物や各遺構の年代について若干検討してみたい。

（１）出土遺物の特徴

①SE3338井戸跡出土土器

掘り方から土師器杯A・B・BⅡ・BⅤ類、土師器甕A・B類、須恵器杯Ⅰ・Ⅱa・Ⅲ類が出土しており、a）土師器杯ではA類が全体の40％とやや多く出土している、b）土師器杯B類では90％がBⅡ類であり、再調整を施すものが圧倒的に多い、c）土師器甕ではA類が86％と多数を占める、d）須恵器杯では約88％がⅢ類であるといった特徴がある。杯類のうち図上で完形に復元できたものは須恵器１点のみであり、底



単位：cm

番号	種　類	特　徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備　考
		外　面	内　面						
1	須恵器　杯	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	13.75 20/24	8.3 24/24	4.2	－	R60	Ⅲ類
2	須恵器　杯	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(14.4) 2/24	(8.3) 5 /24	4.2	－	R58	Ⅲ類
3	須恵器　杯	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.4) 6/24	(7.2) 5 /24	3.9	－	R59	Ⅲ類
4	須恵器　杯	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(15.8) 4/24	(8.6) 6 /24	5.8	－	R57	Ⅲ類
5	須恵器　杯	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.0) 2/24	(7.5) 8 /24	4.2	－	R51	Ⅲ類
6	須恵器　杯	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	11.9 21/24	6.4 24/24	3.8	－	R56	Ⅲ類
7	須恵器　杯	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(14.6) 2/24	7.0 24/24	3.9	－	R61	Ⅴ類
8	須恵器　杯	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(12.9) 6/24	(5.8) 5 /24	3.45	－	R62	Ⅴ類
9	須恵器 高台付杯	ロクロナデ	ロクロナデ	(12.0) 9/24	(7.9) 8 /24	4.5	－	R63	
10	製塩土器	指によるオサエ痕跡		－	15.6 3 /24	－	－	R55	

第26図　Ⅲ層出土遺物

径／口径が0.46、器高／口径が0.28、外傾度が38である。

井戸側内または抜取り穴から出土した遺物には、土師器杯A・B・BⅠ・BⅡ・BⅤ類、土師器甕A・B類、須恵器杯Ⅲ類があり、a）土師器杯・甕ともにB類が主体であり、A類は掘り方出土のものに比べると極端に減少している、 b）土師器杯B類ではBⅠ・Ⅱ類が88％を占めており、底部切離し後再調整を施すものが主体である、 c）土師器甕B類には体部に叩きの痕跡を残すものがみられる、d）須恵器杯は全てⅢ類であるといった特徴がある。杯類のうち図上で完形に復元できたものをみると、土師器では底径／口径が0.46～0.52、器高／口径が0.32～0.34、外傾度が30～39、須恵器では底径／口径が0.60、器高／口径が0.33、外傾度が32である。

②SK3359土壙出土土器

埋土は３層に分けられ、このうち１・２層から多くの土器が出土している。

２層からは土師器杯A・B・BⅡ・BⅡc類、土師器甕A・B類、須恵器杯Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ類が出土しており、a）土師器杯・甕はB類が主体である、b）土師器杯B類の底部は、すべて切離し後再調整を施すものである、c）須恵器杯では90％がⅢ類であるといった特徴がある。杯類のうち図上で完形に復元できたものは須恵器のみであり、底径／口径が0.49～0.68、器高／口径が0.25～0.38、外傾度が30～35である。

１層からは土師器杯A・B・BⅠ・BⅡ・BⅡc・BⅤ、土師器甕A・B類、須恵器杯Ⅰ・Ⅱ・Ⅱc・Ⅲ・Ⅴ類が出土しており、a）土師器杯・甕はB類が主体である、b）土師器杯ではBⅠ・Ⅱ類が64％であり、切離し後再調整を施すものの割合がやや多い、c）須恵器杯は76％がⅢ類であるが、Ⅴ類もやや多く認められるといった特徴がある。杯類のうち図上で完形に復元できたものをみると、土師器では底径／口径が0.41～0.57、器高／口径が0.29～0.46、外傾度が25～34、須恵器では底径／口径が0.49、器高／口径が0.38、外傾度が30である。

③Ⅲ層出土土器

土師器杯A・B・BⅡ類、土師器甕A・B類、須恵器杯Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ類が出土しており、a）土師器杯・甕ともにB類が主体である、b）須恵器杯は77％がⅢ類であり、SK3359に比べるとⅤ類は少ないといった特徴がある。杯類のうち図上で完形に復元できたものは須恵器のみであり、底径／口径が54～60、器高／口径が27～37、外傾度が23～43である。

（２）出土遺物の年代

本地区周辺において、前述したSE3338井戸跡、SK3359土壙、Ⅲ層出土土器と類似するものには、市川橋遺跡SX1351出土土器（註１）や多賀城跡大畑SE2101BⅢ層出土土器（註２）・同SK2167出土土器（註３）などがある。

SX1351には４時期の変遷（A→D期）があり、A・B期が延暦９年（790）以前、C期が延暦９年～延暦24年（805）の間、D期が延暦24年～９世紀中葉頃の年代観がそれぞれ与えられている。土師器杯・甕ともA･B類が供伴しているのが特徴であるが、各時期でやや異なった出土状況が確認できる。杯A類をみるとA期で44％、B期で83％と多く出土しているものの、C期以降は極端に減少している。一方、杯B類に限ってみるとA・C期ではBⅠ・Ⅱ類の占める割合が80％以上と圧倒的に高いのに対してD期では６割以下に減少しており、C期では10％にも満たなかったBⅤ類がD期では28％に増加している（註４）。土師器甕A・B類については、杯同様C期以降にA類が減少し、ほとんどがB類で占められるようになる。このうちB類では、体部に叩きの痕跡を残すものも少量出土している。一方、須恵器杯ではいずれもⅢ類が主体である。Ⅴ類の割合はC期で４％、D期で13％であり、少ないながらも新しくなるに従って増加する傾向が指摘されている。杯類のうち図上で完形に復元できたものをみると、土師器では底径／口径が0.38～0.62、器高／口径が0.23～0.48、須恵器では底径／口径が0.39～0.73、器高／口径が0.22～0.45となっている。

註１：多賀城市教育委員会 『市川橋遺跡―城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ―』 多賀城市文化財調査報告書第70集 2003

註２：宮城県多賀城跡調査研究所 「第60次調査」 『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』 1992

註３：宮城県多賀城跡調査研究所 「第62・63次調査」『 宮城県多賀城跡調査研究所年報1992』 1993

註４：BⅡ類では器高が低く底径の大きいBⅡ1と器口が高く底径が大きいBⅡ2に細分している。報告書に記載されていないものの、底部切り離し後のヘラケズリについては体部中～上位まで及ぶものと体部下位で収まるものが認められる。

SE2101BⅢ層出土土器は、天長９年（832）を上限とする９世紀前葉頃の年代が示されている。土師器では無段丸底風の杯A類が1 点ある以外はすべてB類である。ＢⅠ・ＢⅡ類が圧倒的に多く、無調整のものは極めて少ない。再調整は体部中～下位で収まっており、上位まで及ぶものは認められない。土師器甕はすべてB類であり、体部に叩きの痕跡が認められるものはない。須恵器杯にはＢⅠ・ＢⅡ・Ⅲ・Ⅴ類があり、Ⅲ類80％、Ⅴ類13％、その他７％となっている。杯類の底径／口径をみると土師器では0.33～0.57、須恵器では0.44～0.64である。

SK2167出土土器は９世紀中葉頃の年代が示されている。土師器杯・甕は全てB類である。このうち杯ではＢⅠ・ＢⅡ類が主体となっているものの、ＢⅤ類も21％と全体の１／５を占めるようになる。甕では体部に叩きの痕跡が認められるものはない。須恵器杯ではⅤ類の占める割合が43％であり、前述したSX1351出土土器やSE2101BⅢ層出土土器に比べ増加している。杯類の底径／口径をみると土師器では0.26～0.40、須恵器では0.43～0.55である。

次に、上述した土器群とSE3338、SK3359、Ⅲ層出土土器を比較し、これらの年代についてまとめてみたい。

SE3338掘り方出土土器は、土師器杯・甕ともにA類が多く出土していることや、杯類では土師器杯BⅡ類、須恵器杯Ⅲ類が主体となる点で、SX1351A・B出土土器に近似していると考えられる。井戸側内及び抜取り穴埋土ではA類が極端に減少するものの、掘り方と同様に杯類では土師器杯ＢⅠ・Ⅱ類と須恵器杯Ⅲ類が主体的である。土師器甕にA類が少量含まれることやB類に叩きの痕跡が認められる点では、SE2101BⅢ層出土土器よりも古い要素ととらえることが可能である。したがって、SE3338については掘り方出土土器が８世紀後葉～９世紀初頭頃、井戸側内及び抜

表１　土師器杯・甕におけるA・B類の出土状況一覧

	土師器杯		土師器甕	
	A類	B類	A類	B類
SX1351 A	44.1% (15点)	55.9% (19点)	65.9% (27点)	34.1% (14点)
SX1351 B	83.3% (10点)	16.7% (2 点)	80.6% (25点)	19.4% (6 点)
SX1351 C1 ・2 層	4.5% (2 点)	95.5% (42点)	34.4% (44点)	65.6% (84点)
SX1351D・3 層	15.3% (13点)	84.7% (72点)	10.7% (19点)	89.3% (159点)
多賀城跡 SE 2101B Ⅲ層	2%	98%		100%
多賀城跡 SK 2167 土壙		100% (98点)		100% (71点)
SE3338 掘り方	40% (10点)	60% (15点)	86% (37点)	14% (6 点)
SE3338 側内・抜取り	6.9% (2 点)	93.1% (27点)	13.6% (11点)	86.4% (70点)
Ⅲ層	6.7% (2 点)	93.3% (28点)	15.7% (8 点)	84.3% (43点)
SK3359・1-2	2 % (1 点)	98% (49点)	11.8% (6 点)	88.2% (45点)
SK3359・1-1	0.5% (1 点)	99.5% (204点)	4.1% (17点)	95.9% (396点)

（口縁部及び体部の破片資料も含む）

表2　杯類の底部調整及び底径／口径、器高／口径比較一覧

	土師器B類							須恵器						
	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	Ⅴ類	底径／口径	器高／口径	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	Ⅴ類	底径／口径	器高／口径
SX1351A	10.5% (2 点)	73.7% (14点)	15.8% (3 点)			0.47～0.60	0.23～0.48	2.8% (1 点)	5.6% (2 点)	91.6% (33点)			0.48～0.68	0.22～0.33
SX1351B		50% (1 点)			50% (1 点)	0.57	0.36	7.4% (2 点)	7.4% (2 点)	85.2% (23点)			0.51～0.73	0.25～0.31
SX1351C１・２層	31.0% (13点)	57.1% (24点)	2.4% (1 点)		9.5% (4 点)	0.38～0.62	0.25～0.41	1.5% (3 点)	3.1% (6 点)	91.3% (179点)		4.1% (8 点)	0.39～0.73	0.23～0.45
SX1351D・3 層	16.6% (12点)	40.3% (29点)	13.9% (10点)	1.4% (1 点)	27.8% (20点)	0.44～0.57	0.27～0.46	0.7% (1 点)	8.6% (13点)	77.5% (117点)		13.2% (20点)	0.44～0.60	0.25～0.34
多賀城跡SE2101BⅢ層	38%	56%			4 %	0.33～0.57		5%	2%	80%		13%	0.44～0.64	
多賀城跡SK2167土壙	39.5% (49点)	39.5% (49点)			21% (26点)	0.37～0.58	0.26～0.40	1.1% (1 点)	10.4% (10点)	45.8% (44点)		42.7% (41点)	0.43～0.55	
SE3338掘り方		90.0% (9 点)			10.0% (1 点)			3.8% (1 点)	7.7% (2 点)	88.5% (23点)			0.46	0.28
SE3338側内・抜取り	50.0% (4 点)	37.5% (3 点)			12.5% (1 点)	0.46～0.52	0.32～0.34			100% (30点)			0.6	0.33
Ⅲ層		100% (4 点)						4.5% (1 点)	4.5% (1 点)	77.3% (17点)		13.7% (3 点)	0.45～0.60	0.27～0.36
SK3359・1-2		100% (12点)						2.4% (1 点)		90.2% (37点)		7.4% (3 点)	0.49～0.68	0.25～0.38
SK3359・1-1	8.3% (3 点)	55.6% (20点)			36.1% (13点)	0.41～0.57	0.29～0.46	2.4% (2 点)	3.6% (3 点)	75.9% (63点)		18.1% (15点)	0.62	0.25

（底部の切離しや再調整による分類が可能なものを対象）

取り穴出土土器が天長９年（832）以前の９世紀前葉頃のものと考えられる。

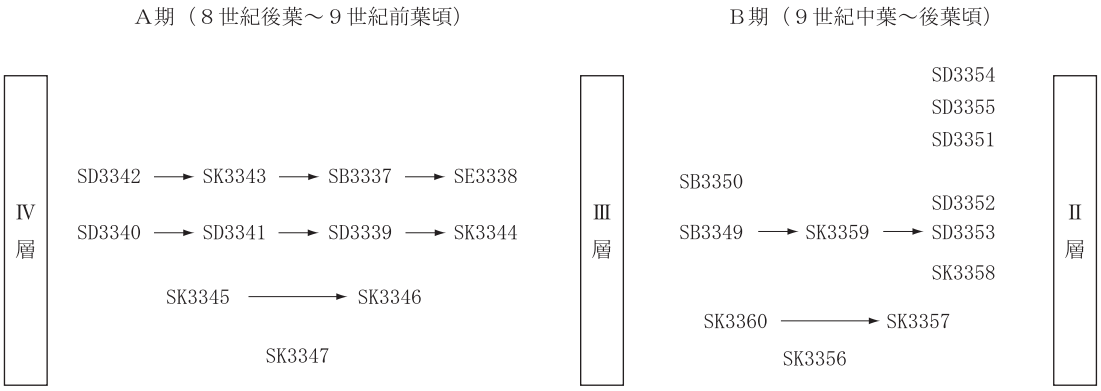
SK3359出土土器は、土師器杯・甕ともにA類が極めて少なくB類が主体であること、土師器杯ではＢⅠ・Ⅱ類の割合が高いもののＢⅤ類もやや多く認められること、須恵器杯ではⅢ類が主体であることなどから、SX1351D出土土器に近似している。一方、ＢⅡ類では切り離し後のヘラケズリが体部中～下位に収まるものがほとんどであることからSE2101BⅢ層やSK2167出土土器と類似しており、さらにＢⅤ類が全体の１／３を占めるなどそれらよりやや新しい要素も確認できる。しかし、９世紀後半頃とされている多賀城跡第61次調査第10層出土土器（註）と比べると、土師器杯では底径／口径が大きいことや、須恵器杯Ⅲ類が多数を占めるなど、９世紀前葉～中葉頃の土器と共通する点が多く認められる。したがって、SK3359出土土器については概ね９世紀中葉頃の範疇で捉えておきたい。

Ⅲ層出土土器は、土師器杯・甕にA類が少量含まれていることや、須恵器杯ではⅢ類が主体であるがⅤ類も１割ほど認められる点で、SX1351D出土土器と類似している。須恵器杯の底径／口径及び器高／口径が近似していることからも、概ね近い年代が推測される。

（３）各遺構の年代

（２）で検討した土器の年代観から、SE3338が８世紀後葉～天長９年（832）以前の９世紀前葉頃、Ⅲ層が９世紀初頭～中葉の間、SK3395が９世紀中葉頃であると考えられる。このうちⅢ層については、SE3338より新しくSK3359よりも古いことから、９世紀前葉～中葉の中に収まるものと考えられる。これらを踏まえ、ここでは時期ごとに遺構の年代について簡単に触れてみたい。

A期はⅢ層下層の遺構群であり、SB3337、SE3338、SD3339～3342、SK3343～3348がある。各遺構から出土した遺物に土師器甕B類が含まれていることから、概ね８世紀後葉～９世紀前葉の範疇で捉えられる。このうち、SK3344からは土師器杯BⅡ類が２点出土している。それぞれ器形的にSX1351にみられるBⅡ１・BⅡ２類と類似しており、底部切り離し後のヘラケズリは前者が体部上位、後者が体部中位まで施されている。BⅡ１・BⅡ２類については前段階の国分寺下層式との類似性が指摘されており、ロクロ調整の杯の中でもより古い要素を残すものと考えられる。また、SE3338よりも古いSB3337も８世紀後葉頃に遡る可能性がある。



第27図　遺構変遷図

註：宮城県多賀城跡調査研究所 「第61次調査」 『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』 1992

B期はⅢ層上面の遺構群であり、SB3349・3350、SD3351～3355、SK3356～3360がある。10世紀前葉頃に出現すると考えられる須恵系土器が全く出土していないことから、９世紀中葉～後葉の範疇に収まるものと考えられる。このうち遺構の重複関係からSK3359よりも古いSB3349は９世紀中葉でも古い段階、新しいSD3352・3353、SK3358は９世紀後葉頃の年代を与えておきたい。ＳD3351・3354・3355はＳD3352・3353と規模や埋土が近似していることから、これらと近い年代が想定されよう。

ところで、本地区は多賀城南面に施工された方格地割りのなかに位置している。この地割りは段階的に整備されていたことが明らかとなっており、大きく４時期の変遷（Ⅰ→Ⅳ期）で捉えられている

第28図　第65次調査区と周辺の調査区

これにあてはめると、A期については城外の方格地割りの変遷のうちⅠ・Ⅱ期（８世紀後葉～９世紀前葉頃）に相当する。このうち、SB3337やSE3338などはⅠ期に収まるものと考えられ、都市空間が成立するⅡ期以前から居住域として利用されていた地区と理解することができよう。B期については城外の都市空間が最も整備されるⅢ期（９世紀中葉～後葉頃）に相当する。

なお、本地区及び西側に近接する第28次D106区及び107区においては10世紀以降の土器が全く出土しておらず（註）、東側で実施した第26・27次C区においても現時点でⅣ期（10世紀前葉以降）に相当する遺構はSX1610東西大路東道路（F期）とこれに接続するSD1510が確認されるのみである。東１南北道路を含めその西側ではⅣ期段階に再整備されているのとは対照的に、東１道路以東の地区については10世紀以降は地割りの範囲外となっていた可能性がある。

４　まとめ

（１）今回の調査では８世紀後葉から９世紀の遺構を発見した。これらはⅢ層を挟んでA期（８世紀後葉～９世紀前葉頃）とB期（９世紀中葉～後葉頃）に分けられる。

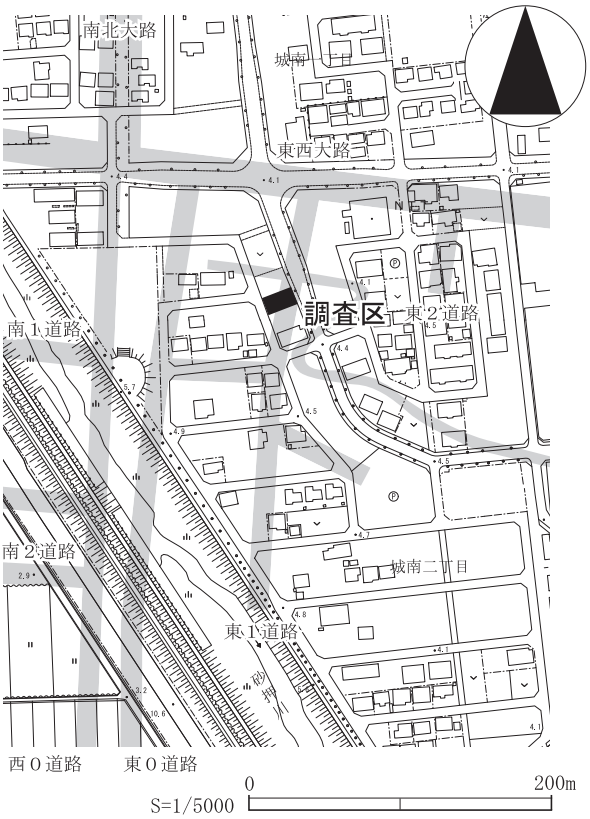
（２）城外の方格地割りの変遷に当てはめると、A期がⅠ・Ⅱ期、B期がⅢ期にそれぞれ相当する。

註：第28次 D106区については破片資料の観察は行っていないが、残存状況が良好な土器には全く含まれていない。

Ⅶ　市川橋遺跡第66次調査

1　調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成19年８月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財の係わりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に直径約14㎝、長さ10ｍの鋼管杭を打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。さらに、計画地が多賀城南面に施工された方格地割りのうち東１南北道路の推定線上に位置しており、この年代や変遷等を明らかにする上で貴重な場所であったため、工法変更等による遺構の保存が計れないか協議を行った。しかし、杭基礎以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないとのことから、記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、９月11日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、９月25日より現地調査を開始した。



第１図　調査区位置図

調査は、住宅建築部分の表土除去から取りかかった。調査面積と作業時の安全確保のため表土を場外搬出したものの、盛土の締まりが弱く調査区の傾斜を極端に緩やかにしたことから、対象面積の約４割の調査区を設定するにとどまった。26日、作業員を導入して排水用の側溝を設けるとともに、東１南北道路の残存状況を確認するために南壁断面の精査を行った。その結果、表土除去の際に推定線上で確認した窪み（SX3361河川跡）には砂が厚く堆積するのみであり、路面や道路側溝を確認することができなかった。一方、西側のにぶい黄橙色砂質土（Ⅶ層）上面では小柱穴を１基確認したものの、これ以外に遺構は認められなかった。10月５日よりSX3361の埋土掘り下げを開始する。湧水の量が著しく多かったことや、埋土中に土器片が多量に混入していたことからこの作業に苦慮したものの、南半部の埋土掘り下げが終了した10日に全景写真を撮影した。その後、平面・断面図を作成し、15日にSX3361の北半部の埋土を掘り下げた。16日、調査器材の撤収と調査区の埋め戻しを行い、本調査の一切を終了した。

2　調査成果

（1）層序（第３図）

今回の調査では、現代の盛土や旧水田耕作土の下で６層の堆積を確認した。

Ⅰ　1　層：区画整理に伴う盛土であり、厚さは1.4～1.3ｍである。

Ⅰ　2　層：区画整理前の水田耕作土であり、厚さは30～40㎝である。

Ⅱ　　層：調査区中央以西に認められる黒褐色粘質土であり、厚さは５～20㎝である。古代の土器片が多く混入している。

Ⅲ　層：調査区全域に認められる黒色粘土であり、厚さは４～14cmである。本調査区ではほぼ水平に認められるが、周辺の調査成果では古代でも比較的新しい遺構の埋土上面に堆積している状況を確認している。

Ⅳ　層：調査区東端部に認められる褐灰色砂質土であり、厚さは２～８cmである。

Ⅴ　層：調査区全域に認められるにぶい黄褐色砂層であり、厚さは４～15cmである。

Ⅵ　層：SX3361・3362上面にのみ確認できる褐灰色砂であり、厚さは約20cmである。

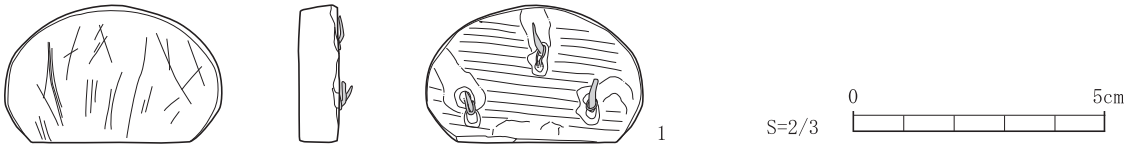
Ⅶ　層：調査区全域に認められるにぶい黄橙色砂質土であり、厚さは70cm以上である。今回発見した遺構の検出面である。

（２）発見遺構と遺物

SX3361河川跡（第２・３図）

調査区東部で発見した河川跡である。多賀城南面に施工された方格地割りのうち東１南北道路の推定線上にあたり、それを全て破壊している。SD3362と重複し、それよりも古い。底面には流水作用によって生じたと思われる溝状の窪みが認められ、南から北側に向かって緩やかに下っている。壁は南壁付近が緩やかであるが、それ以外は垂直気味に立ち上がっている。埋土は２層に分けることができる。１層はにぶい黄褐色粗砂が混入する黒色砂、２層は暗オリーブ灰色粗砂が混入する黒褐色砂であり、２層の壁際には灰白色火山灰がブロック状に混入している。

遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯、甕、瓦、石帯（丸鞆）、不明鉄製品がある。土器類は多量に出土しているものの、いずれも接合が困難なほどの小片である。



単位：cm

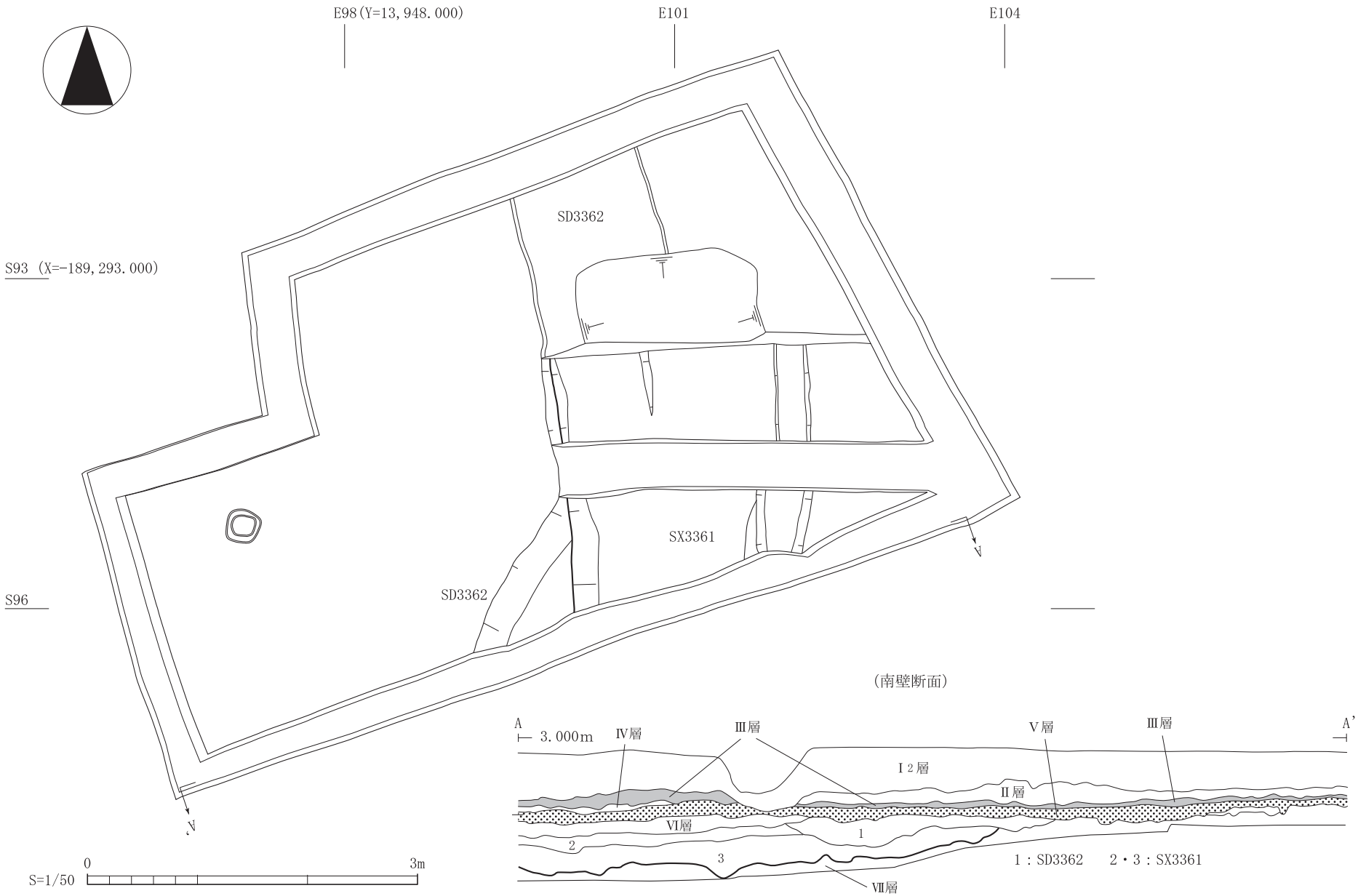
番号	種　類	層　位	特　徴	写真図版	登録番号	備　考
1	石帯(丸鞆)	ℓ-1	幅：4.3、高さ：2.7、厚さ：0.8、色調：青黒色	P73	R1	銅製留具残存

第２図　SX3361出土物

３　まとめ

今回の調査区では、東１南北道路の推定線上でSX3361河川跡を発見した。有機質をほとんど含まない粗砂で埋まっていることから、比較的短い期間で埋没したものと推測される。古代の道路跡では、第27・60次調査で確認した東西大路でも上層に粗砂の堆積が認められることから、廃絶後の路面の窪みがある時期河川の流路となっていたものと考えられる（註）。年代については、中世以降の遺物が全く確認されないことから、概ね古代の範疇で捉えることができよう。

註：城外で発見される道路跡については、南北大路を除きいずれも深く掘り下げて路面が構築される状況を確認している。

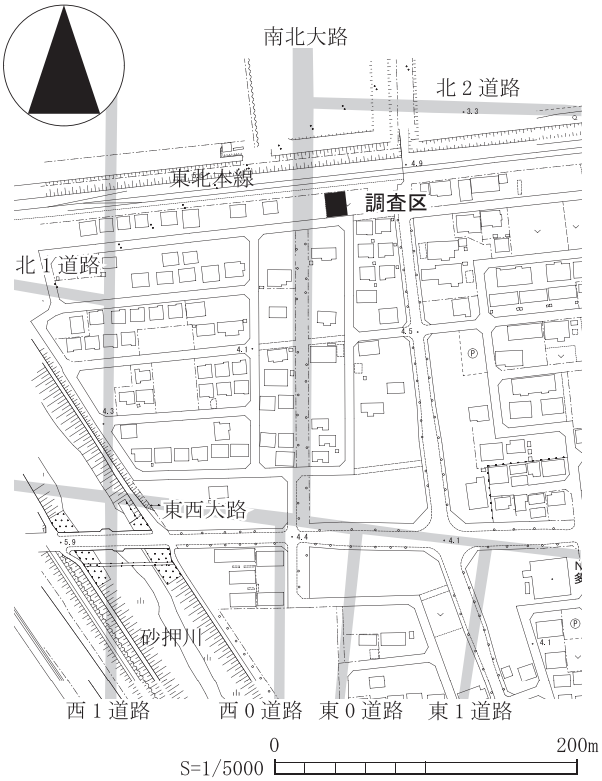

E98(Y=13,948.000)
E101
E104
S93 (X=-189,293.000)
S96
SD3362
SD3362
SX3361
A
A'
S=1/50
0
3m
(南壁断面)
A
3.000m
Ⅳ層
Ⅲ層
Ⅴ層
Ⅲ層
A'
Ⅰ2層
Ⅱ層
Ⅵ層
1
2
3
Ⅶ層
1：SD3362　2・3：SX3361

第３図　調査区全体図

Ⅷ　市川橋遺跡第67次調査

1　調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成19年９月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財の係わりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に直径約60㎝、長さ4.75ｍの湿式柱状改良杭を打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等による遺構の保存が計れないか協議を行ったが、杭基礎以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないとのことから、記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、11月22日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、11月27日より現地調査を開始した。



第１図　調査区位置図

調査は、住宅建築部分の表土除去から取りかかった。当初想定していたよりも盛土の締まりが弱く表土除去に時間を要したものの、発生した排土すべてを場外搬出したため、対象面積の約８割の調査区を設定することができた。12月４日より作業員を導入してⅢ層上面での遺構検出作業を行うものの、これを掘り込む遺構が発見されなかったことから、Ⅲ層上面の写真撮影後直ちにこの除去を開始した。その結果Ⅳ層上面でSB3363掘立柱建物跡、SD3364～3366溝跡を検出した。このうち、溝跡については南壁・北壁及び北側に設けた土層観察用のベルトで観察したところ、Ⅲ層が直接これらの埋土となっていることが明らかとなった。12月11日、実測図作成用の基準点を設置し平面・断面図を作成し、14日にⅣ層上面検出遺構の全景写真を撮影する。15日からⅣ・Ⅴ層の掘り下げを開始し、18日に最終遺構検出面であるⅥ層上面でSK3367・3368土壙を発見した。Ⅵ層上面での全景写真撮影後、調査区南・東壁の断面図を作成する。19日に平面図の作成を行うと同時に、器材撤収の準備を開始する。26日、重機による調査区内の埋め戻しを行い、本調査の一切を終了した。

2　調査成果

（1）層序（第３図）

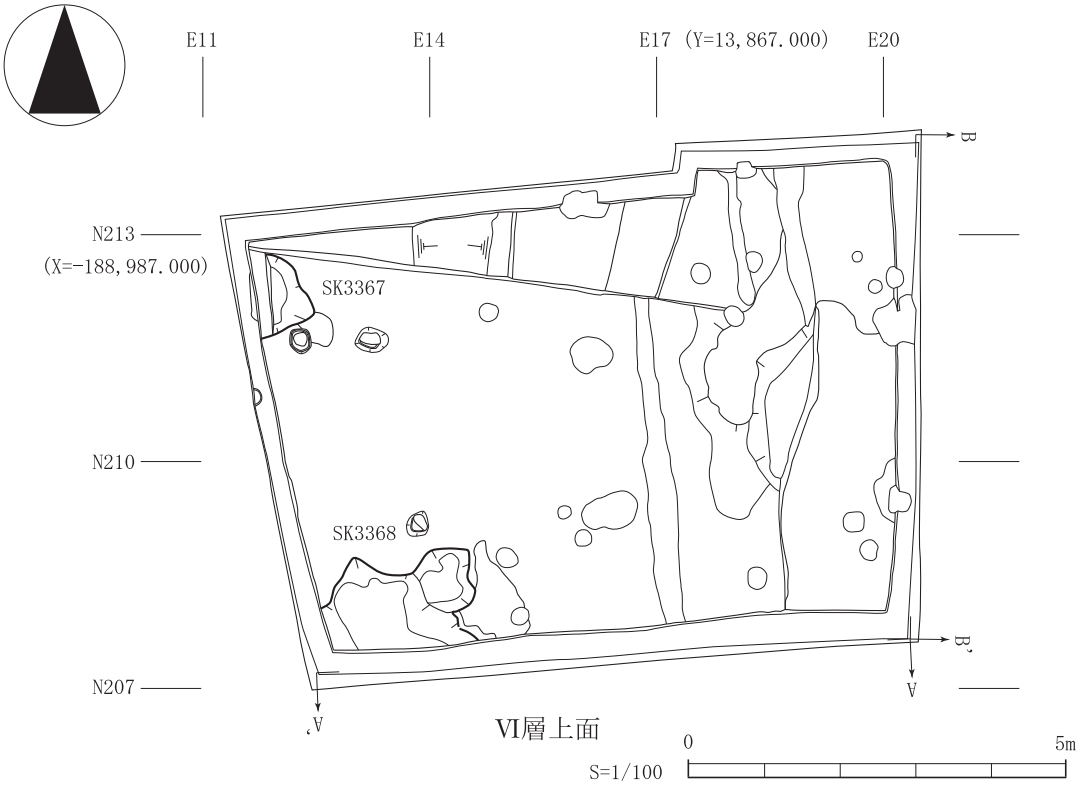
今回の調査では、現代の盛土や旧水田耕作土の下で５層の堆積を確認した。このうち遺構検出面となるのはⅣ・Ⅵ層上面であり、いずれも南西側に向かって緩やかに下っている。

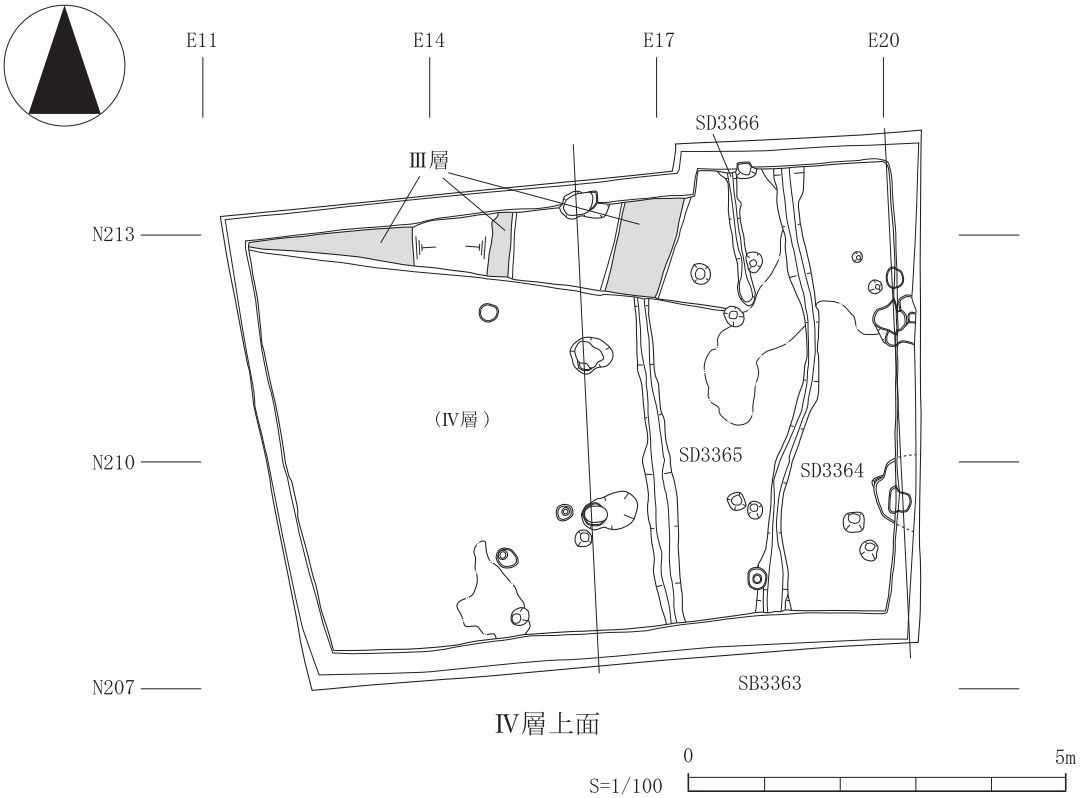
Ⅰ１層：区画整理に伴う盛土であり、厚さは1.５～1.７ｍである。

Ⅰ２層：区画整理前の水田耕作土であり、厚さは30～40㎝である。

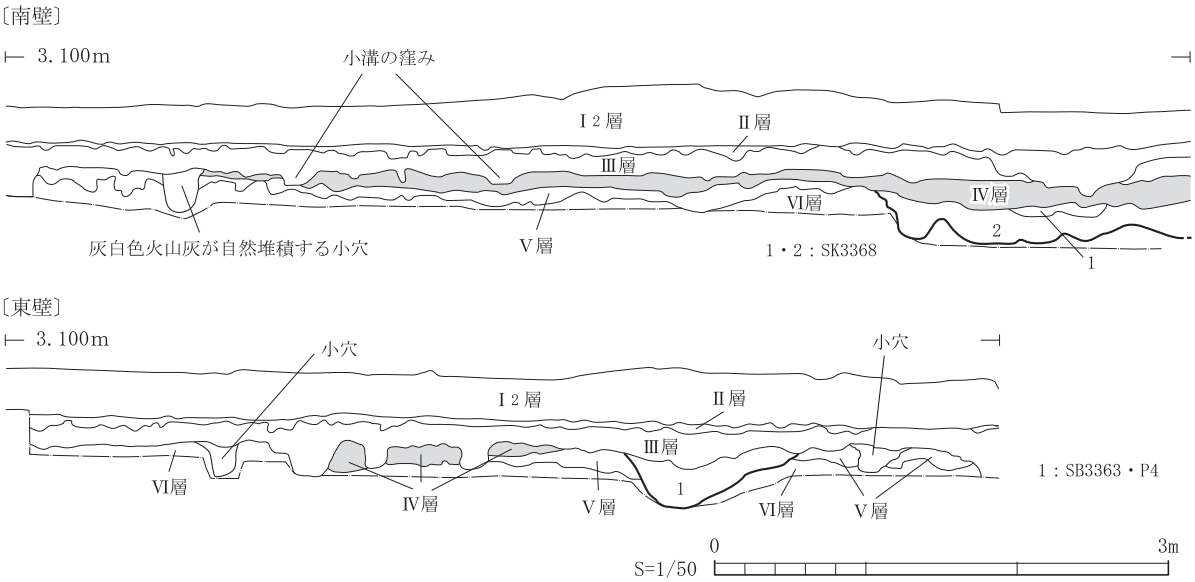
Ⅱ　層：調査区全域に認められる黒褐色粘土であり、厚さは３～10㎝である。

Ⅲ　層：調査区全域に認められる褐灰色粘質土であり、厚さは10～20㎝である。灰白色火山灰がブ


E11
E14
E17 (Y=13,867.000)
E20
B
N213
(X=-188,987.000)
SK3367
N210
SK3368
B'
N207
A
A'
VI層上面
0
5m
S=1/100


E11
E14
E17
E20
SD3366
Ⅲ層
N213
(Ⅳ層)
N210
SD3365
SD3364
N207
SB3363
Ⅳ層上面
0
5m
S=1/100

第２図　調査区全体図



第３図　南壁・東壁断面図

ロック状に多く混入しており、周辺の成果と比較すると10世紀前葉以降の古代の堆積層と考えられる。須恵系土器でも小型の杯・高台付杯が多く出土している。

Ⅳ　層：調査区の北東隅を除くほぼ全域に認められる黒褐色粘質土であり、厚さは５～10㎝である。周辺の成果と比較すると10世紀前葉以前の古代の堆積層と考えられるが、北東部で明確な立ち上がりがあることから何らかの窪みを反映している可能性も考えられる。古代の遺構検出面である。

Ⅴ　層：調査区の北東部を除くほぼ全域に認められる褐灰色粘質土であり、にぶい黄色砂質土や黒褐色粘土が多量に混入している。厚さは２～20㎝であり、底面は起伏が著しい。

Ⅵ　層：調査区全域に認められるにぶい黄色またはにぶい黄橙色砂質土である。今回の調査の最終遺構検出面である。

（２）発見遺構と遺物

今回の調査では、Ⅵ層上面で土壙、Ⅳ層上面で掘立柱建物跡、溝跡を発見した。以下、層毎に遺構の概要について記載する。

〔Ⅵ層上面〕

SK3367土壙（第４図）

調査区北西部で発見した土壙である。規模は、東西約1.１m、南北１m以上、深さ約20㎝である。壁はやや凹凸があるものの、垂直気味に立ち上がっている。底面は起伏が著しく、平坦でない。埋土は４層に分けることができる。１・２層は灰黄褐色粘質土であり、２層には明るめの灰黄褐色粘質土が多く混入している。３層は黒褐色粘土、４層は黒褐色粘質土が多量に混入するにぶい黄褐色粘質土である。遺物は出土していない。

SK3368土壙（第５図）

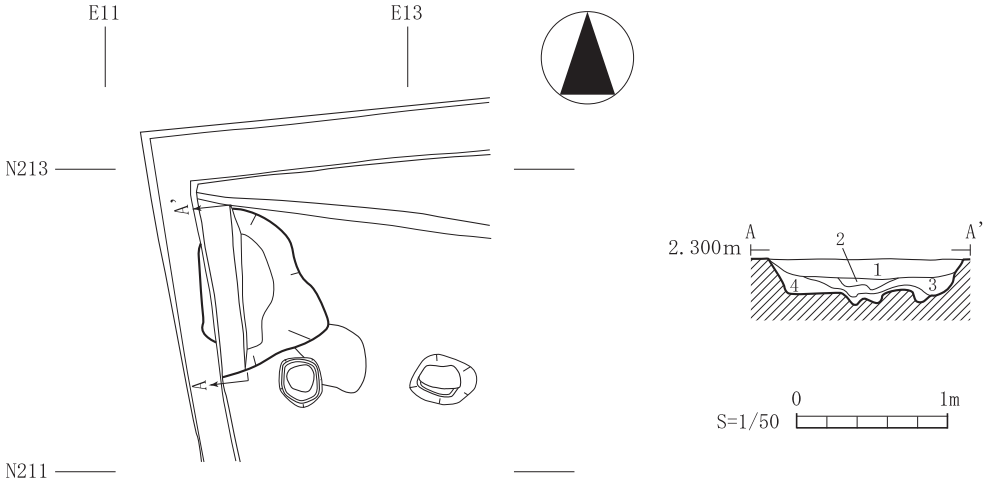
調査区南西部で発見した不整形の土壙である。規模は、東西2.３m以上、南北1.７m以上、深さ約20～

30cmである。壁には凹凸があり、立ち上がりは一様ではない。底面も凹凸が著しく、北側から南側に向かって下っている。埋土は２層に分けることができる。１層は黒褐色粘土が若干混入するにぶい黄色砂質土、２層はにぶい黄色砂質土が多量に混入する黒褐色粘土である。遺物は出土していない。

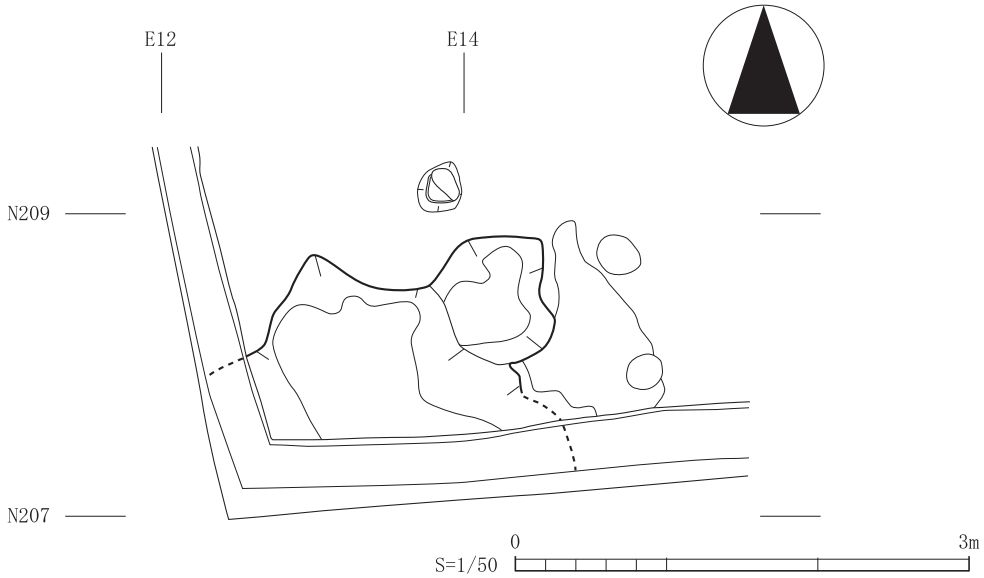
〔Ⅳ層上面〕

SB3363掘立柱建物跡（第６図）

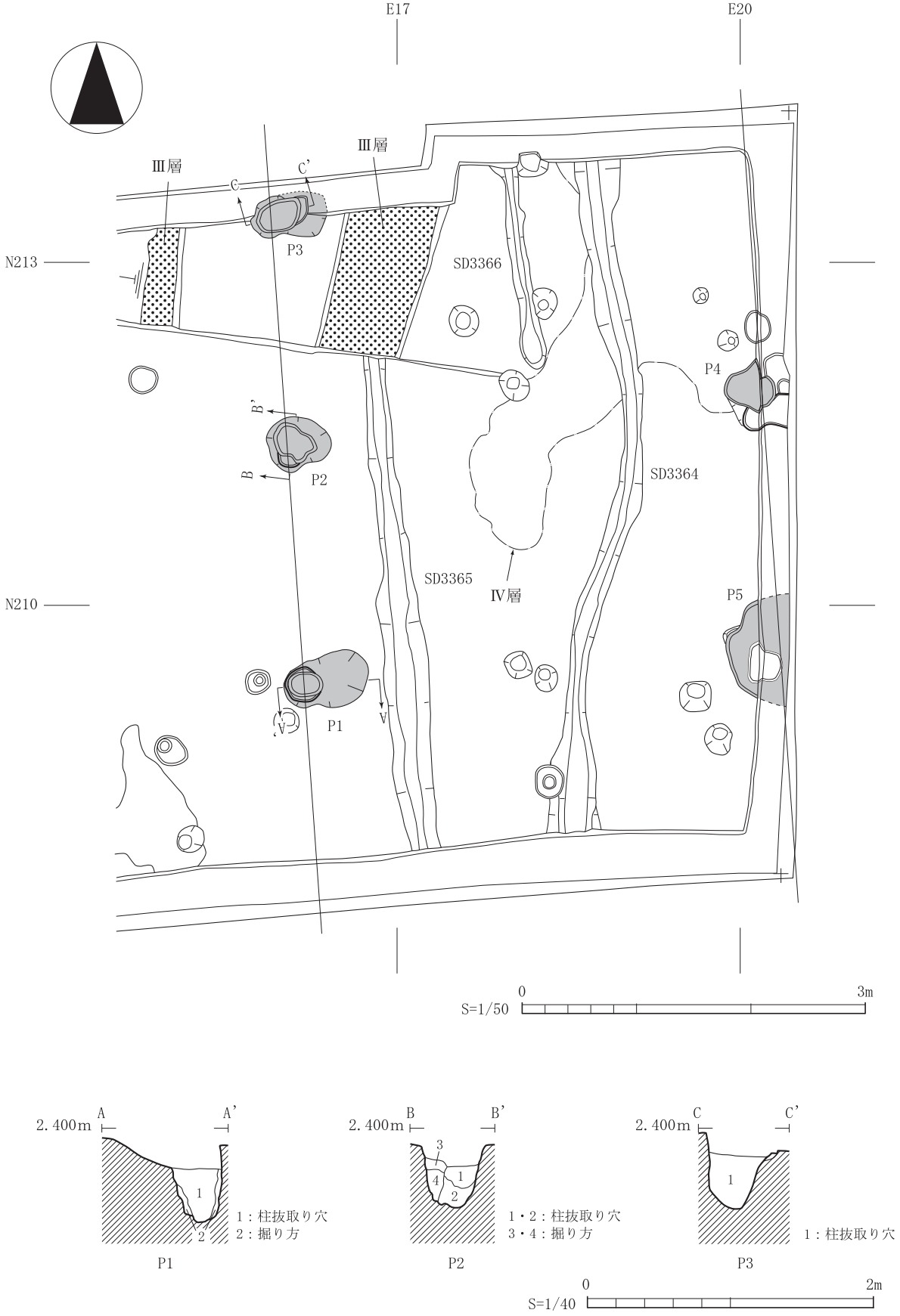
調査区東部で発見した掘立柱建物跡である。５基の柱穴より推測したものであり、桁行４間以上、梁行２間の南北棟と想定される。全ての柱穴で、掘り方を大きく破壊する柱抜取り穴を確認している。方向は、北で約４度西に偏している。建物の規模は桁行が西側柱列で4.１m以上、柱間は南より約2.１m、約2.０mである。柱穴は西側柱列南端の柱穴で長辺50cm、深さ50cmの方形を基調とするものの、それ以外は抜取り穴に破壊されており平面形や規模が明らかなものはない。埋土はにぶい黄褐色粘質土であり、黒褐色粘土や褐灰色粘質土が多く混入している。また、西側柱列南より２間目柱穴では灰白色火山灰が斑状に混入しているのを確認している。柱抜取り穴は柱穴に比べ非常に大きなものである。埋土は褐灰色粘質土であり、



第４図　SK3367平面図・断面図



第５図　SK3368平面図



第６図　SB3363平面図・断面図

火山灰粒が多く混入している。

遺物は、掘り方から須恵器甕の小片、柱抜取り穴から須恵系土器が出土している。

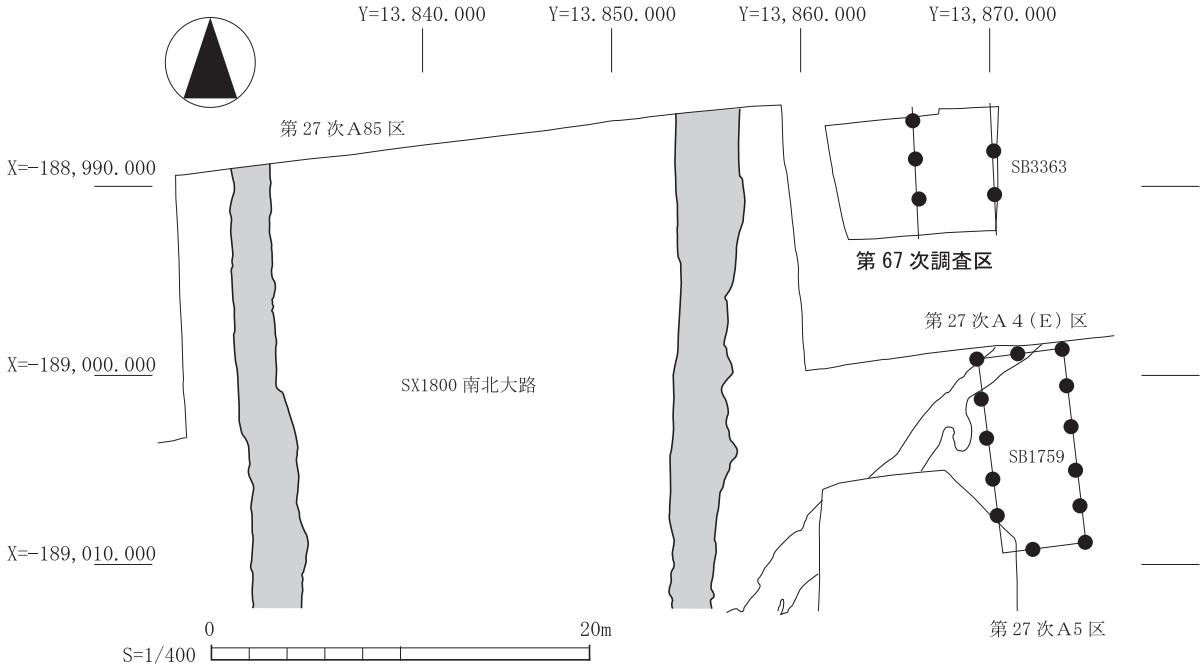
SD3364～3366溝跡（第２図）

調査区東部で発見した南北方向の小溝跡である。規模は幅15～40㎝、深さ７～13㎝であり、底面はいずれも南側に向かって緩やかに下っている。埋土はⅢ層が直接堆積している。

３　まとめ

今回の調査では、掘立柱建物跡１棟、溝跡３条、土壙３基を発見した。Ⅳ層上面で発見したSB3363建物跡は、掘り方埋土に10世紀前葉頃に降下した灰白色火山灰が混入していることから、それ以降の年代が与えられる。一方、Ⅴ層上面で発見した遺構については、灰白色火山灰が全く認められないことから概ね10世紀前葉頃には埋没していたものと考えられる。

なお、SB3363については、城外の方格地割りの変遷でみるとⅣ期（10世紀前葉以降）に相当する。本地区周辺では、南東側50～100ｍに位置する第14次調査区や南側に近接する第27次Ａ２（Ｅ）区・５区でこの時期の掘立柱建物跡や溝跡、土壙が発見されており、須恵系土器でも小型の杯・高台付杯が多く出土している。Ⅳ期でも新しい段階のものと推測されることから（註）、地割りの存続期間を考える上で重要な地区であると考えられよう。



第７図　第67次調査区と周辺の調査成果（10世紀前葉以降）

註：10世紀中葉頃とされる多賀城政庁跡ＳＫ078土壙（宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡―政庁本文編―』1982）や多賀城跡ＳＸ2313土器廃棄遺構（多賀城跡調査研究所「第66次発掘調査」『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報1995 1996）では出土遺物のほとんどが須恵系土器であり、特に小型の杯が多く認められる

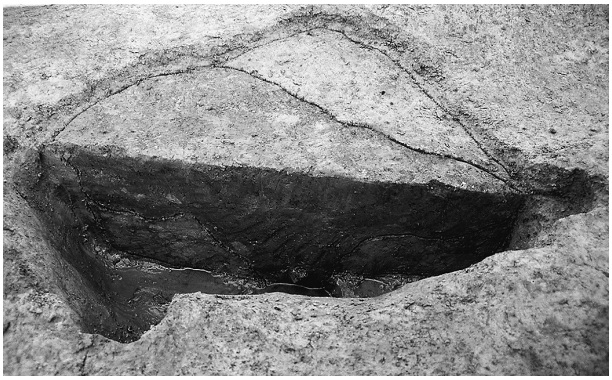
市川橋遺跡写真図版

調査区全景（南より）

SB3303掘立柱建物跡（東より）

調査区全景（南東より）

SB3323南東隅柱穴断面

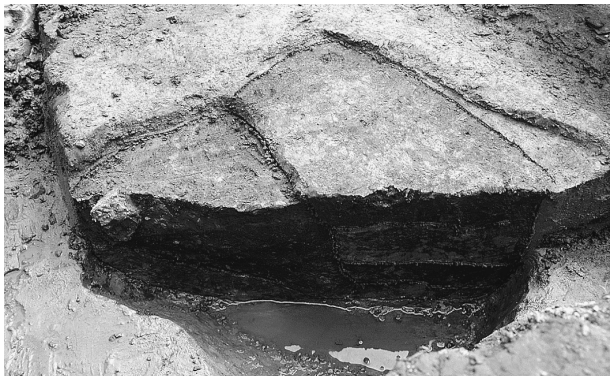


SB3321北東隅柱穴断面

SK3333断面

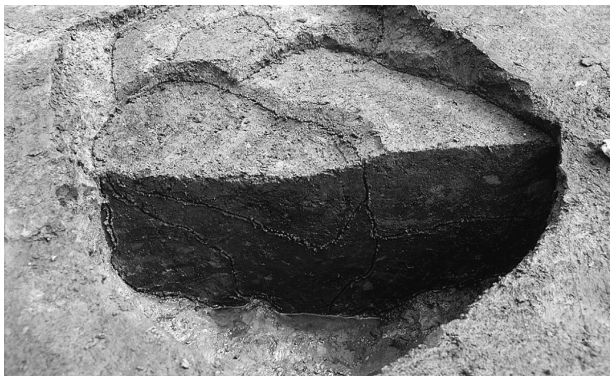
SK3334断面

調査区全景（南西より）



SB3349・Ｐ１断面

SB3349・Ｐ２断面



SB3349・Ｐ４断面

SB3337・Ｐ２断面

SE3338全景（南西より）

SE3338井戸側検出状況

SE3338断面

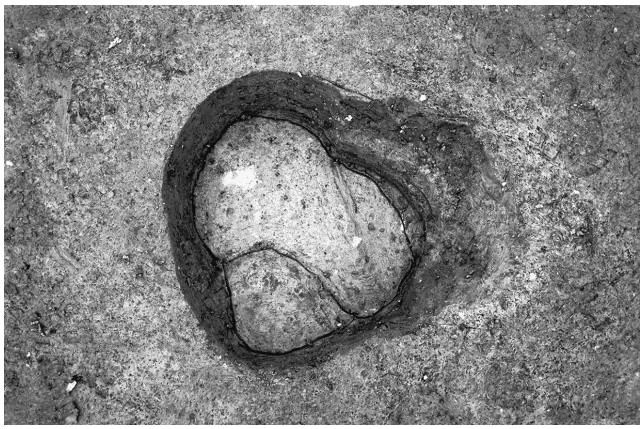
調査区全景（東より）

SX3361河川跡（南より）

調査区全景（Ⅳ層上面・南東より）

SB3365・Ｐ１

柱穴に比べ極端に大きな抜取り穴が確認できる



SB3365・P2

R１：市川橋遺跡第65次調査第８図２
R23：　〃　第８図１
R26：　〃　第21図１
R48：　〃　第21図４
R33：市川橋遺跡第65次調査第22図１
R37：　〃　第22図５
R16：市川橋遺跡第64次調査第16図５

市川橋遺跡第65次調査出土の墨書土器

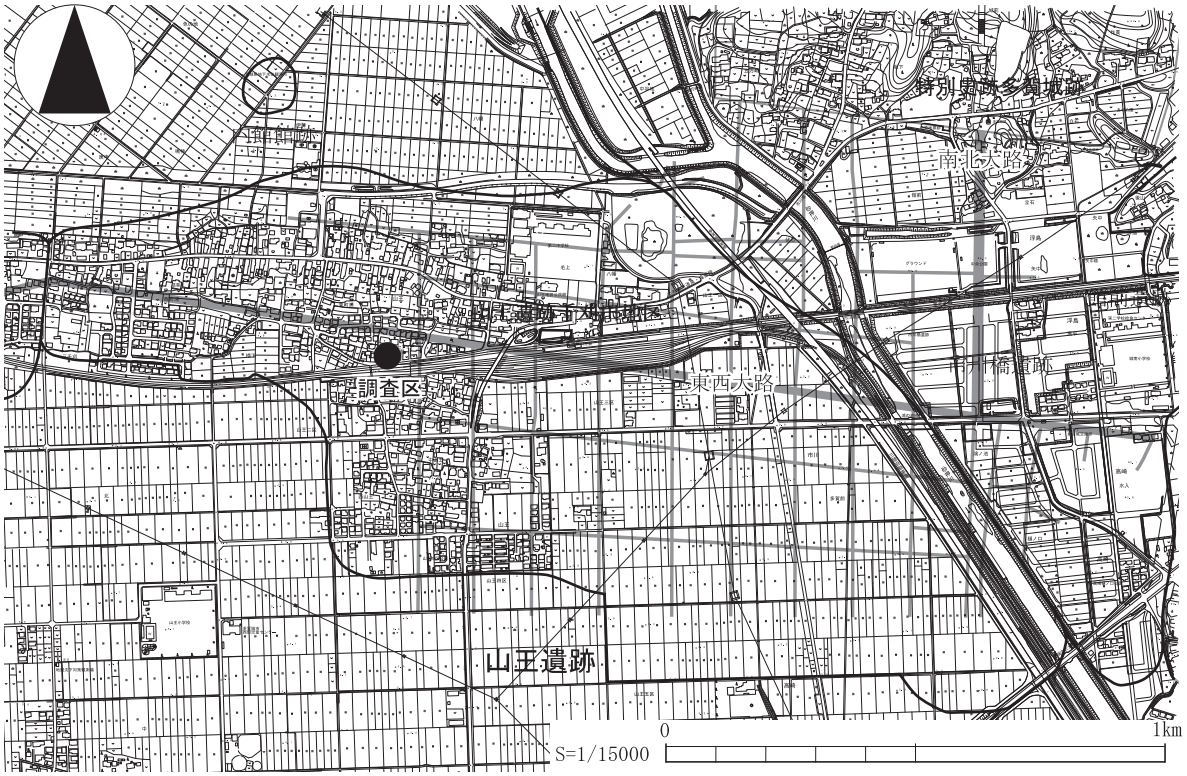
市川橋遺跡第66次調査出土の石帯（丸鞆）

Ⅸ　山王遺跡第62次調査

１　遺跡の環境と周辺の調査成果

本遺跡は、七北田川の東岸から砂押川西岸にかけての自然堤防上に立地している。東西約２㎞、南北約１㎞の範囲に広がっており、市内でも最大規模の面積を有している。遺跡内の地形を詳細にみると、中央付近を東西に延びる県道泉塩釜線沿いが標高4.５～6.５ｍの微高地となっている。西端付近が最も高く、南東側に向かって緩やかに下っている。また、遺跡の南側には東西方向に延びる旧七北田川の流路があり、昭和22年に撮影された航空写真にその痕跡を確認することができる。

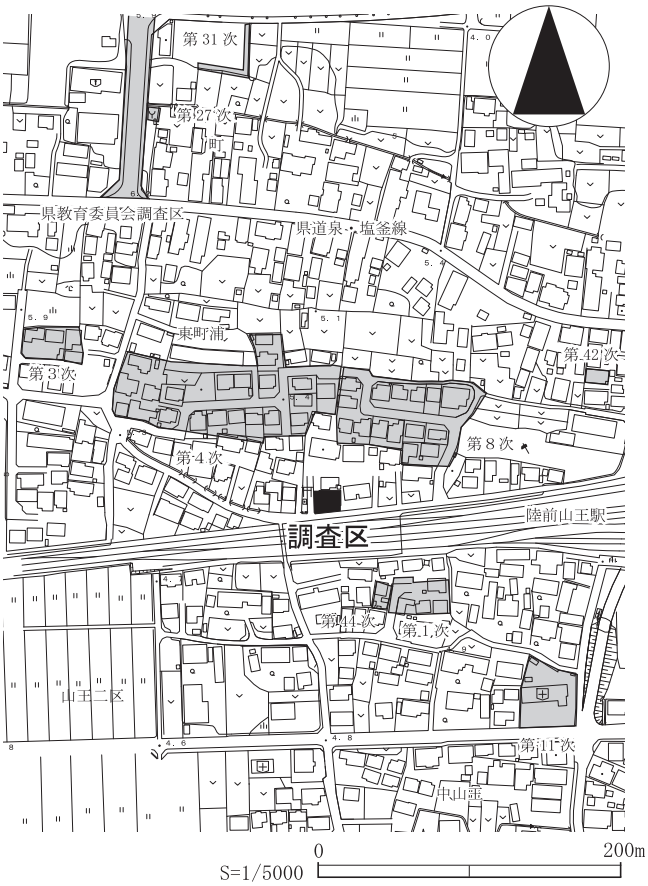
今回の調査区は遺跡の西半部に位置し、県道より南に約200ｍの地点にあたる。標高は約5.７ｍであり、現況は周辺も含め宅地となっている。本調査区周辺では、当教育委員会により南側で第１次調査（1979年）、北側で第４次調査（1983・1984年）・第８次調査（1988・1989年）を実施している。第４・８次調査では、多賀城跡南面に形成された地方都市の幹線道路である東西大路を発見したしている。東山道の一部であると考えられており、本遺跡及び東側に隣接する市川橋遺跡の調査成果から、沿道には高級官僚の邸宅が建ち並んでいたことが明らかとなっている。また、第８次調査では、東西大路の下層で大規模な木組み遺構を発見している。河川に設けられた灌漑施設である堰の可能性が指摘されており、出土遺物より古墳時代中期には埋没していたことが明らかとなっている。古墳時代には、本遺跡や西側の新田遺跡の広い範囲で水田が営まれていたことが明らかとなっており、それらの経営と密接に関係するものと考えられよう。一方、中世及び近世の様相をみると、西町浦地区で実施した第３次調査や宮城県教育委員会が実施した町地区の調査では近世の屋敷を区画する堀跡が発見されており、町地区では多数の建物跡も確認されている。近接する第４・８次調査では中世以降の土壙が多く確認されているが、詳細な年代や性格等については明らかでない。



第１図　山王遺跡と調査区の位置

2　調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成19年５月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財の係わりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に直径約11㎝、長さ10ｍの鋼管杭を打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等による遺構の保存が計れないか協議を行ったが、杭基礎以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないとのことから、記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、７月12日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、７月19日より現地調査を開始した。



第２図　調査区位置図

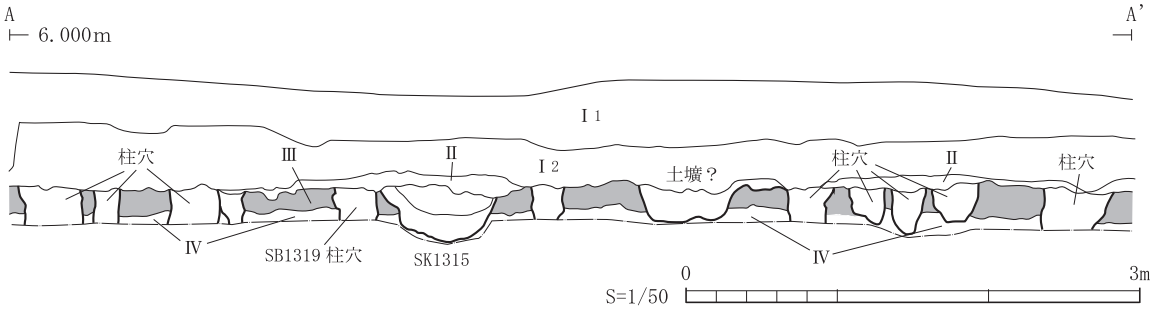
調査は、住宅建築部分の表土除去から取りかかった。調査面積と作業時の安全確保のため表土をすべて場外搬出したため、ほぼ対象面積分の調査区を設定することができた。20日より作業員を導入して排水用の側溝を設けるとともに、中央部にある後世の攪乱の除去や遺構検出作業などを行う。この結果、西半部のにぶい黄橙色砂質土（Ⅳ層）上面でSD1304A・B南北溝跡、東半部の褐色砂質土（Ⅲ層）上面で多数の小柱穴や土壙などを確認した。また、調査区北端部ではSD1304AがⅢ層に直接覆われていることも確認した。31日、実測図作成用の基準点を調査区内に移動し、平面図の作成を開始する。８月１日からはそれと並行して各遺構の埋土掘り下げや断面図を作成し、７日に調査区の全景写真を撮影した。９日、Ⅲ層を掘り下げ、Ⅳ層上面における遺構の検出作業を行った。Ⅳ層からは古墳時代中期の土師器片や石製模造品が出土することからその時期の遺構の存在に注意していたが、確認することはできなかった。その後一週間ほどの盆休みを挟み21日よりⅣ層の掘り下げを開始したところ、調査区中央部で土師器杯・壺・甕、石製模造品がまとまって出土したことから、概ねこの頃に堆積したものと考えられた。22日、Ⅳ層下層で東西方向のSD1329溝跡が現われたことから再度重機を用いて可能な限りⅣ層の掘り下げを行い、南北方向のSD1328溝跡との接続部まで確認することが出来た。24日、これらの土層堆積状況の写真を撮影した後、平面・断面図を作成する。27日、調査器材を撤収するとともに調査区内の埋め戻しを行い、本調査の一切を終了した。

3　調査成果

（１）層序（第３・５図）

今回の調査では、現代の盛土や耕作土の下で５層の堆積を確認した。このうちⅡ・Ⅲ層は調査区中央部にある後世の攪乱によって破壊されており、東半部の狭い範囲で確認できるのみである。

Ⅰ　１　層：現代の盛土であり、厚さは30～45㎝である。



第３図　調査区土層堆積状況（東壁）

Ⅰ　２　層：灰黄褐色砂質土であり、厚さは20～40㎝である。盛土以前の耕作土と考えられる。

Ⅱ　　層：黒褐色粘質土であり、厚さは５～15㎝である。遺構上面の窪みなどにやや厚く堆積している。

Ⅲ　　層：東半部で確認した褐色砂質土であり、厚さは10～20㎝である。中央から西側が攪乱によって破壊されているものの、本来は調査区全域に存在していたものと推測される。中世・近世の遺構検出面である。

Ⅳ　　層：にぶい黄橙色砂質土であり、古代またはそれ以前の遺構検出面である。調査区東半部では厚さ20～30㎝であるのに対し、この下層で検出したSD1328・1329溝跡の合流付近やSD1328東辺に沿った箇所では80㎝前後と厚く堆積している。SD1328･1329の合流付近からは、古墳時代中期の土師器杯・壺・甕、石製模造品などがまとまって出土していることから、この頃に堆積したものと考えられる。

Ⅴ　　層：SD1328・1329、SX1330の下層で確認したオリーブ黒色または黒褐色粘土であり、厚さは１ｍ前後であると推測される。

Ⅵ　　層：調査区北西部の深掘り箇所で確認した緑灰色砂である。

（２）発見遺構と遺物

今回の調査では、Ⅴ・Ⅳ・Ⅲ層上面がそれぞれ遺構検出面となっている。ここでは、検出面ごとに発見した遺構の概要を説明し、最後にⅣ層出土遺物について記載する。

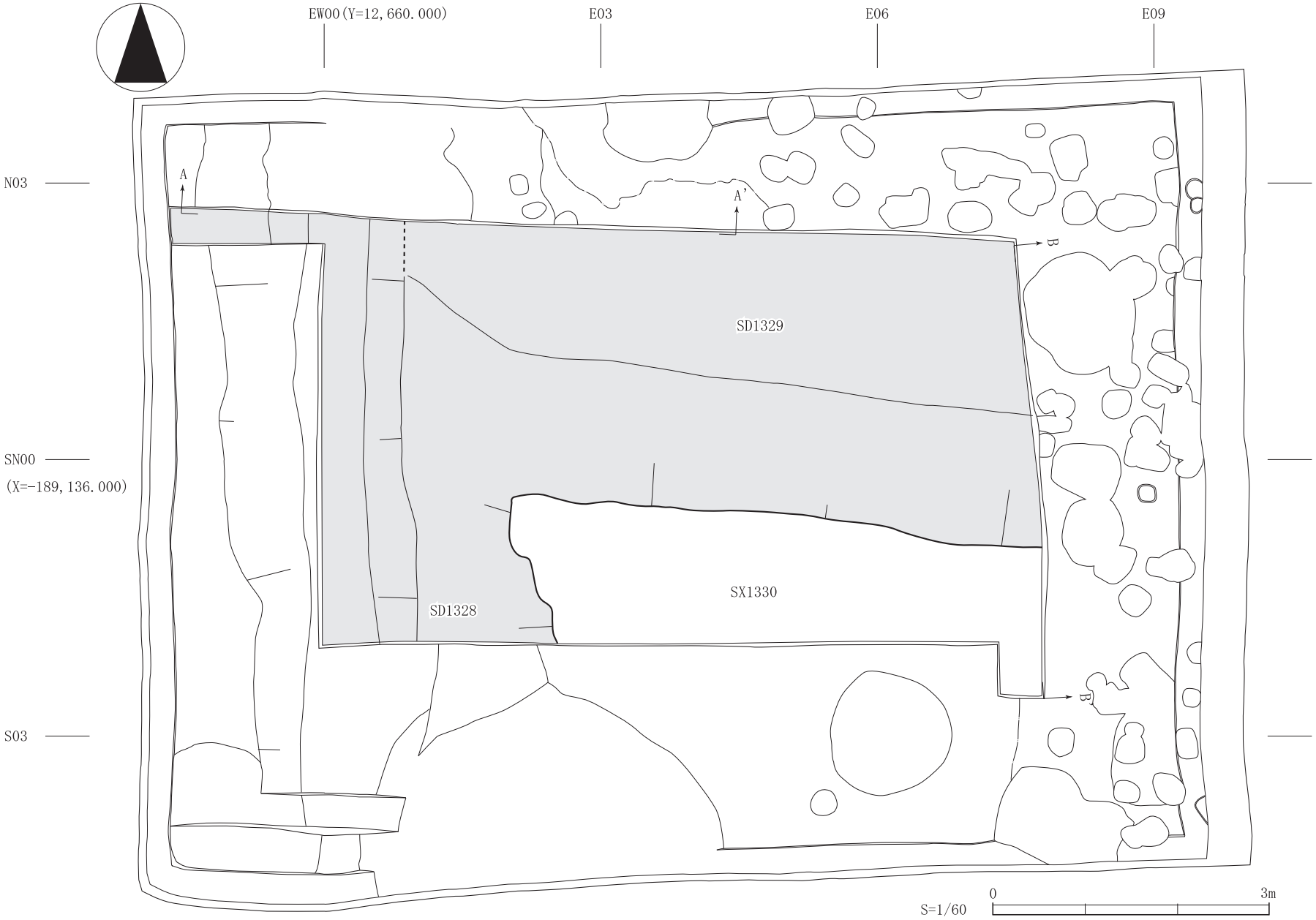
（Ⅴ層上面）

SD1328・1329溝跡（第４・５図）

調査区中央部から西部で発見した大規模な溝跡であり、南北方向のSD1328と東西方向のSD1329が直角に接続している。底面の標高値を見ると、SD1328が標高3.４ｍなのに対しSD1329が4.０ｍであり、約60㎝の比高が認められた。

SD1328：規模は幅４ｍ以上、深さ約1.４ｍである。壁は東側底面付近で僅かに段が認められるが、概ね緩やかに立ち上がっている。底面はやや丸みを帯びて窪んでおり、調査区内での比高はほとんどない。埋土は５層に分けることができる。１・３層がにぶい黄橙色砂質土、２層が黒褐色粗砂、４層が褐灰色粗砂、５層がオリーブ灰色粗砂である。このうち５層がSD1329の３層と一連の埋土である。遺物は出土していない

SD1329:規模は幅３ｍ以上、深さ70㎝である。壁は非常に緩やかに立ち上がっている。底面は南側の立ち上がる箇所でやや凹凸があるものの概ね平坦である。埋土は４層に分けることができる。１層が暗褐色



第４図　Ⅴ層検出遺構平面図

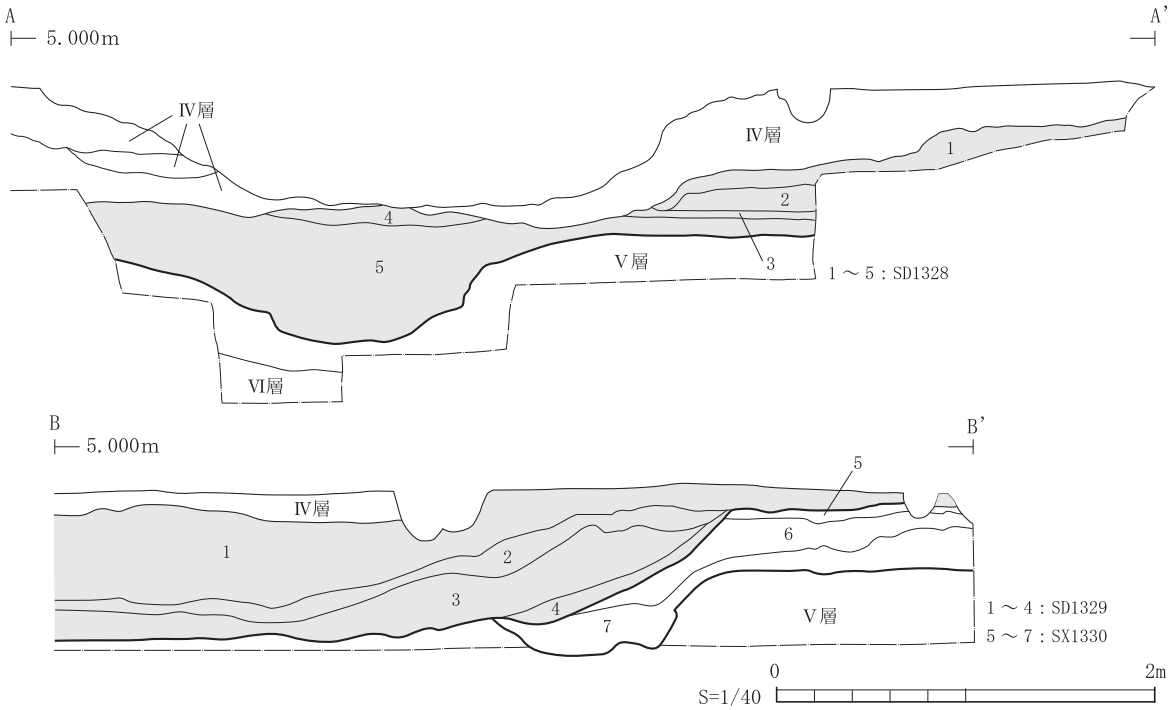
砂層、２層がにぶい黄褐色粗砂、３層がオリーブ灰色粗砂、４層がにぶい黄橙色粘土である。このうち１層は遺構外に広がり、調査区南側でSX1330の上面を覆っている。遺物は出土していない。

（Ⅳ層上面）

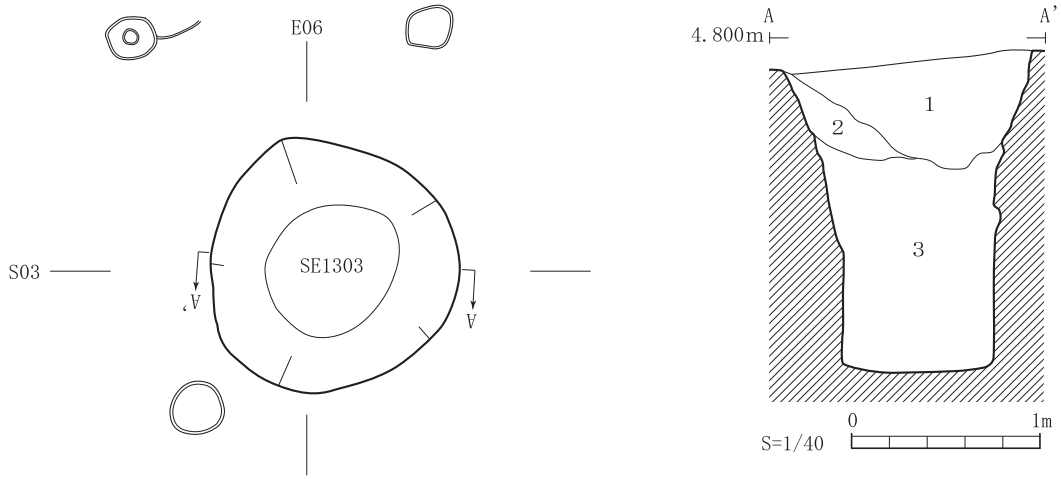
SE1303井戸跡（第６図）

調査区南東部で発見した素掘りの井戸跡である。平面形は円形であり、規模は直径約1.３m、深さ約1.６mである。壁は上方がやや開き気味になるものの、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は概ね平坦である。埋土は３層に分けることができる。１層は暗緑灰色粘質土であり、浅黄色砂質土がブロック状に多量に混入していることから人為的に埋められたものと考えられる。２・３層は黒色粘土であり、３層には細かい木片や植物遺体が多く混入している。

遺物は、土師器杯、須恵器杯・甕、平瓦の小片が出土している。

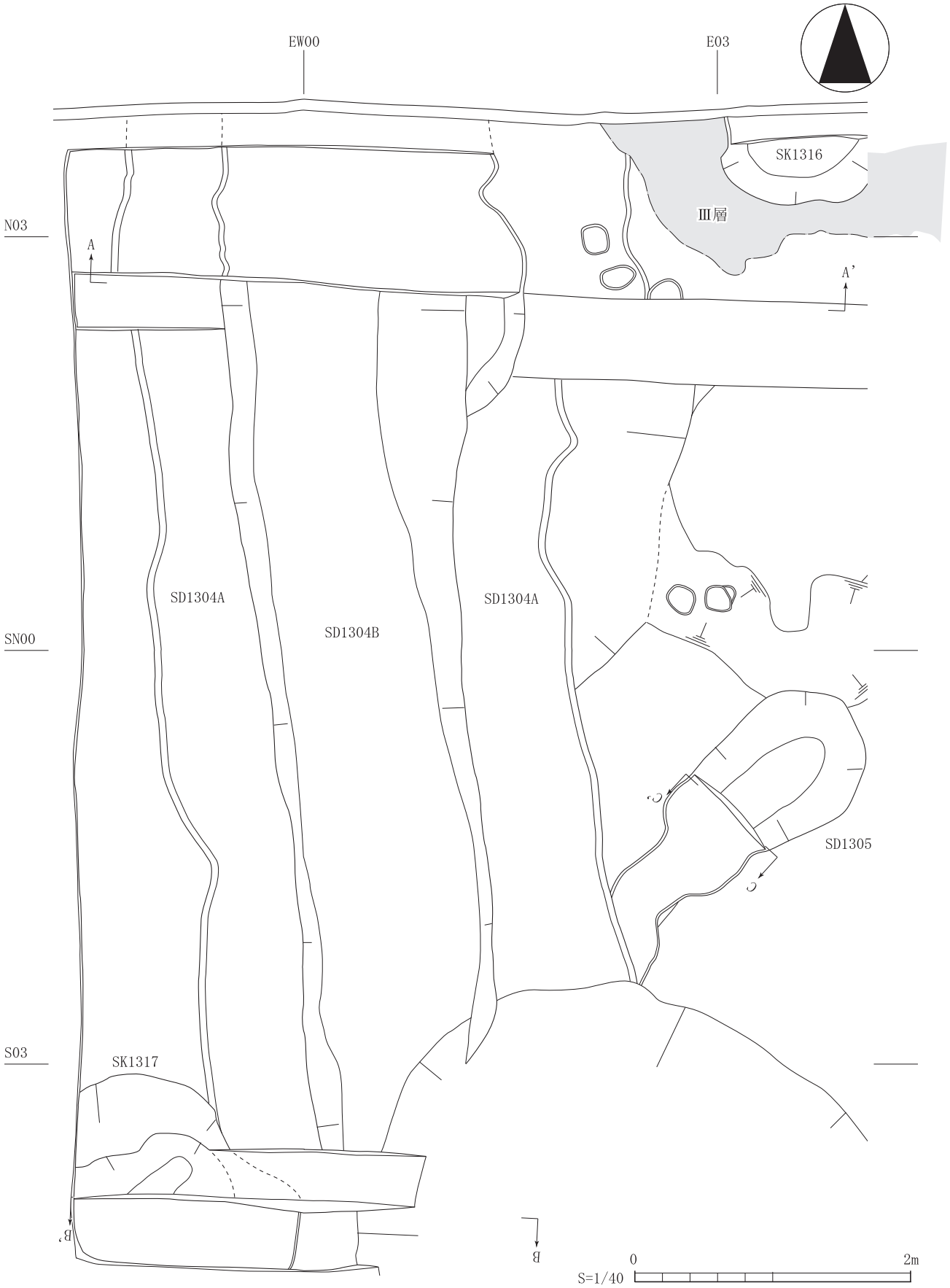


第５図　SD1328・1329、SX1330断面図



第６図　SE1303平面図・断面図

第７図　Ⅳ・Ⅲ層検出遺構平面図



第８図　SD1304・1305、SK1317平面図

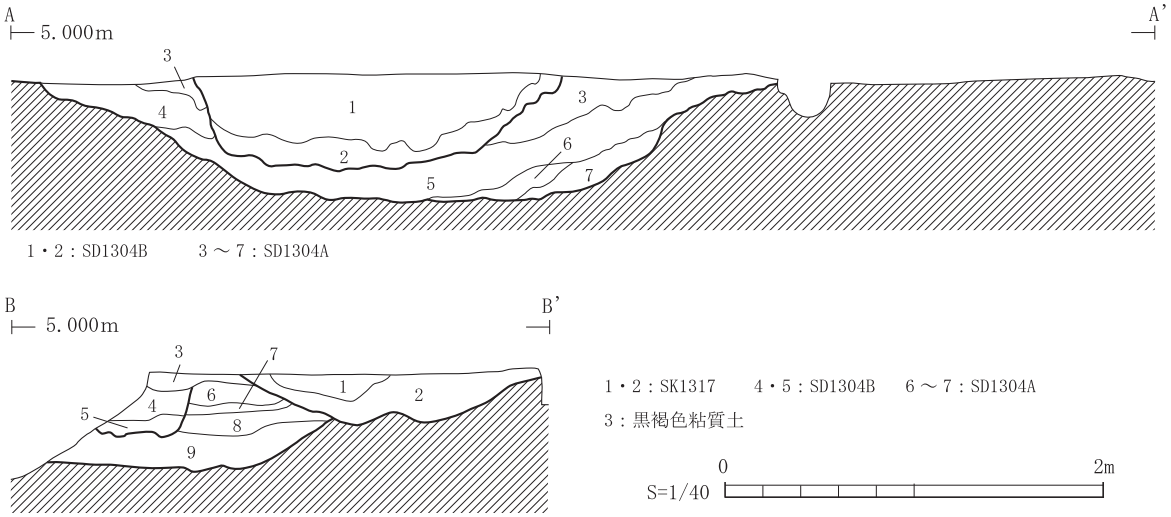
SD1304溝跡（第８・９図）

調査区西部で発見した南北方向の溝跡であり、ほぼ同位置で２時期の変遷（A→B期）が認められる。このうちA期については北壁でⅢ層に覆われている状況を確認したが、B期については明らかでない。

SD1304A：SD1305、SK1317と重複し、後者よりも古く前者よりも新しい。方向は北で約６度西に偏しており、規模は調査区北壁付近で上幅約3.９m、下幅約1.４m、深さ約70cmである。壁は北側で僅かに段が認められるものの緩やかに立ち上がっている。底面はやや凹凸があり、南側から北側に向かって緩やかに下っている。埋土は５層に分けることができる。１層が黒色粘質土、２層が灰黄褐色砂、３・４層がにぶい黄橙色砂質土、５層が暗褐色粗砂であり、３層には黒褐色粘質土が僅かに混入している。遺物は出土していない。

SD1304B：A期とほぼ同位置に造り直されている。方向は北で約７度西に偏しており、規模は上幅1.７～1.８m、下幅0.９～1.３m、深さ約50cmである。壁にはやや凹凸があるものの、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面も凹凸が多く、南側から北側に向かって緩やかに下っている。埋土は２層に分けることができる。いずれも黒色粘土やにぶい黄橙色砂質土が多量に混入する黒褐色粘質土が主体であるが、１層には炭化物が多く混入している。

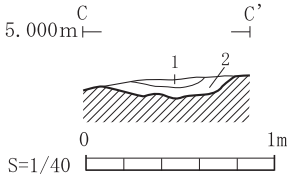
遺物は、土師器甕（B類）、須恵器甕が出土している。



第９図　SD1304、SK1317断面図

SD1305溝跡（第８・10図）

調査区西部で発見した溝跡である。SD1304と重複し、それよりも古い。規模は上幅0.４～１m、下幅35cm、深さ約10cmである。壁は緩やかに立ち上がっており、底面はやや凹凸があるものの概ね平坦である。埋土は２層に分けることができる。１層は褐灰色粘質土が多量に混入するにぶい黄褐色砂質土、２層はにぶい黄橙色砂質土が僅かに混入する褐灰色粘質土である。



第10図　SD1305断面図

遺物は、土師器高杯・甕が出土している。

SK1317土壙（第８・９・11図）

調査区南西部で発見した不整形の土壙である。SD1304と重複し、それよりも新しい。規模は東西1.９m

以上、南北約1.7ｍ、深さ30㎝である。壁は北側で僅かな段が認められるもの、非常に緩やかに立ち上がっている。底面は凹凸が多く、平坦ではない。埋土は２層に分けることができる。１層は炭化物が混入する黒褐色粘質土、２層は褐灰色粘質土やにぶい黄色砂質土･粗砂が多量に混入するにぶい黄色砂質土である。

遺物は、土師器杯（ＢＩｃ類）・甕、須恵器甕が出土している。

単位：cm

番号	種　類	特　徴		口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号	備　考
		外　面	内　面						
1	土師器　杯	体下部：回転ヘラケズリ 底　部：回転糸きり	ヘラミガキ、黒色処理	(11.9) 8/24	6.4 23/24	3.9	－	Ｒ９	ＢＩｃ類

第11図　SK1317出土遺物

SK1321土壙（第７図）

調査南西部で発見した円形の土壙である。SD1304と重複し、それよりも新しい。規模は東西約４ｍ、南北2.2ｍ以上である。壁は緩やかに立ち上がっており、底面は丸く窄んでいる。埋土は黒褐色粘質土であり、植物遺体が多量に混入している。

遺物は、近世陶器椀や瓦片が出土している。

（Ⅲ層上面）

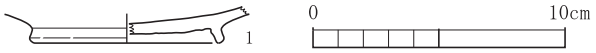
SB1318掘立柱建物跡（第12・13図）

調査区北東部で発見した桁行３間以上、梁行２間の東西棟掘立柱建物跡である。SB1320･1327と重複し、それらよりも古い。柱穴は７基検出しており、全ての柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は概ね発掘基準線と一致している。規模は桁行が北側柱列で3.9ｍ以上、柱間は西より約2.0ｍ、約1.9ｍである。梁行は西妻で約2.6ｍあり、柱間は南より約1.3ｍ、約1.3ｍである。柱穴の平面形は方形または不整形であり、規模は北側柱列西より１間目柱穴で測ると長軸48㎝、短軸35㎝、深さ30㎝である。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、褐色砂質土やにぶい黄橙色砂質土が多量に混入している。抜取り穴は柱穴の大半を壊すものと中央部に小さく残るものがある(註)。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、褐色砂質土が多く混入している。

遺物は、掘り方埋土から土師器杯の小片や灰釉陶器椀が出土している。

SB1319掘立柱建物跡（第13図）

調査区北東部で発見した桁行４間以上、梁行２間の東西棟掘立柱建物跡である。SD1306と重複し、それ

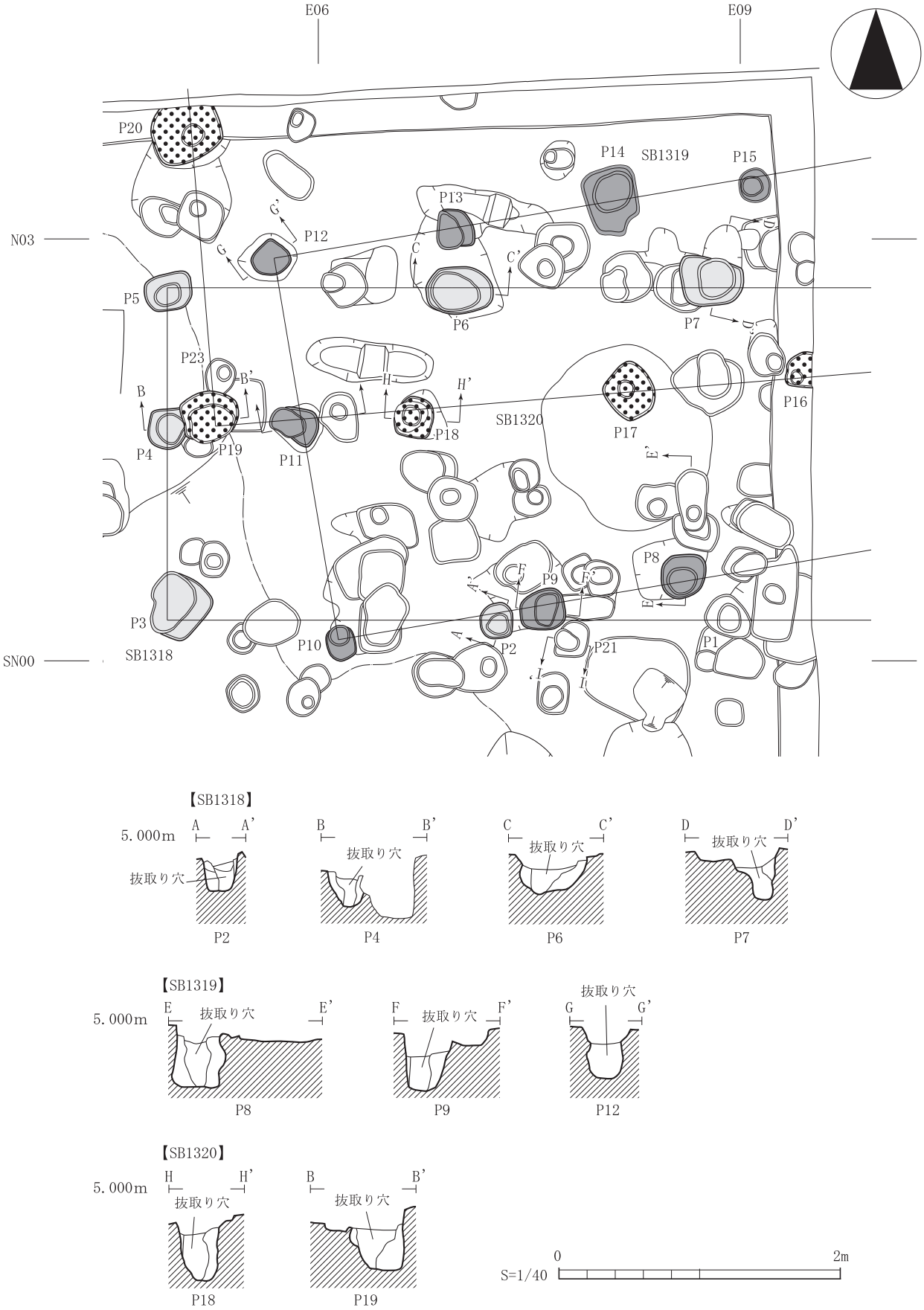


単位：cm

番号	種　類	特　徴		口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号	備　考
		外　面	内　面						
1	灰釉陶器　椀	回転ヘラケズリ	ロクロナデ	－	(7.4) 9/24	－	－	Ｒ４	黒笹90号窯式

第12図　SB1318出土遺物

註：柱穴中央部にある抜取り穴は、「柱のあたり痕跡」を反映しているものと考えられる



第13図　SB1318～1320平面図・断面図

よりも古い。柱穴は９基検出しており、北側柱列西より３間目柱穴で柱痕跡、それ以外の全ての柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は北側柱列で測ると、東で約10度北に偏している。規模は桁行が北側柱列で3.4ｍ以上、柱間は西より約1.3ｍ、約1.1ｍ、約1.0ｍである。梁行は西妻で約2.8ｍあり、柱間は南より約1.5ｍ、約1.3ｍである。柱穴の平面形は概ね方形を基調としており、規模は南側柱列西より１間目柱穴で測ると長辺32㎝、短辺28㎝、深さ40㎝である。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、褐色砂質土やにぶい黄橙色砂質土が多量に混入している。柱痕跡は直径15㎝の円形であり、埋土は黒褐色粘土である。抜取り穴は柱穴の大半を壊すものと中央部に小さく残るものがある。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、炭化物や褐色砂質土が多く混入している。

遺物は、掘り方埋土からロクロかわらけが出土している。

SB1320掘立柱建物跡（第13図）

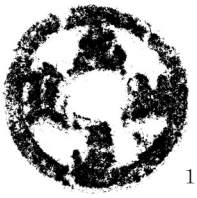
調査区北東部で発見した掘立柱建物跡であり、桁行４間以上、梁行２間以上の建物跡と考えた。SB1318・1322、SK1309と重複し、SK1309よりも古く、SB1318・1322よりも新しい。柱穴は５基検出しており、南西隅柱穴と南側柱列西より１間目で柱抜取り穴、それ以外の柱穴で柱痕跡を確認した。方向は南側柱列で測ると、東で約５度北に偏している。規模は桁行で4.1ｍ以上、柱間は西より約1.4ｍ、約1.5ｍ、1.22ｍである。西妻の柱間は約2.1ｍである。柱穴の平面形は概ね方形を基調としており、規模は南西隅柱穴で測ると長辺約40㎝、短辺約30㎝、深さ46㎝である。埋土は褐色砂質土が主体であり、黒褐色粘質土やにぶい黄橙色砂質土が多量に混入している。柱痕跡は直径10～16㎝の円形であり、埋土は黒褐色粘質土である。抜取り穴は南西隅柱穴が柱穴の大半を壊すのに対し、南側柱列西より１間目柱穴では中央部に小さく柱痕跡状に認められる。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、褐色砂質土が多く混入している。

遺物は、抜取り穴埋土から無釉陶器甕が出土している。

SB1322掘立柱建物跡（第14・15図）

調査区北東部で発見した東西３間以上、南北３間以上の掘立柱建物跡である。SB1320・1327と重複し、それらよりも古い。柱穴は５基検出しており、南側の柱列西より１間目柱穴と西側の柱列南より２間目柱穴で柱痕跡、南側の柱列西より２間目柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は南側の柱列で測ると、東で約10度北に偏している。規模は南側の柱列で3.6ｍ以上、柱間は西より約1.7ｍ、約1.9ｍである。西側の柱列は３ｍ以上、柱間は南より約1.5ｍ、約1.5ｍである。柱穴の平面形は概ね方形を基調としており、規模は南側柱列西より１間目柱穴で測ると長辺44㎝、短辺33㎝、深さ46㎝である。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、褐色砂質土やにぶい黄橙色砂質土が多量に混入している。柱痕跡は直径14㎝の円形であり、埋土は黒褐色粘質土である。抜取り穴は柱穴の大半を壊している。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、褐色砂質土が多く混入している。

遺物は、Ｐ２柱痕跡から元祐通寶が出土している。

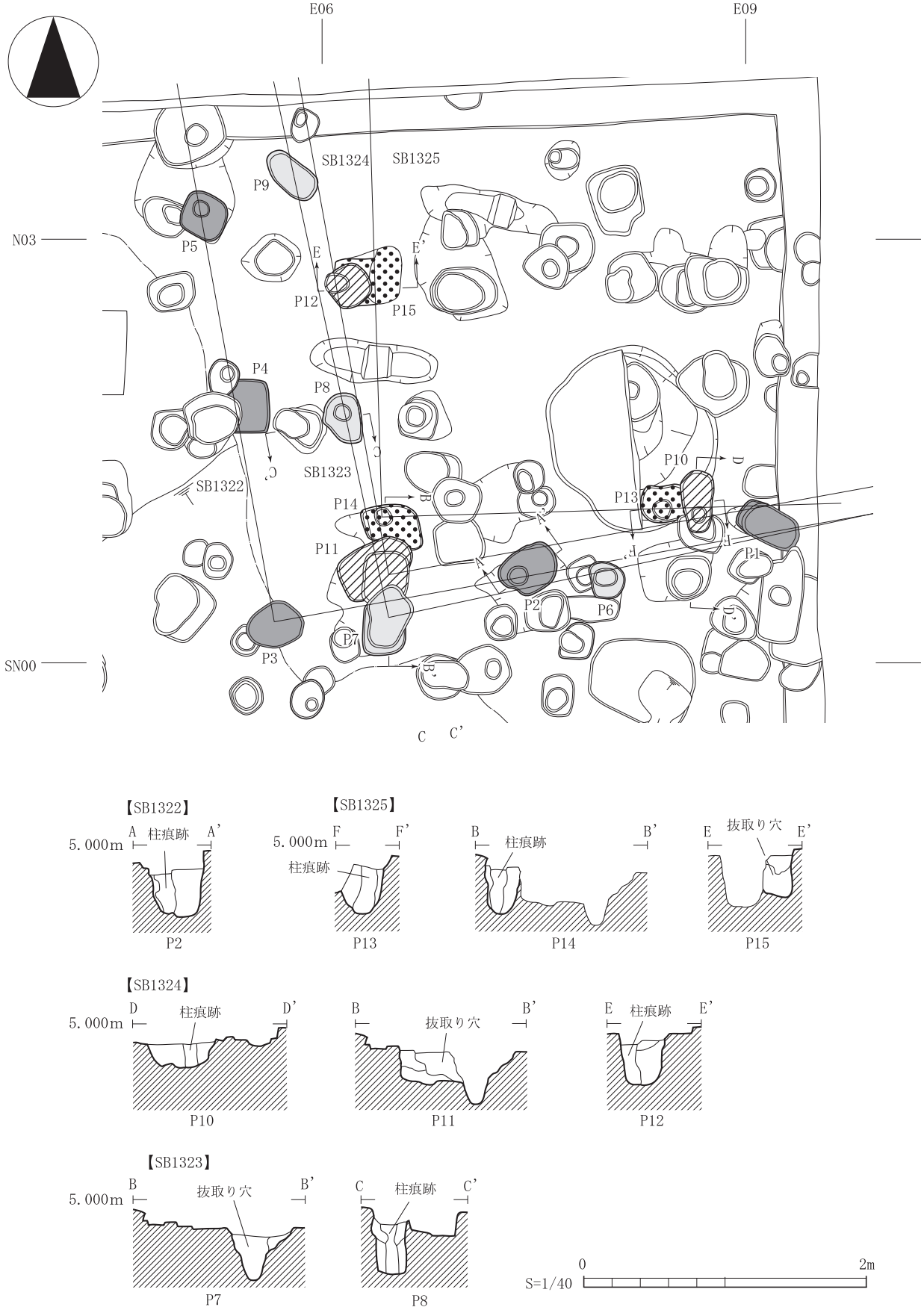


1（実寸）

単位：㎝

番号	種　類	計測値など	写真図版	登録番号	備　考
1	元祐通寶	直径：2.4、厚さ：0.1、初鋳1086年	－	R1	

第14図　SB1322出土遺物



第15図　SB1322～1325平面図・断面図

SB1323掘立柱建物跡（第15図）

調査区北東部で発見した南北３間以上、東西２間以上の掘立柱建物跡である。SB1324と重複し、それよりも新しい。柱穴は４基検出しており、南側の柱列西より１間目柱穴と西側の柱列南より１間目柱穴で柱痕、南西隅柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は西側の柱列で測ると、北で約12度西に偏している。規模は西側の柱列で3.２m以上、柱間は南より約1.５m、約1.７mであり、南側の柱列では西より１間目の柱間が約1.５mである。柱穴の平面形は概ね方形か不整形であり、規模は西側の柱列南より１間目柱穴で測ると長軸36cm、短軸28cm、深さ48cmである。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、褐色砂質土やにぶい黄橙色砂質土が多量に混入している。柱痕跡は直径12～16cmの円形であり、埋土は黒褐色粘質土である。南西隅柱穴の抜取り穴は柱穴の大半を破壊している。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土や炭化物が多量に混入している。

遺物は、抜取り穴埋土から須恵器杯の小片が出土している。

SB1324掘立柱建物跡（第15図）

調査区北東部で発見した東西２間以上、南北２間以上の掘立柱建物跡である。SB1323・1325、SK1309と重複し、SB1323、SK1309よりも古く、SB1325よりも新しい。柱穴は３基検出しており、南西隅柱穴で柱抜取り穴、それ以外の柱穴で柱痕跡を確認した。方向は南側の柱列で測ると、東で約10度北に偏している。柱間は南側が約2.２m、西側が約2.１mである。柱穴の平面形は方形または不整形であり、規模は南西隅柱穴で測ると長辺55cm、短辺32cm、深さ35cmである。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、褐色砂質土やにぶい黄橙色砂質土が多量に混入している。柱痕跡は直径12～18cmの円形であり、埋土は黒褐色粘質土である。南西隅柱穴の抜取り穴は柱穴の大半を破壊している。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、褐色砂質土や炭化物が多量に混入している。

遺物は、掘り方埋土から土師器杯の小片が出土している。

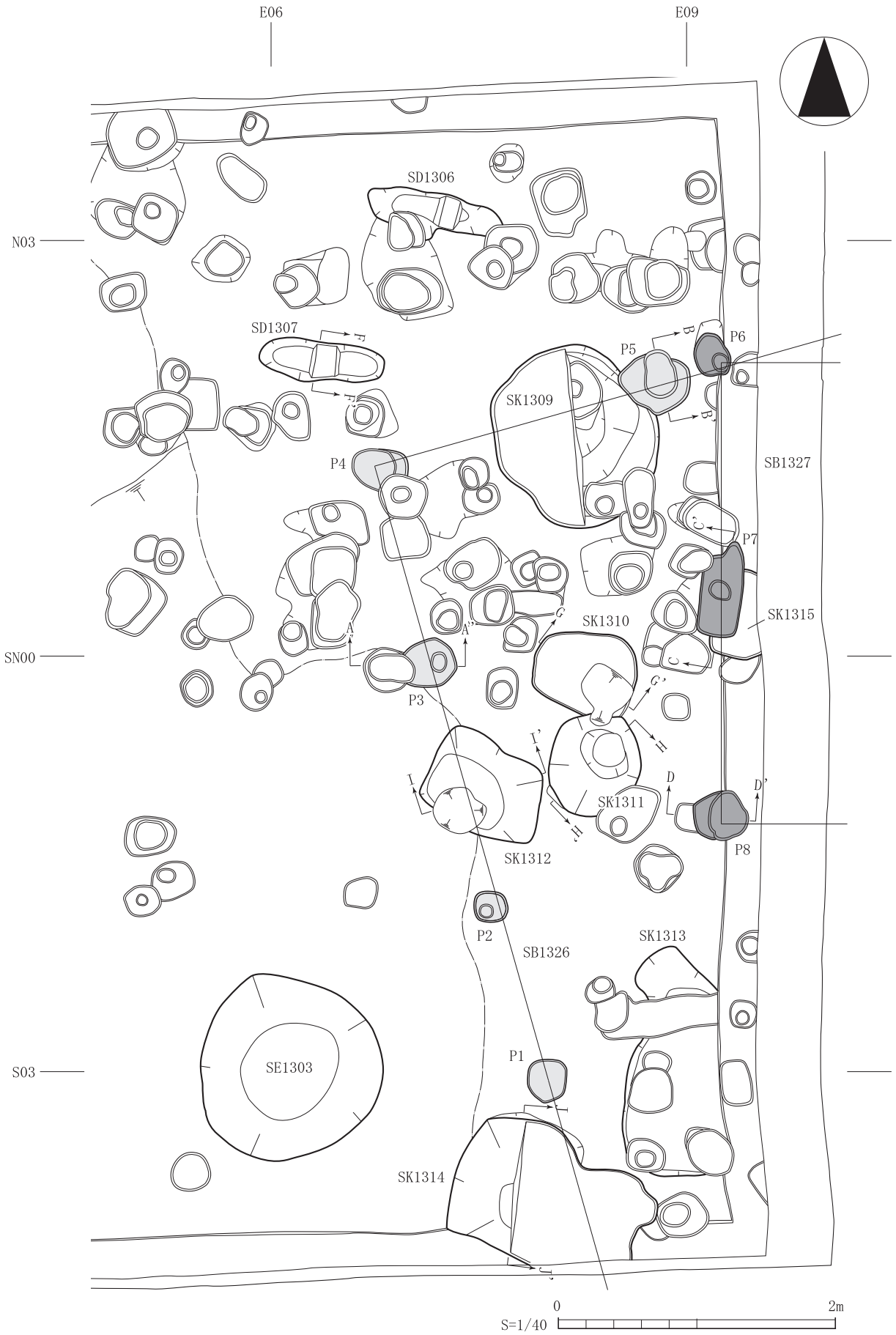
SB1325掘立柱建物跡（第15・16図）

調査区北東部で発見した東西２間以上、南北２間以上の掘立柱建物跡である。SB1324、SK1309と重複し、それらよりも古い。柱穴は３基検出しており、西側の柱列南より１間目柱穴で柱抜取り穴、それ以外の柱穴で柱痕跡を確認した。方向は南側の柱列で測ると、西で１度42分北に偏している。柱間は南側が1.98m、西側が約1.７mである。柱穴の平面形は概ね方形を基調としており、規模は南西隅柱穴で測ると長辺40cm、短辺34cm、深さ43cmである。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、褐色砂質土が多量に混入している。柱痕跡は直径14cmの円形であり、埋土は黒褐色粘質土である。西側柱列南より１間目柱穴の抜取り穴は柱穴の東側に寄っている。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、褐色砂質土や炭化物が多量に混入している。

単位：cm

番号	種　類	特　徴		口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号	備　考
		外　面	内　面						
1	かわらけ	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	－	5.0 16/24	－	－	R３	

第16図　SB1325出土遺物



第17図　SB1326・1327、SE1303ほか平面図

遺物は、掘り方埋土からロクロかわらけや土師器杯の小片が出土している。

SB1326掘立柱建物跡（第17・18図）

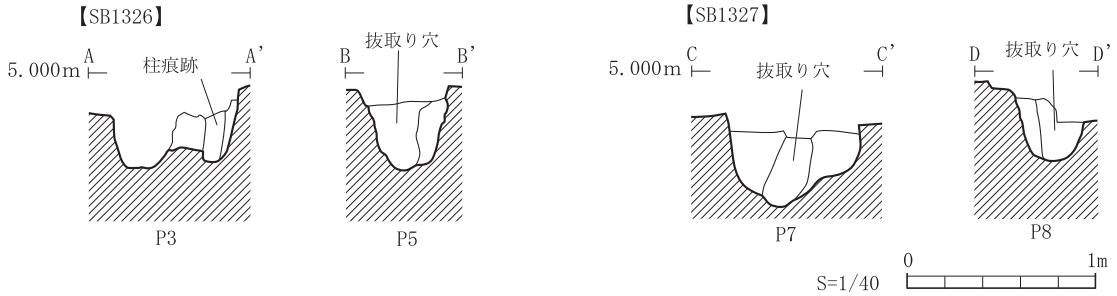
調査区東部で発見した掘立柱建物跡であり、桁行４間以上、梁行２間の建物跡と想定した。SK1309と重複し、それよりも古い。柱穴は５基検出しており、西側柱列北より１・２間目柱穴で柱痕跡、北西隅柱穴と北妻棟通り下柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は西側柱列で測ると、北で約16度西に偏している。規模は桁行4.６m以上、柱間は北より約1.５m、1.80m、約1.３mである。北妻の柱間は約2.１mである。柱穴の平面形は方形または不整形であり、規模は北妻棟通り下柱穴で測ると一辺45cm、深さ42cmである。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、褐色砂質土やにぶい黄橙色砂質土が多量に混入している。柱痕跡は直径10～14cmの円形であり、埋土は黒褐色粘質土である。柱抜取り穴は柱穴を大きく破壊している。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、炭化物が僅かに混入している。

遺物は、抜取り穴埋土からかわらけの小片が出土している。

SB1327掘立柱建物跡（第17・18図）

調査区東部で発見した掘立柱建物跡であり、南北２間の柱列を建物の西妻と想定した。北西隅柱穴で柱痕跡、それ以外の柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は発掘基準線と一致している。建物の規模は梁行が約3.３m、柱間は北より約1.６m、約1.７mである。柱穴の平面形は概ね方形を基調としており、規模は棟通り下柱穴で測ると長辺58～70cm、短辺30cm、深さ50cmである。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、褐色砂質土やにぶい黄橙色砂質土が多量に混入している。柱痕跡は直径14～18cmの円形であり、埋土は黒褐色粘土である。柱抜取り穴は柱穴を大きく破壊するものと、中央部に柱痕跡状に認められるものがある。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、褐色砂質土や炭化物が多量に混入している。

遺物は、土師器甕の小片が出土している。



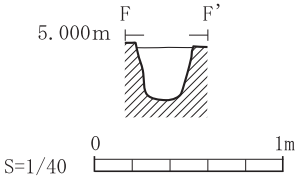
第18図　SB1326・1327断面図

SD1306溝跡（第17図）

調査区北東部で発見した溝跡である。SB1319と重複し、それよりも新しい。規模は長さ１m、上幅20～25cm、下幅10～15cm、深さ約30cmである。壁は東西両端部は緩やかであるが、それ以外はほぼ垂直に立ち上がっている。底面はやや凹凸があるものの、概ね平坦である。埋土は黒褐色粘質土であり、にぶい黄褐色砂質土や炭化物が多量に混入している。遺物は出土していない。

SD1307溝跡（第17・19図）

調査区北東部で発見した東西方向の溝跡である。規模は長さ90cm、上幅25～30cm、下幅15～18cm、深さ約30cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がっており、底面は概ね平坦である。埋土は黒褐色粘質土であり、にぶい黄褐色砂質土や炭化物が多量に混入している。遺物は出土していない。



第19図　SD1307断面図

SK1309土壙（第17図）

調査区北東部で発見した南北に長い円形の土壙である。SB1320・1324・1325・1326と重複し、それらよりも新しい。規模は南北約1.3ｍ、東西約1.2ｍ、深さ25㎝である。壁は中位に段が認められ、北半部は垂直に、南半部は緩やかに立ち上がっている。底面は北側に向かって深くなっている。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土や褐色砂質土が多量に混入している。

遺物は近世の陶器擂鉢が出土している。

SK1310土壙（第17・20図）

調査区東部で発見した東西に長い方形の土壙である。規模は東西75㎝、南北50～60㎝、深さ40㎝である。壁は概ね垂直に立ち上がっている。底面はやや凹凸があるものの、概ね平坦である。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土や褐色砂質土が多量に混入している。遺物は出土していない。

SK1311土壙（第17・20図）

調査区東部で発見した南北に長い円形の土壙である。規模は南北75㎝、東西65㎝、深さ35㎝である。壁は南半部が緩やかに、北半部が垂直気味に立ち上がっている。底面は北側に向かって深くなっている。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土や褐色砂質土、明黄褐色砂質土が多量に混入している。遺物は出土していない。

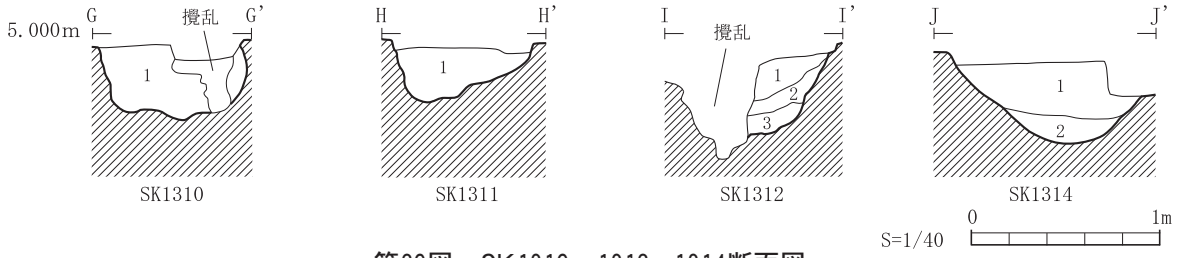
SK1312土壙（第17・20・21図）

調査区東部で発見した東西に長い方形の土壙である。規模は東西85㎝、南北60㎝、深さ50㎝である。壁は南側から西側は垂直に、北側から東側は緩やかに立ち上がっている。底面は概ね平坦である。埋土は３層に分けることができる。１・３層は黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土や褐色砂質土が多量に混入している。２層は褐色砂質土であり、にぶい黄橙色砂質土が多量に混入している。

遺物は、かわらけ（灯明皿）、寛永通寶（古寛永銭２枚、文銭１枚）が出土している。

SK1314土壙（第17・20図）

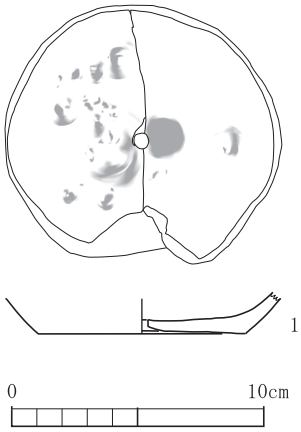
調査南東部で発見した東西に長い不整形の土壙である。規模は東西約1.5ｍ、南北0.8～１ｍ、深さ50㎝である。壁は凹凸がほとんどなく、緩やかに立ち上がっている。底面は丸みを帯びながら窪んでいる。埋土は２層に分けることができる。ともに黒褐色粘質土が主体であるが、１層には炭化物、２層にはにぶい黄橙色砂質土が多量に混入している。遺物は出土していない。

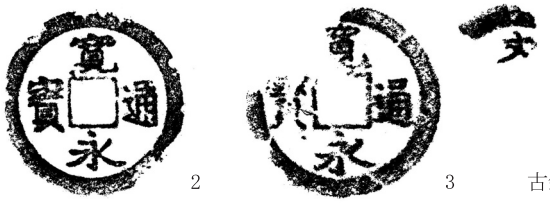


第20図　SK1310～1312・1314断面図

Ⅳ層出土遺物（第22図）

土師器杯・壺・甕、石製模造品（有孔円板）、不明鉄製品が出土している。SD1328・1329溝跡合流付近の厚く堆積した箇所に集中しており、完形に近いものが多い。また、石製模造品のなかには土師器杯の内面に付着した状態で出土したものもある。





古銭（実寸）

単位：cm

番号	種　類	特　徴		口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号	備　考
		外　面	内　面						
1	かわらけ 灯明皿	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	－	8.2 23/24	－	－	R２	内面に油煙付着
2	寛永通宝	直径：2.4、厚さ：0.1						R２	古寛永銭
3	寛永通宝	貯径：2.5、厚さ：0.1、背面に「文」字						R４	文銭

第21図　SK1312出土遺物

4　考察

今回の調査では、Ⅲ層上面で掘立柱建物跡、溝跡、土壙、Ⅳ層上面で井戸跡、溝跡、土壙、Ⅴ層上面で溝跡などを発見した。以下、これらの遺構及び古墳時代中期の遺物が出土しているⅣ層の年代について検討したあとで、各時代の様相について概観する。

（1）遺構等の年代

①Ⅴ層上面検出遺構

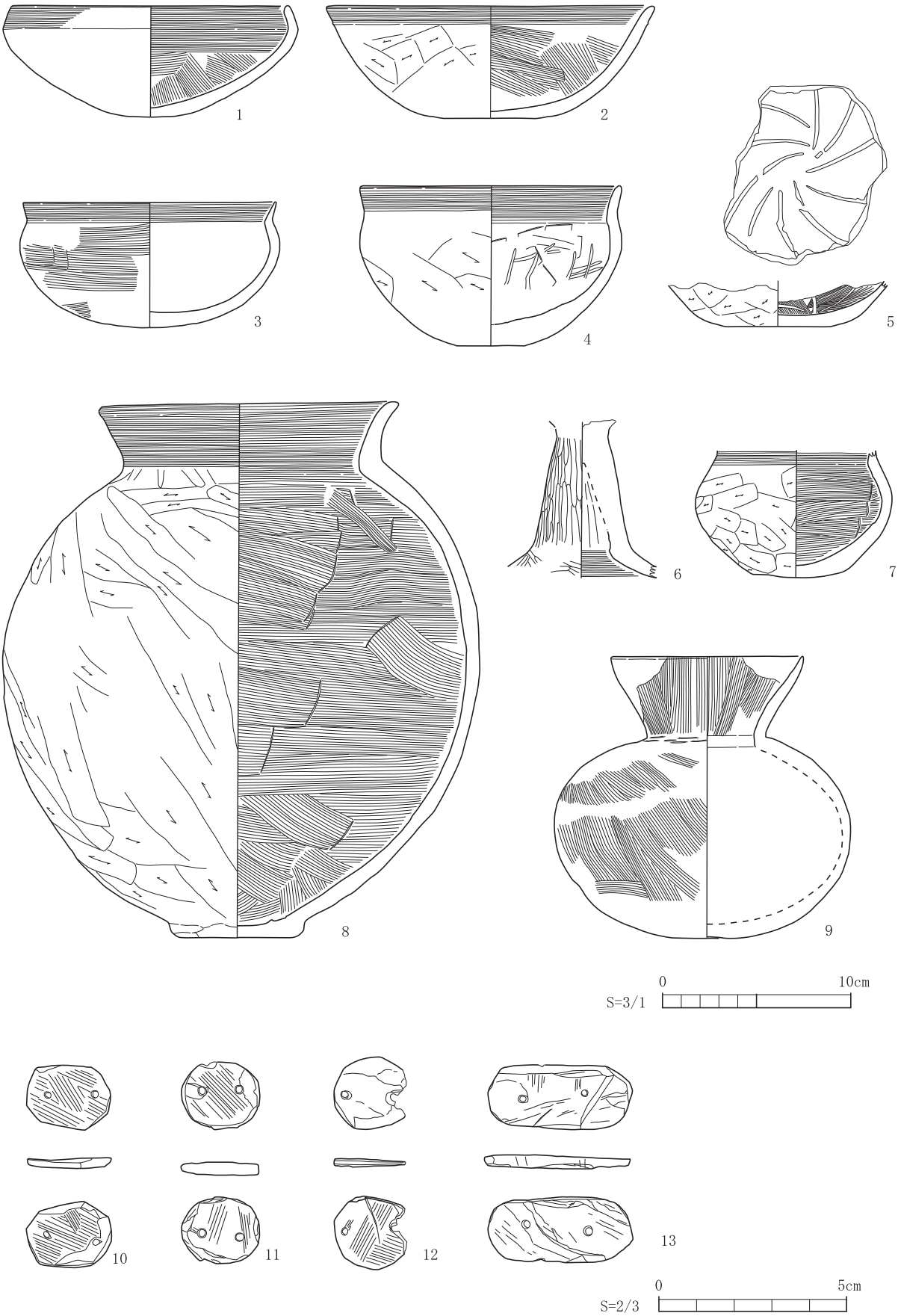
SD1328・1329、SX1330がある。遺物がほとんどなく遺構の年代は明らかでないものの、これらを覆うⅣ層出土遺物が５世紀後半頃のものであることから、その頃には埋没していたことが明らかである。

②Ⅳ層

古墳時代中期の土師器杯・高杯・壺・甕が出土している。杯には平底のものと丸底のものがある。平底のものは、体部から口縁部まで直線的に外傾するものと、体部が内彎しながら立ち上がり口縁部で僅かに外傾するものがある。丸底のものは体部が直線的に外傾し口縁部が内傾するものと、彎曲しながら立ち上がり口縁部が外傾するものがある。壺は体部最大径に対して口縁部径が小さいものであり、口縁部は短く直線的に外傾している。甕は胴部がやや縦長のものであり、口縁部は短く外反している。

これら出土遺物をみると、杯は概ね中期全般をとおして認められるものである。一方、壺は５世紀後半頃とされている鴻ノ巣遺跡第１号住居跡出土のもの（註）に類似していることや、甕の胴部が縦長である

註：宮城県教育委員会「（５）岩切鴻ノ巣遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』宮城県文化財調査報告書　第35集　1974



第22図　Ⅳ層出土遺物

第22図観察表

番号	種　類	特　徴		口径残存率	底径残存率	器　高	写真図版	登録番号	備　考
		外　面	内　面						
1	土師器　杯	口：ヨコナデ 体：摩滅のため不明	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	(14.6) 4 /24	2.8 24/24	5.9	P101	R12	
2	土師器　杯	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	(17.4) 2 /24	5.0 23/24	6.0	－	R11	
3	土師器　杯	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	口：ヨコナデ 体：摩滅のため不明	(13.2) 1 /24	－	6.7	－	R13	
4	土師器　杯	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ→ヘラミガキ	(13.8) 3 /24	3.6 12/24	8.5	－	R6	
5	土師器　杯	体：ヘラケズリ	体:ヘラナデ→螺旋状のヘラミガキ	－	5.2 18/24	－	－	R7	
6	土師器　高杯	脚：ヘラミガキ 裾：ヘラミガキ	脚：シボリ目 裾：ヨコナデ	－	－	－	－	R15	
7	土師器　杯	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	－	4.5 24/24	－	－	R14	
8	土師器　甕	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	16/8 12/24	6.4 24/24	28.7	－	R1	
9	土師器　壺	口：ナデ 体：ヘラケズリ→ナデ	口：ナデ 体：摩滅のため不明	10.2 1 /24	3.0 24/24	15.0	P101	R5	
10	石製模造品	最大長：2.25、最大幅：1.7、最大厚：0.3、孔径：0.1～0.15					P101	R19	有孔円板 R11内面に付着
11	石製模造品	最大長：2.05、最大幅：1.75、最大厚：0.3、孔径：0.15～0.2					P101	R16	有孔円板
12	石製模造品	最大幅：1.95、最大厚：0.2、孔径：0.15～0.2					P101	R18	有孔円板
13	石製模造品	最大長：3.85、最大幅：1.7、最大厚：0.35、孔径：0.15～0.25					P101	R8	有孔円板

など中期でも新しい要素が認められる。したがって、今回出土した土器についても５世紀後半頃の年代を与えておきたい。

③Ⅳ層上面検出遺構

SD1304はほぼ同位置で２時期の変遷がある（A→B期）。このうちB期から土師器甕B類が出土していることや、重複関係で後述するSK1317よりも古いことから、８世紀後葉～９世紀前半頃の年代が推測される。A期については出土遺物がないため明らかでないが、B期と同位置・同方向であることから、それ以前でもさほど遡らない時期を想定しておきたい。SD1304よりも古いSD1305からは、古墳時代中期の土師器高杯が出土している。ただし、検出面であるⅣ層が中期に形成されたものであることや、出土した遺物が小片であるため遺構の年代に直接反映させることが困難であることから、ここでは中期に遡る可能性を示唆するに留めておきたい。

SK1317からは、土師器杯BⅡc類がほぼ完形で出土している。底径／口径が0.56、器高／口径が0.32であり、器形的には９世紀前半代に多く認められるものである。SK1321からは、18世紀後葉～19世紀初め頃と考えられる陶器椀が出土していることから、それ以降の年代が推測される。

SE1303は素掘りの井戸跡である。これまで多賀城市内で発見された井戸跡についてみると、古代のものは井戸側を備えたものが一般的であるのに対して、中世以降になるとほとんどが素掘りとなる傾向が窺える。出土遺物が古代のものに限られるものの、遺構の形態やⅢ層上面で発見した中世の建物群に近接した位置関係にあることを考慮し、ここでは概ね中世のものとしておきたい。

④Ⅲ層上面検出遺構

SB1319・1324掘り方埋土やSB1326柱抜取り穴埋土からかわらけ、SB1320柱抜取り穴埋土から無釉陶器

甕、SB1322柱痕跡から元祐通寶（初鋳:1086年）が出土している。かわらけや無釉陶器甕はいずれも小片であるため年代的な特徴を見出すことは困難であるものの、近世以降の遺物が全く認められないことから、大きく中世の範疇で捉えることが可能であろう。また、これらと規模や埋土が近似する建物跡やその他の柱穴群についても、ここでは同時期のものと考えておきたい。

SK1309から近世の陶器擂鉢、SK1312から寛永通宝（古寛永銭２枚、文銭１枚）が出土していることから、これら土壙の年代を近世以降とすることができる。また、埋土が近似するSK1310･1311についても同様の年代が推測される。一方、SK1313にはⅡ層が直接混入していることから、上記した土壙などよりもさらに新しいものと考えておきたい。

なお、SB1320・1324・1325・1326とSK1309に重複関係が認められ、後者が新しいことを確認している。このことは、SB1318～1327やその他柱穴群を中世、SK1309～1313を近世以降とした年代観とも矛盾しない。

（２）各時代の概要（第23図）

①古墳時代中期以前

南北方向のSD1328溝跡と東西方向のSD1329溝跡がある。ともに幅３ｍを超す大規模なものである。河川の可能性も考えられるが、壁の立ち上がりが明確であることや、これらが合流する底面をみると東西方向から南北方向への排水を意図したと考えられる明瞭な高低差が認められることから、人工的に造られた水路であった可能性が高い。

なお、北側に近接する第８次調査では、古墳時代の灌漑施設（堰）と考えられる大規模な木組み遺構が発見されており（註）、中期頃に埋没したとされる第Ⅱ層に覆われていることが確認されている。このような状況は、本調査区で確認したⅣ層及びSD1328･1239の年代観とも共通していることから、これらの遺構が同時期に機能していた可能性も考えられよう。

②古代

南北方向のSD1304溝跡とSK1317土壙がある。SD1304には２時期の変遷（A→B期）があり、A期は幅約４ｍ、B期でも幅1.８ｍと大規模なものである。何らかの区画溝とも考えられるが、本地区では古代の遺構がほとんど発見されなかったことから詳細は明らかでない。

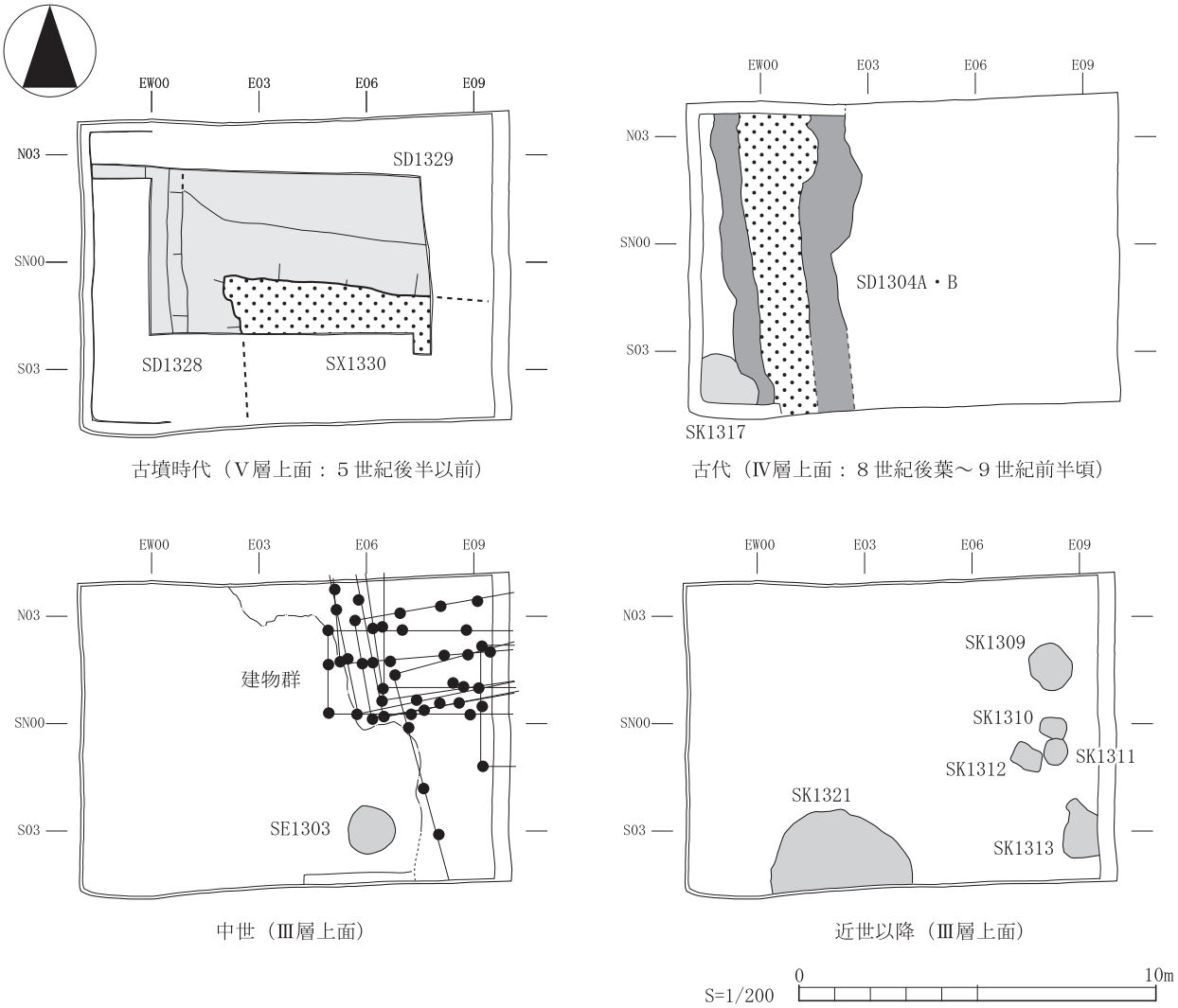
③中世

SB1318～1327掘立柱建物跡やSE1303井戸跡がある。建物跡は柱間が1.５～2.０ｍ程度のものが多く、柱穴の規模も直径（長軸）30～50㎝と小規模である。また、規模や埋土から同時期とみられる柱穴でも建物として組み合わせることができなかったものもあることから、さらに多くの建物が存在しているものと推測される。ところで、これら建物跡は調査区東半部で何度も建て替えられているのに対して、西側ではこの頃の遺構が全く認められなかった。狭い範囲ではあるものの、東側の居住域と西側の空閑地といった場の使われ方が反映されたものと考えられよう。

④近世及びそれ以降

SK1309～1313・1321があるものの、遺構は閑散としている。

註：多賀城市埋蔵文化財調査センター『山王遺跡―第8次発掘調査報告書―』多賀城市文化財調査報告書第22集 1990



第23図　遺構変遷模式図

5　まとめ

（1）古墳時代～近世の遺構を発見した。

（2）Ⅴ層上面で発見した大規模な溝跡は水路と考えられる。第８次調査で確認された灌漑施設とともに、本地区周辺における古墳時代の水利を考える上で重要である。

（3）中世では多数の掘立柱建物跡や井戸跡１基を発見した。南側70mに位置する第44次調査（平成15年度）でも幅約3.５mの大規模な区画溝の一部を確認しており、本地区周辺における中世の遺構の広がりが次第に明らかになりつつある。

山王遺跡写真図版

調査区全景（東より）

SD1304B完掘状況（南より）

調査区東側掘立柱建物群

SB1322・P 2断面

SB1323・P11、SB1324・P14断面

SB1325・P13断面

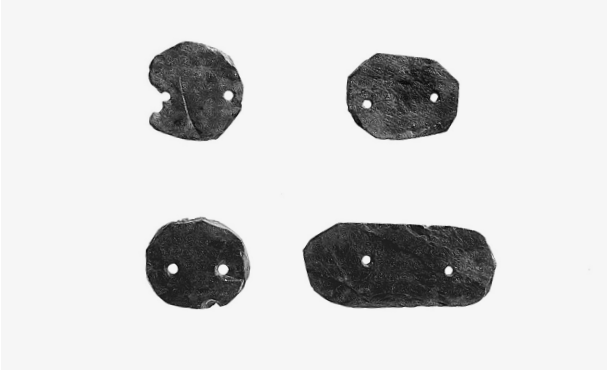
SB1327・P 7断面

Ⅳ層遺物出土状況

SD1328断面（北壁付近）

SD1329断面（東壁付近）

土師器杯　第22図１：Ｒ12



石製模造品　第22図10～13：Ｒ８・16・18・19

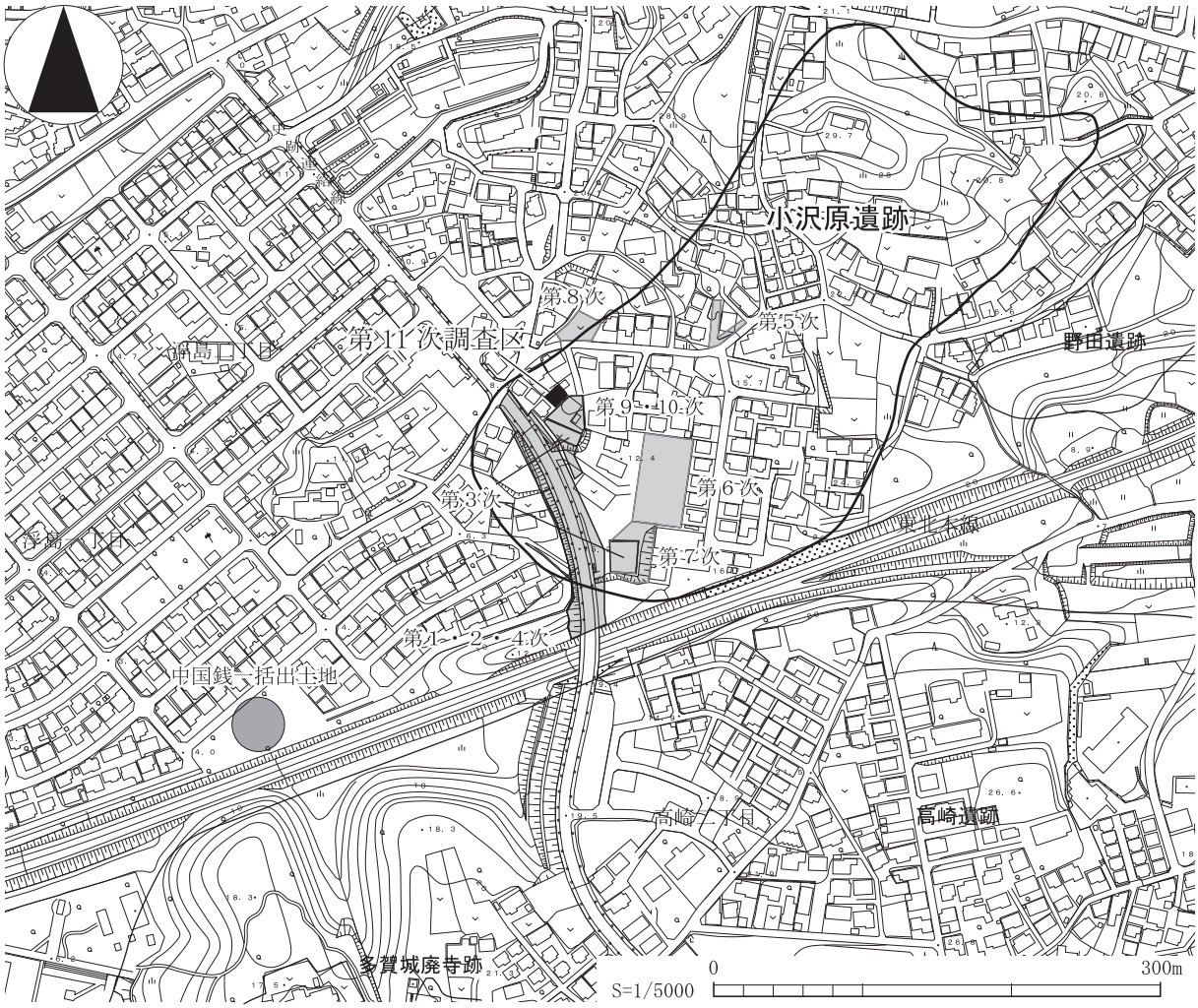
土師器壺　第22図９：Ｒ５

土師器甕　第22図８：Ｒ１

X　小沢原遺跡第11次調査

1　遺跡の環境と周辺の調査成果

本遺跡は塩釜方面から延びる低丘陵の西端付近に位置しており、遺跡の北東部は市境を跨いで塩竈市に及んでいる。標高は10～20mであり、北東側から南西側に向かってやや急に下っている。本遺跡南側の谷状地形を挟んだ丘陵上には、多賀城の付属寺院として知られる多賀城廃寺跡や古墳時代から近世にかけての複合遺跡である高崎遺跡などが立地しており、丘陵上にある遺跡の中でも遺構が比較的多く確認される地域である。本調査区は小沢原遺跡の西端部に位置しており、現況は宅地や畑地である。南西側に向かって下る緩斜面に位置しており、標高は9.２～9.８ｍとなっている。これまで本地区周辺では数箇所で発掘調査を実施しており、古代の掘立柱建物跡や竪穴住居跡、土器埋設遺構、土壙などが発見されている。その多くは本調査区西側及び南側に隣接する第１～３・10次調査区で発見されており、特に第１・２次調査区では桁行５間以上、梁行３間の建物跡が確認されるなど官人層の居宅の一部と考えられている。土器埋設遺構は、北東約100mにある第５次調査で発見されている。一方、昭和27年に本地区より約300m南西側の地点で大量の古銭が発見されている。大部分が紛失したとされているが、残存する204枚全てが中国銭であることから中世の備蓄銭の可能性が考えられている。



第１図　第11次調査区と周辺の調査区

2　調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成19年８月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財の係わりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に直径約11㎝、長さ4.5～6.5ｍの鋼管杭を打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等による遺構の保存が計れないか協議を行ったが、杭基礎以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないとのことから、記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、10月14日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、10月22日より現地調査を開始した。

調査は、住宅建築部分の表土除去から取りかかったが、大部分が後世の攪乱によって破壊されていることが明らかとなったため、直ちにSD62の埋土を掘り下げ全景写真を撮影した。その後、24日に平面図･断面図の作成、25日に調査区の埋め戻しを行い、本調査の一切を終了した。

3　調査成果

（1）層序（第２図）

Ⅰ　1　層：宅地造成に伴う盛土であり、厚さは70～80㎝である。

Ⅰ　2　層：宅地造成以前の盛土であり、厚さは30～80㎝である。北側ほど厚く堆積している。

Ⅰ　3　層：調査区南側に認められる暗褐色砂質土であり、厚さは最大25㎝である。締まりが弱く、Ⅰ２層以前の耕作土と考えられる。

Ⅱ　　層：調査区全域に認められる明黄褐色粘質土である。隣接する第10次調査区の成果から、古代・中世の遺構検出面と考えられる。

（2）発見遺構と遺物

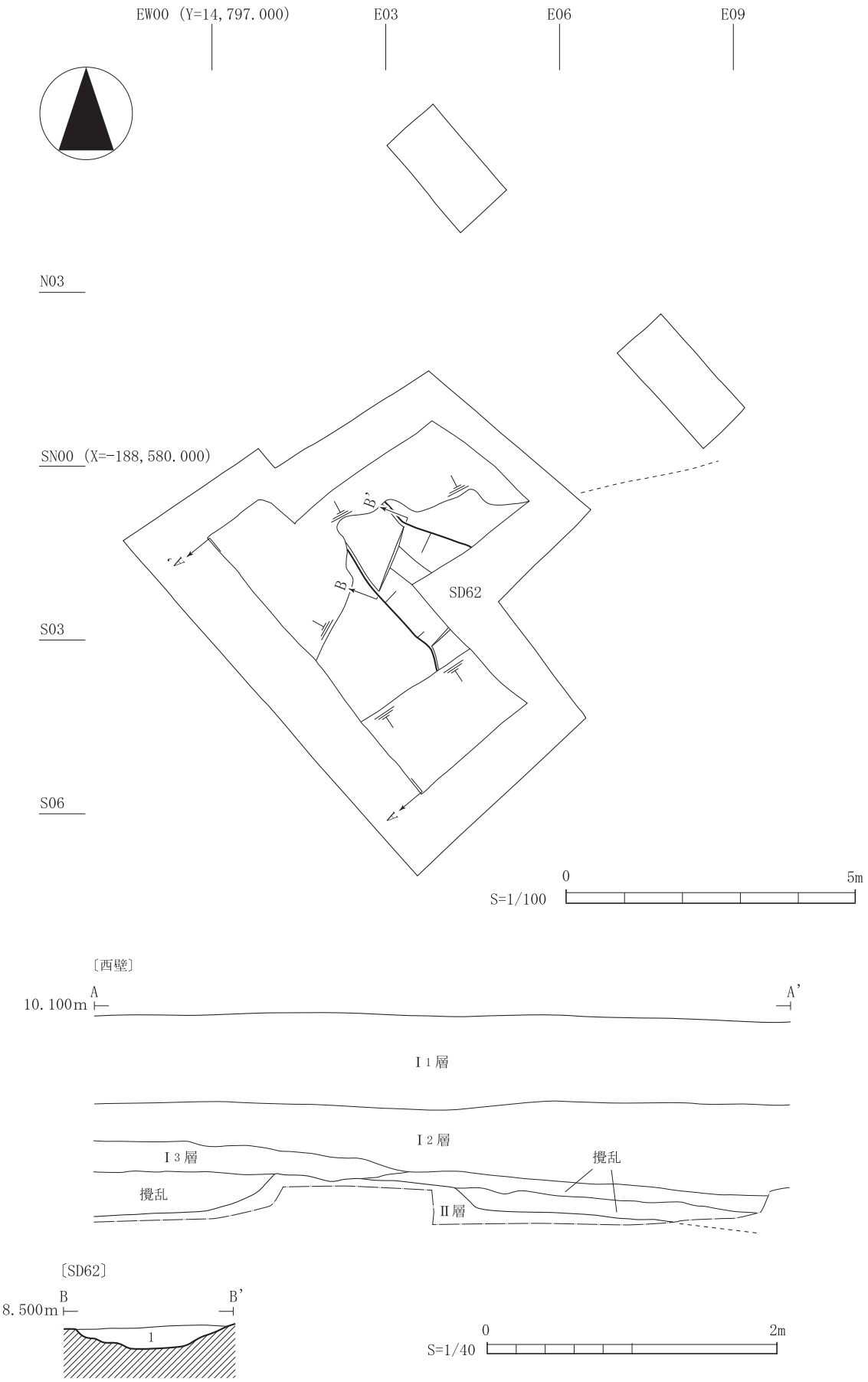
SD62溝跡（第２図）

調査区中央部で発見した溝跡であり、北側と南側が後世の攪乱によって破壊されている。規模は幅１～1.7ｍ、深さ約20㎝であり、南側ほど規模が大きくなっている。壁は西側中位に僅かな段があるものの、概ね緩やかに立ち上がっている。底面は平坦であり、調査区内での比高はほとんど認められない。埋土はにぶい黄褐色砂質土であり、明黄褐色粘質土が多量に混入している。

遺物は、土師器杯（B類）・甕の小片が出土している。

4　まとめ

溝跡１条を発見した。出土遺物が少ないため詳細な年代を検討するには限界があるものの、土師器甕B類が出土していることから概ね８世紀後葉以降のものと捉えておきたい。


EW00 (Y=14,797.000)
E03
E06
E09
N03
SN00 (X=-188,580.000)
S03
S06
SD62
A
A'
B
B'
S=1/100
0
5m
〔西壁〕
10.100m
Ⅰ1層
Ⅰ2層
Ⅰ3層
攪乱
Ⅱ層
〔SD62〕
8.500m
1
S=1/40
0
2m

第２図　調査区全体図

Ⅺ　野田遺跡第４次調査

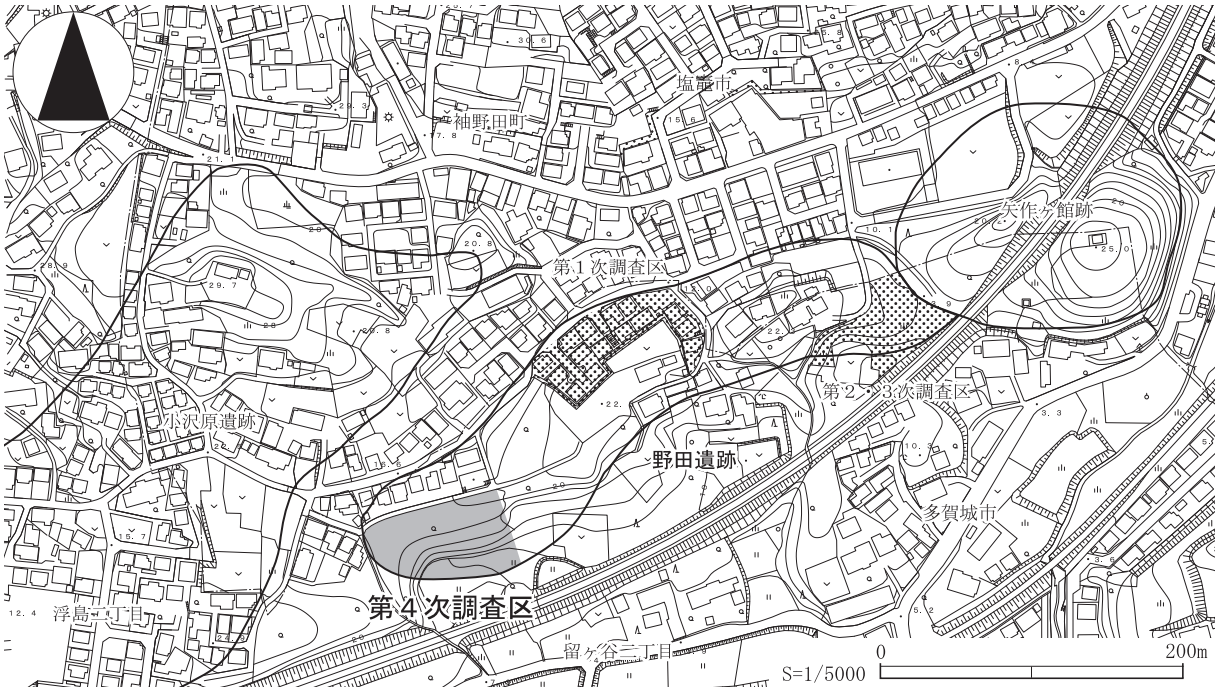
１　地理的・歴史的環境

野田遺跡は、多賀城市北東部の留ヶ谷地区から塩竈市袖野田地区にかけて所在する古代・中世の遺跡である。標高10～23mの東西方向に細長い島状を呈する低丘陵に立地する。その範囲は東西400m、南北90mである。

本遺跡では、これまで３次にわたる発掘調査を実施している。第１次調査は、平成７年に遺跡範囲の中央部北側で実施し、鉤形に屈曲する溝跡と、同じく鉤形に延びる小柱穴列を発見している。詳細は不明であるが、いずれも区画施設の一部と考えられている（註１）。第２・３次調査は平成13・14年に本遺跡の東端部から矢作ヶ館跡の西部にかけて実施したものであり、古代の竪穴住居跡、溝跡、土壙を発見した（註２）。また、昭和47年に実施した分布調査で土塁状の高まりを確認しており、矢作ヶ館跡と一連の中世城館とする考えがある（註３）。

２　調査に至る経緯と経過

本調査は、宅地造成計画に伴う確認調査である。平成19年４月に多賀城市留ヶ谷二丁目と浮島二丁目にまたがる区域での宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が、木村建材株式会社から提出された。計画は、東西方向に細長い低丘陵の頂部から南側斜面及び丘陵裾の平坦部を開発の対象とし、面積は約23,000㎡におよんでいる。このうち、北半部が野田遺跡の範囲にかかることから、その取り扱いについて申請者と協議を行った。本遺跡ではこれまで中央部北側と東端部で発掘調査を実施し、それぞれ遺



第１図　野田遺跡と周辺の遺跡

（註１）　多賀城市教育委員会『野田館跡』多賀城市文化財調査報告書第40集　1995

（註２）　多賀城市教育委員会・塩竈市教育委員会『野田遺跡　矢作ヶ館跡』多賀城市文化財調査報告書第79集・塩竈市文化財調査報告書第７集　2005

（註３）　加藤孝・野崎準「多賀城市内の館跡－中世陸奥国府周辺遺跡の考古学的考察－」『東北学院大学東北文化研究所紀要　第５号』 1973

構を発見している・また、昭和47年に実施した分布調査においては「中央に土壇、南北に高さ約１m、長さ50m以上の土塁を設け、東西に２条の空壕を切る。井戸跡らしきものも中央近くに残る」といった成果が記録されている。このうち、土塁については、規模の点で一致する東西方向に延びる高まりを現在確認することができるが、その他の遺構については不明である。

これらのことをふまえて、対象地内での遺構の有無の確認と分布状況の把握を目的とした確認調査が必要であることを申請者に対し回答したところ、承諾が得られたことから今回の調査の実施に至ったものである。なお、対象地は丘陵部が雑木林、南側平坦部が水田であるが、このうち調査区（トレンチ）を設定することが可能な西半部の約6,800㎡を今年度の調査対象地とし、平成19月11月６日から12月11日にかけて確認調査を実施した。

３　調査成果

１トレンチ

竪穴住居跡１軒、土塁状の高まり１条を発見した。土塁状の高まりは、基底部で幅2.３～2.７m、高さは比高が大きい南側でみると0.４～0.７mである。竪穴住居跡は、調査区南半部で検出した。南側が調査区外にかかるため全体の規模は不明であるが、北辺で5.65mを計る。調査区南側では削平のため地山が露出しており、東辺で認められるカマド煙道部も先端の約半分が残存しているにすぎない。遺物は、カマド付近からロクロ調整の土師器甕、須恵器杯・甕が出土している。

２トレンチ

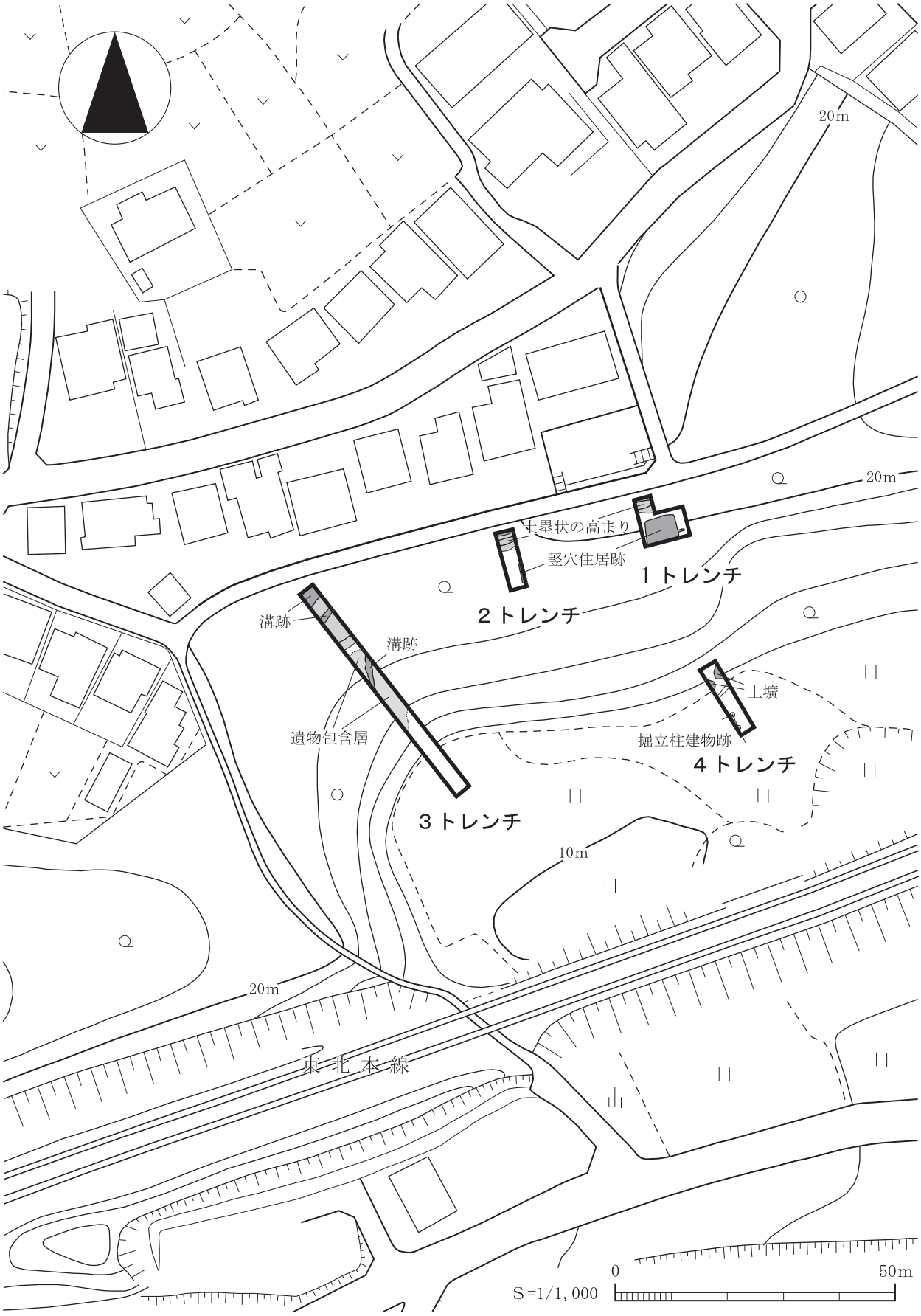
竪穴住居跡１軒、土塁状の高まり１条、溝跡１条を発見した。土塁状の高まりは、基底部で幅2.８～3.０m、高さは0.８～0.９mである。断面観察では地山上に旧表土が認められ、その上に積土していることが確認できる。旧表土から土師器甕、須恵器杯・甕が出土している。竪穴住居跡は、調査区南半部の東壁際で検出した。大部分が調査区外にかかるため全体の規模は不明であるが、西辺で3.80mを計る。南半部は削平のため、床面と周溝がすでに露出している。

３トレンチ

溝跡４条、土壙１基を発見した。土層の堆積状況を見ると、北半部では南側に傾斜する地山上に旧表土等の堆積土が約60㎝の厚さで認められ、南半部では旧表土と地山の間に10世紀前葉に降下した灰白色火山灰を含む堆積層（a層）が確認できる。溝跡は北半部で東西に並行するものが２条あり、中央付近ではa層上面で南北方向のものが１条、その下層で１条検出している。a層上面で検出した溝跡は、長さは約８m以上、幅0.65～1.05mである。土壙は、a層下層で確認している。また、中央付近では古代の遺物包含層を約18mにわたって確認した。厚さは最大約70㎝である。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・瓶・甕、丸・平瓦が出土している。

４トレンチ

掘立柱建物跡１棟、土壙２基、ピットを発見した。このうち、掘立柱建物跡は南側の水田部で確認したものであり、南北方向に並ぶ２基の柱穴を検出した。柱穴は、平面形が方形を呈し、規模は一辺65～80㎝である。２基の土壙は、北側の丘陵裾部で検出したものである。いずれも、地山上に堆積した灰白色火山灰を含む薄い土層の上面から掘り込まれている。


20m
20m
土墨状の高まり
竪穴住居跡
1トレンチ
2トレンチ
溝跡
溝跡
遺物包含層
土壙
掘立柱建物跡
4トレンチ
3トレンチ
10m
20m
東北本線
0
50m
S=1/1,000

第2図　トレンチ配置図

４．まとめ

（１）　調査対象地内に設定した４本のトレンチすべてにおいて遺構を発見した。発見遺構は、竪穴住居跡２軒、掘立柱建物跡１棟、土塁状の高まり１条、溝跡５条、土壙３基等である。このことより、当該地には広く遺構が分布していることが明らかになった。その分布状況をみると、丘陵頂部付近に最も遺構が集中し、ついで丘陵裾部にもある程度のまとまりがみられる。中間の斜面部では遺構は稀薄であるが、広い範囲に古代の遺物包含層が存在すると推定される。

（２）　１・２トレンチで検出した竪穴住居跡、４トレンチで検出した掘立柱建物跡、３トレンチで灰白色火山灰を含む堆積層の下で検出した溝跡や土壙などは古代の遺構の可能性がある。土塁状の高まりなどの遺構については、古代以降のものである。

野田遺跡写真図版

1トレンチ竪穴住居跡検出状況（東より）

1トレンチ土塁状の高まり断面（東より）

2トレンチ全景（南より）

2トレンチ土塁状の高まり断面（東より）

3トレンチ全景（北より）

3トレンチ・溝跡断面（東より）

3トレンチ中央部断面（南東より）

4トレンチ全景（南より）

報　告　書　抄　録

ふりがな	たがじょうしないのいせき２
書名	多賀城市内の遺跡２
副書名	平成19年度発掘調査報告書
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第91集
編著者名	島田敬、武田健市、村松稔
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985-0873　宮城県多賀城市中央二丁目27番1号　TEL：022-368-0134
発行年月日	西暦2008年3月21日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高崎遺跡 （第62次）	宮城県多賀城市 留ヶ谷一丁目95番10	042099	18018	38度 18分 2秒	141度 0分 12秒	20070409 20070418	55㎡	個人住宅 建設
高崎遺跡 （第63次）	宮城県多賀城市 高崎一丁目15-21、15-49	042099	18018	38度 18分 6秒	141度 0分 4秒	20070423 20070511	112㎡	個人住宅 建設
市川橋遺跡 （第62次）	宮城県多賀城市 城南一丁目４－３外３筆	042099	18008	38度 17分 57秒	140度 59分 14秒	20070604 20070720	174㎡	個人住宅 建設
市川橋遺跡 （第64次）	宮城県多賀城市 城南二丁目８－４の一部	042099	18008	38度 17分 48秒	140度 59分 23秒	20070903 20071012	82㎡	個人住宅 建設
市川橋遺跡 （第65次）	宮城県多賀城市 城南二丁目８－４の一部	042099	18008	38度 17分 47秒	140度 59分 24秒	20070905 20071012	61㎡	個人住宅 建設
市川橋遺跡 （第66次）	宮城県多賀城市 城南二丁目２－８の一部	042099	18008	38度 17分 50秒	140度 59分 22秒	20070925 20071016	32㎡	個人住宅 建設
市川橋遺跡 （第67次）	宮城県多賀城市 城南一丁目９－１、９－２	042099	18008	38度 18分 0秒	140度 59分 18秒	20071127 20071226	57㎡	個人住宅 建設
山王遺跡 （第62次）	宮城県多賀城市 山王字東町浦31－６	042099	18013	38度 17分 58秒	140度 58分 29秒	20070719 20070827	91㎡	個人住宅 建設
小沢原遺跡 （第11次）	宮城県多賀城市 浮島二丁目97－９	042099	18043	38度 18分 14秒	140度 59分 57秒	20071022 20071025	22㎡	個人住宅 建設
野田遺跡 （第４次）	宮城県多賀城市 留ヶ谷二丁目、 浮島二丁目	042099	18023	38度 18分 15秒	141度 0分 11秒	20071106 20071211	262㎡	宅地造成

所収遺跡	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高崎遺跡（第62次）	集落・城館	奈良 平安	掘立柱建物	土師器・須恵器	
		中世以降	掘立柱建物		
高崎遺跡（第63次）	集落・城館	平安	溝	須恵系土器	
		中世以降	柱列		
市川橋遺跡（第62次）	集落・都市	奈良 平安	掘立柱建物・溝・土壙	土師器・須恵器	
市川橋遺跡（第64次）	集落・都市	奈良 平安	掘立柱建物・溝・土壙	土師器・須恵器・墨書土器・油煙付着土器	
市川橋遺跡（第65次）	集落・都市	奈良 平安	掘立柱建物・井戸・溝・土壙	土師器・須恵器・墨書土器・ヘラ書き土器・油煙付着土器・挽物台付皿・横槌	８世紀後葉～９世紀初め頃の井戸発見
市川橋遺跡（第66次）	集落・都市	奈良 平安	河川	土師器・須恵器・瓦・石帯（丸鞆）・金属製品	
市川橋遺跡（第67次）	集落・都市	奈良 平安	掘立柱建物・溝・土壙	土師器・須恵器・須恵系土器	10世紀前葉以降の建物発見
山王遺跡（第62次）	集落・都市	中世 近世	掘立柱建物・井戸・溝・土壙	かわらけ・元祐通寶・寛永通宝	中世の建物群発見
		奈良 平安	溝・土壙	土師器	幅４ｍの区画溝発見
		古墳時代	水路	土師器・石製模造品	大規模な水路発見
小沢原遺跡（第11次）	集落	古代	溝跡		
野田遺跡（第４次）	集落	古代	掘立柱建物・竪穴住居・溝・土壙	土師器・須恵器	
		中世以降	土塁状の高まり		
要　約					

多賀城市文化財調査報告書第91集

多賀城市内の遺跡２

― 平成19年度発掘調査報告書 ―

平成20年3月21日発行

編集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番１号
電話　（022）368 － 0134
発行　多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目１番１号
電話　（022）368 － 1141
印刷　株式会社鈴木印刷所
宮城県石巻市蛇田字新谷地前121
電話　（0225）22 － 4101